埼玉県立史跡の博物館紀要

創刊号

Contents

比企における弥生～古墳時代前期の集落の立地について　中山浩彦　1

古墳壁画の狩猟図について　若松良一　11

吉見百穴をめぐる人々 特別展「吉見の百穴と東日本の横穴墓」によせて　昼間孝次　21

さきたまの津を探る　井上尚明　31

「寄り合い」の開催について　浅野晴樹　43

企画展「武蔵武士と寺院」記念講演会・シンポジウムのアンケート結果について　君島勝秀　55

埼玉の大型古墳一覧（1）　宮　昌之　59

松山城主上田氏の系譜と比企郡進出について　梅沢太久夫　（1）

埼玉県立史跡の博物館紀要
創　刊　号

目　　次

比企における弥生～古墳時代前期の集落の立地について……中　山　浩　彦……　1

古墳壁画の狩猟図について……若　松　良　一……11

吉見百穴をめぐる人々
特別展「吉見の百穴と東日本の横穴墓」によせて……昼　間　孝　次……21

さきたまの津を探る……井　上　尚　明……31

「寄り合い」の開催について ……浅　野　晴　樹……43

企画展「武蔵武士と寺院」記念講演会・
シンポジウムのアンケート結果について……君　島　勝　秀……55

埼玉の大型古墳一覧(1) ……宮　　昌　之……59

松山城主上田氏の系譜と比企郡進出について……梅　沢　太久夫……(1)

はじめに

昨年度まで「さきたま資料館」、「歴史資料館」という名前で親しまれてきた、二つの県立資料館が、県立博物館施設の再編整備計画に伴い、本年度からそれぞれ、「さきたま史跡の博物館」、「嵐山史跡の博物館」と名称を改め、「埼玉県立史跡の博物館」グループとして一体的な運営を行うこととなりました。

「さきたま史跡の博物館」は、6世紀代を中心に造られた国指定史跡「埼玉（さきたま）古墳群」の中に所在し、また、「嵐山史跡の博物館」は、15世紀に現在の形になったと考えられる国指定史跡「菅谷（すがや）館跡」の中に所在することから、「大地に刻まれたいにしえのロマンを再発見する博物館」を共通の理念として、再出発したものであります。

両館とも、史跡に関する資料その他の考古資料を基盤として、埼玉古墳群、菅谷館跡という埼玉を代表する史跡を屋外展示物に見立てた“オープン・エアー・ミュージアム”に、室内展示を組み合わせた博物館として運営を行うこととなりました。また、調査の第一線で活躍する研究者と学芸員が、最新の情報を交えながら話しをする「さきたま講座」、「歴史講座」をそれぞれ開催するほか、各種体験講座の開催や、学習支援活動に協力しながら取り組んでいるところであります。

このような状況のなかで、「紀要」の編集についても共同で取り組むこととし、史跡の博物館グループとしての第1号をこの度刊行することができました。新生博物館のスタートの年度であり、様々な事業を行いながらでありましたが、日ごろの調査と研究の成果を、さきたまから4本、嵐山から4本の合わせて8本収録することができました。今後ともより一層の研鑽を積み、さらに内容の充実に努めたいと考えておりますので、御高覧いただき、激励を賜ることができれば幸いに存じます。

最後になりましたが、当館の運営に日ごろ格別の御指導、御協力いただいております関係各位に対し、厚くお礼を申し上げますとともに、今後とも一層の御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年3月

埼玉県立さきたま史跡の博物館
埼玉県立嵐山史跡の博物館

比企における弥生～古墳時代前期の集落の立地について

中　山　浩　彦

はじめに

昭和60年代のバブル景気により株価や地価が高騰が続いたのも、まるで泡のように弾けて経済が一気に冷え込んだ結果、公共・民間の大規模工事等に主要因をおく発掘調査も大きな影響を受けた。右肩上がりで増え続けていた遺跡の発掘調査件数も、平成８年度をピークにして、全国的に減少化傾向にある。埼玉県では不景気の波を大きく受け、平成４年度のピーク時に500件あった発掘件数が平成16年度には213件にまでほぼ半減し、昭和50年代後半の件数にまで落ち込んでいる状況である。遺跡の取り扱い基準の適用により、遺跡を掘らずに保存する方向にシフトされた体制の変化もあり、調査件数の減少化傾向にある。埼玉県では、これまでに高速自動車道・新幹線建設、工業団地建設、圃場整備、ゴルフ場造成等による大規模な開発により、遺跡は破壊されてこの世から消滅してしまったが、調査担当者等の努力により新しい知見が加わり、考古学研究の発展に大きな成果を上げてきた。比企地域においても平成４年度の51件の発掘件数が、近年では年間20件前後に減少している。

将来的に発掘調査件数が飛躍的に増加するとは考えにくく、比企地域における発掘調査の成果をここで一旦まとめておく必要性を感じた。そこで本稿では、まず該期の集落立地について検討することにしたい。

1　比企地域の地形概略

比企郡は、埼玉県のほぼ中央に位置し、埼玉県の形をそのまま縮小したような東西に細長い形状を呈した地域である。昭和40年代の一時期にはゴルフ場建設等による開発の波が押し寄せたが、今でも各地の至るところには里山の景観を多く残している自然豊かな地域である。

地形的には、関東山地の東端にあたる外秩父山地の外縁にあり、郡内の市町村の大半が広義の比企丘陵上に位置している。比企丘陵は、北側は荒川により櫛挽台地と、南側は越辺川により入間台地と南北にそれぞれ大きく分断されている。また、比企丘陵の北側にある江南台地は東流する荒川水系の和田吉野川により分断される。標高は秩父に近い地点の西側では約180m、東側では約80mを測る。ほぼ中間を流れる都幾川の開析谷によってさらに南北に二分され、北側を比企北丘陵（比企丘陵）、南側を比企南丘陵（岩殿あるいは物見山丘陵）と呼称されている。比企北丘陵の東端に舌状に残る丘陵は、吉見丘陵といわれ、吉見百穴、黒岩横穴墓群といった古墳時代後期の横穴墓群が構築されている。また、市野川と都幾川に挟まれた洪積台地は、東松山台地と呼ばれ、沖積地との比高差も10m前後であることからも、比企南丘陵の先端に正三角形をした洪積台地である高坂台地とともに、比企地域で特に遺跡が密集した範囲となっている。各丘陵や台地には大小河川によって開析された小さな谷が八ツ手状に入り組み、さらに複雑な地形を呈している。また、比企郡西部に位置する吉見町から川島町にかけては、沖積地である標高15m前後の荒川低地が広がりをみせ、荒川や市野川によって形成された自然堤防が発達している。

2　集落の様相（第１図・第１表）

本項では現在の行政区分に従って、各時期の遺跡や遺物について概観することにする。なお、当地域では弥生時代前期から中期前葉までの遺構・遺物はこれまでに確認されていない。

(a)　東松山市

当市は、水稲可耕に適した沖積地を望む台地や丘陵部が発達しており、且つ昭和30年代以降からの大規模開発に伴う発掘調査件数が多いことから該期の遺跡が多数確認されている。

弥生時代中期の遺跡は、岩鼻遺跡（１）、雉子山遺跡（２）、附川遺跡（３）、西浦遺跡（４）、天神原遺跡（５）、代正寺遺跡（６）、大西遺跡（７）、銭塚遺跡（８）、反町遺跡（９）で集落跡などが検出されている。岩鼻遺跡は、県西部の弥生時代中期から後期にかけての櫛描文系土器の標式遺跡となった遺跡で、昭和35年のＣ区の調査を鏑矢にして数次の発掘調査が実施されている。調査の結果、弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけての住居や方形周溝墓、古墳時代後期の古墳群が検出されている。代正寺遺跡は、高坂台地のほぼ中央に位置し、弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけての住居跡が89軒、弥生時代後期の方形周溝墓14基、古墳時代前期の方形周溝墓１基などが検出された大規模集落である。高坂台地では、古墳時代後期においても20m級の小円墳で構成される古墳群や集落が形成され、弥生から古墳時代にかけての遺跡が集中していることから、比高差10mの沖積地を臨むこの台地一帯は集落を営むには絶好の適地であったことがうかがえる。

後期では、吉ヶ谷遺跡（10）、八幡遺跡（11）、観音寺遺跡（12）、篭田遺跡（13）、東形遺跡（14）、高坂三番町遺跡（15）、杉の木遺跡（16）、桜山古墳群（17）、根平遺跡（18）、駒堀遺跡（19）などで調査が実施されている。吉ヶ谷遺跡は、比企北丘陵上に立地する、弥生時代後期の標式遺跡となっている遺跡である。ゴルフ場造成に伴い、住居跡が１軒調査されているが、集落像は不明な点が多い。駒堀遺跡は、比企南丘陵の標高60mの尾根先端部に位置し、吉ヶ谷期と五領期の集落のほぼ全域が調査された。吉ヶ谷期の集落は２時期７軒単位で構成されていたと考えられている。住居は、長方形プランを呈し、床面に複数の炉を設けるものが多い。遺物は、ミニチュア土器が多量に出土しているのが特筆される。遺物散布地では、宮本遺跡（20）、緑山（21）、上後原遺跡（22）、高坂一番町遺跡（23）、高坂二番町遺跡（24）、大門遺跡（25）、岩の上遺跡（26）、古吉海道遺跡（27）、鷲神社裏遺跡（28）、かんべ塚（29）、下松古墳群（30）、向台遺跡（31）、庚塚（32）、中打出遺跡（33）、扇谷遺跡（34）などがある。

古墳時代前期では、上松本遺跡（35）、五領遺跡（36）、番清水遺跡（37）、下道添遺跡（38）、古凍根岸裏遺跡（39）、下寺前遺跡（40）などで調査が実施されている。五領遺跡は、南関東の古式土師器の標式遺跡となった遺跡で、正式な調査報告書が未刊のため集落の実態は不明であるが、出土遺物において東海・北陸・畿内・山陰系などの外来系土器が多量に出土し、その特異性が際立つ遺跡である。番清水遺跡では、約14mの大形住居跡や一辺約22mの大形方形周溝墓１基などが検出されている。五領遺跡にも近接しており、当地域の支配者の動向を考える上で重要な遺跡である。沖積地に向かって細長く張り出した松山台地先端部では、下道添遺跡、古凍根岸裏遺跡から弥生時代終末から古墳時代前期にかけての方形周溝墓群が検出され、東海系の土器が多数出土している。

(b)　小川町

町域では古墳時代前期の集落が１ヶ所確認されているのみである。

越祢遺跡（１）は、標高約65mの台地緩斜面に営まれた集落跡である。３回の調査が実施され、古墳時代前期の遺構は、第１次調査で一辺約５mの方形の住居跡が１軒検出された。住居跡床面直上からＳ字甕や坩などが出土している。床面が焼けていることから、消失住居の可能性が高い。

なお、本集落北側の丘陵上に前期古墳の可能性が指摘されている新田第１号墳、鷹巣山古墳の２基の小円墳が存在する。

遺物散布地としては、弥生時代後期の宮ノ脇遺跡（２）、小坂遺跡（３）、古墳時代前期では日向遺跡（４）、峯原遺跡（５）、岡原遺跡（６）が確認されている。

(c) 川島町

町内を東西方向に横断する圏央道建設工事による発掘調査や町史編纂事業に伴う分布調査などにより、近年まで該期の遺跡の空白地帯であった当地域においても、弥生時代末から古墳時代前期にかけての様相が次第に明らかになりつつある。

村並遺跡（６）では、弥生時代中期と思われる条痕文土器の破片がトレンチ内から出土しており、荒川扇状地で検出されている北島遺跡、池上遺跡のような弥生時代中期後半の集落が自然堤防上に展開していた可能性も考えられ、今後の調査が期待される遺跡である。

弥生時代後期段階は不明な点が多いが、古墳時代前期になって遺跡数が爆発的に増加する。荒川が形成した自然堤防上には、平沼一丁田遺跡（１）、白井沼遺跡（２）、富田後遺跡（３）、元宿遺跡（４）、尾崎遺跡（５）などの遺跡が調査されており、溝を方形に区画した周溝と呼ばれる遺構が各遺跡から多数検出されている。形態が近似する方形周溝墓や竪穴住居跡も同一遺跡内には検出されており、大部分の遺跡が現在も調査中であるため詳細は明らかになっていないが、低地部の集落構成を考える上で今後注目すべき地域である。

白井沼遺跡は、第２次調査で住居跡２軒、掘立柱建物跡１棟、周溝５基、井戸跡２基などが検出された。該期の遺構同士の重複が著しいが、弥生時代後期や古墳時代中期以降の遺構や遺物が検出されていないことから、ごく短期間で集落が廃絶されたと考えられる。尾崎遺跡では、古墳時代前期の周溝５基、土壙１基が検出されている。

他に、古墳時代前期の遺物散布地として、西谷遺跡（７）、廣徳寺古墳（８）、大塚古墳（９）、柳町遺跡（10）、宮ヶ谷戸遺跡（11）、極楽寺遺跡（12）、安楽寺遺跡（13）が確認されているが、今後も自然堤防という立地条件から未知の遺跡が発見される可能性は高い。

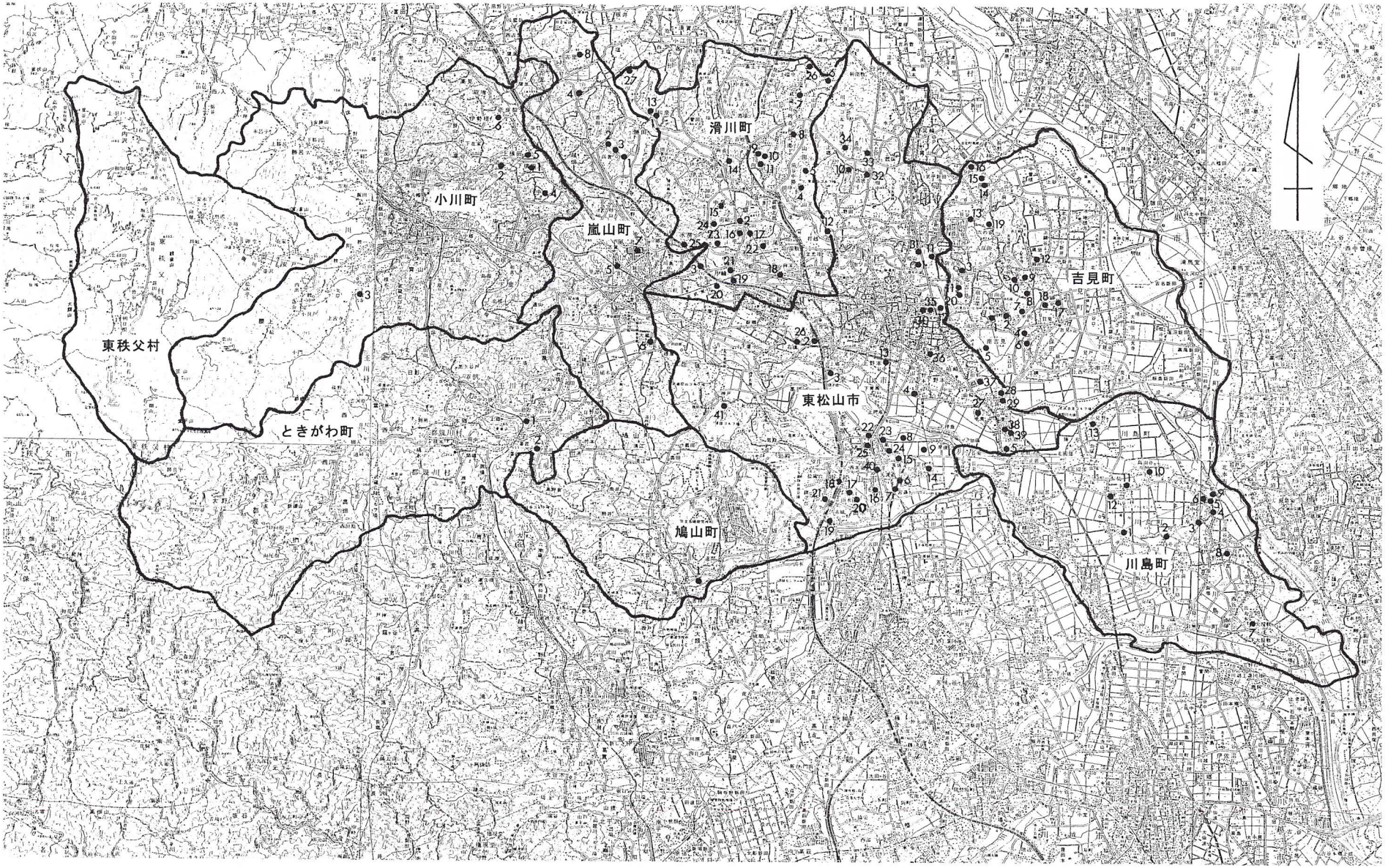
(d) ときがわ町

平成18年２月に郡西部に位置していた玉川村と都幾川町が合併してできた当町域では、これまでに大規模な開発行為が少なく、遺跡の発掘調査件数も多くないため、該期の遺跡が検出されているのは２ヶ所のみである。

破岩遺跡（１）は、標高約80mの都幾川に沿った玉川台地上に立地する弥生時代中期の遺跡である。円形の浅い土壙が１基検出され、信州の影響を強く受けた台付甕と平底の甕が各１点出土している。秩父地域では、秩父市下ッ原遺跡・薮遺跡などの中部高地系の土器を出土する弥生時代中期後半の遺跡が多数確認されており、遺跡の立地条件が類似することから今後も周辺で同時期の遺跡が検出される可能性も考えられる。衆生ヶ谷戸遺跡（２）は、都幾川が形成した標高約80mの河岸段丘上に立地する遺跡である。遺構は、井戸跡あるいは墓の可能性がある土壙が１基検出された。覆土上層から土師器の壺・甕片が各１点出土しており、五領期末から和泉期にかけての遺構と考えられる。

(e) 滑川町

町域では、丘陵上から該期の包蔵地が多数確認されているが、この時期の調査例が少なく集落の実態は不明な部分が多い。



第１図　比企郡の遺跡分布図

第1表　遺跡地名表

	番号	遺跡名	立地	標高	時代 弥生中	弥生後	古墳前	検出遺構	備考	文献
東松山市	1	岩鼻遺跡	岩鼻台地	35m	○	○	○	住居、周溝墓	土製勾玉、磨製石鏃	江原1993ほか
	2	雉子山遺跡	松山台地	30m	○			住居３	磨製石鏃４	栗原1973ほか
	3	附川遺跡	河岸段丘	30m	○？		○	住居６、周溝墓６	蛇紋岩製管玉	今泉1974
	4	西浦遺跡	松山台地	20m	○	○		住居８、周溝墓３、土壙６ほか		山本1997
	5	天神原遺跡	松山台地	20m	○	○？		住居、環濠？ほか		
	6	代正寺遺跡	高坂台地	30m	○	○	○	住居89、周溝墓15、土壙32ほか	土製勾玉、磨製石鏃、Ｓ字甕	鈴木1991
	7	大西遺跡	高坂台地	25m	○	○	○	壺棺墓２(弥中)、住居、周溝墓、土壙ほか	土製勾玉、磨製石鏃(弥後)	鈴木1991
	8	銭塚遺跡	自然堤防	20m	○			土器棺墓		
	9	反町遺跡	自然堤防	20m	○	○	○	住居、周溝墓(弥)、住居、周溝墓(古)	古墳前期の玉造	
	10	吉ヶ谷遺跡	比企北丘陵	50m		○		住居１		金井塚1965
	11	八幡遺跡	岩鼻台地	30m		○	○	住居、土壙墓、周溝墓ほか		金井塚1968ほか
	12	観音寺遺跡	松山台地	20m		○	○	住居、周溝墓	銅釧、鉄剣(弥)	渡辺1996ほか
	13	篭田遺跡	松山台地	25m		○	○	住居１(弥)、住居８、周溝墓？(古)	北陸系器台	村田1982
	14	東形遺跡	高坂台地	30m		○	○	住居、環濠？ほか	土製勾玉	宮島1999
	15	高坂三番町遺跡	高坂台地	30m		○		住居、周溝墓ほか		
	16	杉の木遺跡	高坂台地	30m		○	○	住居16(弥)、住居３、周溝墓１(古)ほか	土製勾玉・紡錘車	大谷2006ほか
	17	桜山古墳群	比企南丘陵	30m		○		住居３		小久保1981
	18	根平遺跡	比企南丘陵	55m		○	○	住居６(弥)、住居２(古)		水村1980
	19	駒堀遺跡	比企南丘陵	60m		○	○	住居14、周溝墓１(弥)、住居３(古)	ミニチュア土器(弥)、紡錘車未製品２(古)	谷井1974
	20	宮本遺跡	比企南丘陵	30m		○？	○？			
	21	緑山	比企南丘陵	60m		○？	○？			
	22	上後原遺跡	高坂台地	30m		○？				
	23	高坂一番町遺跡	高坂台地	30m		○？	○？			
	24	高坂二番町遺跡	高坂台地	30m		○	○？			
	25	大門遺跡	高坂台地	35m		○？	○？			
	26	岩の上遺跡	松山台地	45m		○？				
	27	古吉海道遺跡	松山台地	25m		○？				大塚1988
	28	鷲神社裏遺跡	松山台地	30m		○？	○？			
	29	かんべ塚	松山台地	30m		○？				
	30	下松古墳群	松山台地	20m		○？				
	31	向台遺跡	岩鼻台地	35m		○？	○？			
	32	庚塚	比企北丘陵	45m		○？				
	33	中打出遺跡	比企北丘陵	45m		○？				
	34	扇谷遺跡	比企北丘陵	50m		○？	○？			
	35	上松本遺跡	松山台地	25m		○	○	住居５、周溝墓１(古)		江原2004
	36	五領遺跡	松山台地	30m		○	○	住居	多量の外来系土器	金井塚1963ほか
	37	番清水遺跡	松山台地	25m		○	○	住居１(弥)、住居23、周溝墓１(古)	大形住居・周溝墓	金井塚1968
	38	下道添遺跡	松山台地	25m		○	○	住居、周溝墓14ほか	東海系土器	坂野1987ほか
	39	古凍根岸裏遺跡	松山台地	25m		○？	○	住居４、周溝墓７	東海系高坏	村田1984
	40	下寺前遺跡	高坂台地	30m		○	○	住居、周溝墓１(古)ほか	Ｓ字甕	宮島1990
	41	芝場遺跡	比企南丘陵	80m			○？			
小川町	1	越袮遺跡	台地	65m		○？	○	住居１	Ｓ字甕	高橋1991ほか
	2	宮ノ脇遺跡	台地	70m		○？				
	3	小坂遺跡	河岸段丘	100m		○？				
	4	日向遺跡	台地	60m			○？			
	5	峯原遺跡	台地	70m			○？	土壙１？		吉田2005
	6	岡原遺跡	台地	70m			○？			
川島町	1	平沼一丁田	自然堤防	12m			○	周溝ほか		
	2	白井沼遺跡	自然堤防	12m			○	住居２、建物跡１、周溝５、井戸２ほか	Ｓ字甕、大廓式壺	中山2005
	3	富田後遺跡	自然堤防	12m			○	周溝、周溝墓、井戸ほか		川島町2006
	4	元宿遺跡	自然堤防	13m			○	周溝10、周溝墓６ほか		川島町2006
	5	尾崎遺跡	自然堤防	13m			○	周溝５、土壙１	北陸系器台	津田2002
	6	村並遺跡	自然堤防	13m	○？		○？			川島町2006
	7	西谷遺跡	自然堤防	12m			○？			川島町2006
	8	廣徳寺古墳	自然堤防	12m			○？			川島町2006
	9	大塚古墳	自然堤防	14m			○？			川島町2006
	10	柳町遺跡	自然堤防	13m			○？			川島町2006
	11	宮ヶ谷戸遺跡	自然堤防	13m			○？			川島町2006
	12	極楽寺遺跡	自然堤防	13m			○？			川島町2006
	13	安楽寺遺跡	自然堤防	13m			○？			川島町2006
ときがわ町	1	破岩遺跡	玉川台地	80m	○			土壙１	中部高地系甕	埼玉考古2003
	2	衆生ヶ谷戸遺跡	河岸段丘	80m			○	土壙１		金子1982
滑川町	1	船川遺跡	比企北丘陵	70m		○	○	住居３(弥)、住居１(古)	土製勾玉３(弥)	金井塚1987
	2	大谷遺跡	比企北丘陵	65m		○	○	住居３(弥)、住居５(古)	滑石製勾玉(古)	金井塚1973
	3	屋田遺跡	比企北丘陵	50m		○	○	住居４(弥)、住居16(古)	土製勾玉１(古)	今井1984
	4	追越遺跡	比企北丘陵	65m			○	住居		
	5	新井遺跡	比企北丘陵	70m		○？				
	6	追山遺跡	比企北丘陵	70m		○？				
	7	弁財天遺跡	比企北丘陵	70m		○？				
	8	後谷遺跡	比企北丘陵	50m		○？				
	9	栗谷遺跡	比企北丘陵	60m		○？				
	10	栗谷東遺跡	比企北丘陵	60m		○？				
	11	糟沢古墳群	比企北丘陵	60m		○？				
	12	城原遺跡	比企北丘陵	40m		○？				
	13	船川西遺跡	比企北丘陵	70m		○？				
	14	東両表遺跡	比企北丘陵	50m		○？				
	15	内郷遺跡	比企北丘陵	65m		○？				
	16	平谷遺跡	比企北丘陵	50m		○？	○？			
	17	寺谷遺跡	比企北丘陵	50m		○？				
	18	両家遺跡	比企北丘陵	40m		○？	○？			
	19	築地前遺跡	比企北丘陵	50m		○？	○？			
	20	金熊北Ａ遺跡	比企北丘陵	50m			○？			
	21	宮前遺跡	比企北丘陵	40m			○？			
	22	表遺跡	比企北丘陵	40m			○？			
	23	西平遺跡	比企北丘陵	40m			○？			
	24	坂の台遺跡	比企北丘陵	50m			○？			
	25	寺ノ台遺跡	比企北丘陵	50m			○？			
	26	山の上遺跡	比企北丘陵	50m			○？			
	27	高原遺跡	比企北丘陵	70m			○？			
鳩山町	1	糀谷遺跡	平地部	35m			○	住居７、土壙１		金井塚2003
吉見町	1	大行山遺跡	吉見丘陵	50m	○		○	住居12、周溝墓１(弥)、住居16(古)ほか	中部高地系甕	弓1995
	2	久米田遺跡	吉見丘陵	50m		○	○	住居３(弥)、住居１(古)		吉見町1978
	3	八耕地遺跡	吉見丘陵	50m		○		周溝墓？１		吉見町1978
	4	三ノ耕地遺跡	荒川低地	15m	○？	○	○	住居、周溝墓ほか	パレス壺、前方後方型周溝墓	弓1997ほか
	5	西吉見条里遺跡	荒川低地	15m		○	○	水路跡、堰状遺構、杭列	多量の木製品	太田2005ほか
	6	北間ノ田遺跡	荒川低地	15m		○	○	周溝墓		
	7	山の上遺跡	吉見丘陵	30m		○？	○？			
	8	和名遺跡	吉見丘陵	25m		○？				
	9	丸山遺跡	吉見丘陵	20m		○？				
	10	萬神遺跡	吉見丘陵	40m		○？				
	11	十五耕地遺跡	吉見丘陵	50m		○？	○？			
	12	稲荷前遺跡	荒川低地	15m		○？				
	13	三ノ谷遺跡	吉見丘陵	40m	○？					
	14	田甲原遺跡	吉見丘陵	40m		○？				
	15	中山Ｂ遺跡	吉見丘陵	40m		○？				
	16	鍬柄山遺跡	吉見丘陵	40m		○？				
	17	下遺跡	荒川低地	15m			○			太田2003
	18	原遺跡	荒川低地	15m			○			
	19	五ノ谷遺跡	吉見丘陵	35m			○？			
	20	七耕地遺跡	吉見丘陵	50m			○？			
嵐山町	1	大野田西遺跡	比企北丘陵	70m	○？	○		住居25、土壙６、焼土ピット３	ミニチュア土器、土製勾玉10	佐藤1994
	2	蟹沢遺跡	比企北丘陵	90m		○		住居11、土壙１	東海系壺、土製勾玉２	川口1992
	3	芳沼入遺跡	比企北丘陵	90m		○		土壙２		川口1992
	4	姥谷遺跡	比企北丘陵	90m		○？				
	5	金平遺跡	比企北丘陵	60m		○？				村上2000
	6	行司免遺跡	河岸段丘	45m			○	住居11、周溝墓10	吉ヶ谷系壺、ミニチュア土器	植木1987・1988
	7	花見堂遺跡	菅谷台地上	50m			○	住居８	Ｓ字甕、土錘	金井塚1976
	8	北田遺跡	比企北丘陵	70m			○	住居２、土壙１	Ｓ字甕、蛇紋岩製勾玉	植木1987

調査が実施され遺跡の内容がある程度判明しているのは、船川遺跡（1）、大谷遺跡（2）、屋田遺跡（3）、追越遺跡（4）などである。船川遺跡は、標高約70mの比企北丘陵の平坦部に立地し、弥生時代後期の住居跡3軒と古墳時代前期の住居跡1軒が検出された。弥生時代の住居跡は長方形を呈し、遺物は吉ヶ谷式の壺・甕、土製勾玉などが出土している。大谷遺跡でも弥生時代後期の住居跡が3軒、古墳時代前期の住居跡が5軒が検出されている。屋田遺跡では、弥生時代後期吉ヶ谷期の住居跡が4軒検出されており、うち1軒からはベッド状遺構が検出されている。古墳時代では、前期の住居跡16軒の他に中期の住居跡が2軒、後期の円墳9基が検出されている。比企北丘陵上の追越遺跡では、約50軒の古墳時代前期の住居跡が調査されており、滑川流域における拠点的な集落であった可能性が考えられる。

弥生時代後期吉ヶ谷期の遺物散布地は、新井遺跡（5）、追山遺跡（6）、弁財天遺跡（7）、後谷遺跡（8）、栗谷遺跡（9）、栗谷東遺跡（10）、糟沢古墳群（11）、城原遺跡（12）、船川西遺跡（13）、東両表遺跡（14）、内郷遺跡（15）、平谷遺跡（16）、寺谷遺跡（17）、両家遺跡（18）、築地前遺跡（19）がある。古墳時代前期では、金熊北A遺跡（20）、宮前遺跡（21）、表遺跡（22）、西平遺跡（23）、坂の台遺跡（24）、寺ノ台遺跡（25）、山の上遺跡（26）、高原遺跡（27）などがこれまでに確認されている。

(f) 鳩山町

武蔵四大窯跡の一つである南比企窯跡群を擁する鳩山町では、弥生から古墳時代の遺跡が希薄な地域である。標高80～100mの丘陵地帯である本地域において、水稲農耕を基盤とする生活様式を持つ集団には適さなかったものと考えられる。

これまでに調査が実施された遺跡は、糀谷遺跡（1）の一ヶ所のみである。糀谷遺跡は、中小河川に挟まれた標高35mの平地部に立地する。検出された遺構は、古墳時代前期の住居跡7軒と土壙1基である。道路幅の調査で全体を調査できたものがないため、住居跡の全容は不明であるが、5m前後の小規模なものが多く、床面からは炉跡が検出されていないのが特徴である。該期の遺構同士の重複はないが、出土遺物から2時期以上に分けられる。

(g) 吉見町

弥生時代中期後半の遺跡は、低湿地を望む丘陵上に大行山遺跡（1）が立地する。住居跡12軒、方形周溝墓1基などが検出されている。遺物は、宮ノ台式土器が主体を占めるが、中部高地系の甕が少量ながら出土している。また、古墳時代前期の住居跡16軒、方形周溝墓1基、後期の古墳跡9基などが検出されている。

後期の遺跡は、久米田遺跡（2）、八耕地遺跡（3）、三ノ耕地遺跡（4）、西吉見条里遺跡（5）で調査が実施されている。八耕地遺跡では、吉ヶ谷式土器を出土する方形周溝墓の可能性がある土壙状遺構が検出されている。三ノ耕地遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての住居跡、前方後方型を含む方形周溝墓群などが検出されている。西吉見条里遺跡では、多量の木製品が出土した水路跡、堰状遺構などが検出されており、丘陵上に展開していた大行山遺跡、久米田遺跡などの集落の生産域であったと考えられる。遺物散布地としては、北間ノ田遺跡（6）、山の上遺跡（7）、和名遺跡（8）、丸山遺跡（9）、萬神遺跡（10）、十五耕地遺跡（11）、稲荷前遺跡（12）、三ノ谷遺跡（13）、田甲原遺跡（14）、中山2遺跡（15）、鍬柄山遺跡（16）がある。

古墳時代前期では、上記の遺跡の他には下遺跡（17）、原遺跡（18）、五ノ谷遺跡（19）、七耕地遺跡（20）がある。下遺跡では、建物跡と考えられる周溝遺構が1基検出されている。下遺跡に隣接する原遺跡では、豪族居館跡の可能性がある大溝が検出されている。

(h) 嵐山町

弥生時代後期の遺跡は、工業団地造成により大野田西遺跡（1）、蟹沢遺跡（2）、芳沼入遺跡（3）で発掘調査が実施されている。また、同時期の遺物散布地として姥谷遺跡（4）、金平遺跡（5）などがある。大野田西遺跡・蟹沢遺跡・芳沼入遺跡ともに標高70～90mの比企北丘陵上の小谷を挟んで隣接する遺跡で、吉ヶ谷期の遺構が検出された。大野田西遺跡では、住居跡25軒、土壙6基、焼土ピット3基が検出された。住居跡は、平面形態が長方形を呈するものが多い。炉跡は床面に複数検出される例が多く、大形住居の2軒には地床炉が5基設けられていた。蟹沢遺跡は、集落域のほぼ全体が調査され、住居跡11軒、土壙1基が検出された。住居跡は一辺約4～5mの方形プランで、重複はほとんど認められていない。芳沼入遺跡は、丘陵頂部周辺から長軸約3mの大型の土壙2基が検出された。周辺に同時期の墓域が検出されていないことから、墓壙であった可能性も考えられるだろう。

古墳時代前期では、行司免遺跡（6）、花見堂遺跡（7）、北田遺跡（8）で発掘調査が実施されている。行司免遺跡は、都幾川右岸の河岸段丘上に立地し、住居跡11軒、方形周溝墓10基が検出された。該期の遺構同士の重複はほとんど認められていない。方形周溝墓のうち2基には方台部に主体部が検出されている。また、中期の住居跡45軒、後期の円墳5基も検出されている。花見堂遺跡は、市の川の沖積地に移行する台地緩斜面上に立地し、住居跡8軒と後期の円墳2基が検出された。集落は、一辺7～10mの中・大形住居と5m前後の小形の住居跡群に分けられる。北田遺跡は、後期群集墳の古里古墳群中に位置し、住居跡2軒と土壙1基が検出された。3号住居跡出土の高坏は、脚部が柱状化しており、新しい様相を示す。

(i) 東秩父村

町域の標高が100mを優に超え、水田耕作に適した可耕地が少ないことから、弥生から古墳時代にかけての遺構や遺物は検出されておらず、今後も可能性としては低いと考えられる。

3　比企における集落の特徴

前項では、各市町村毎に発掘調査が実施された遺跡および埋蔵文化財包蔵地として周知されている遺物散布地の概観を行った。これらのデータは、開発等による遺跡調査の多寡や遺跡の立地条件等により大きく左右され、地域によりばらつきが認められる。自然堤防上に立地する遺跡が多い川島町、吉見町や東松山市などの低地部の開発が進めば、将来的には遺跡が多数検出されることは確実である。当時の集落動態を第1図で示した分布図のみで論じることは困難であるが、現況においていくつかの傾向を把握することができよう。

まず第一には、比企丘陵の西部から秩父山地に至る小川町、ときがわ町、鳩山町、東秩父村域では該期の遺跡分布密度が薄いことがあげられる。この点については、前項でも前述してきたように水稲農耕を主な生活基盤としていた弥生・古墳時代の集団が、標高100m前後の開発困難な土地を避け、より可耕に適した土地を選択したことが要因であると考えられる。

第二に、河川別で見た場合、該期の遺跡は越辺川と都幾川が合流する地点に位置する高坂台地と滑川、粕川などの市ノ川水系に集中している。一方、越辺川、槻川、都幾川の上流域では、該期の集落がほとんど確認されていないがこれについても、前述したように地形的条件による要因が大きいと考えられる。和田吉野川は、主に低地部を流路としているため、周知の遺跡がほとんど確認されていないが、熊谷市下田町遺跡のような大規模な集落跡が自然堤防上に検出される可能性が高い。

第三には、比企丘陵上を選地した集落の多くが、松山・高坂台地の集落と比較し、継続期間が比

較的短期であるという特徴があげられよう。標高50mを超える比企丘陵上に立地する遺跡の多くは、単位集団が10戸にも満たない小規模な集落構成をしており、一つの土器型式内で集落が廃絶されている。台地部の肥沃な低地部を控えた遺跡と比べ、畑作が主体となったと考えられる集落では、土地が疲労し、水資源にも乏しく、長期的な定住生活には不向きであったことが要因として考えられる。そのため、短期間で集落を移動せざるを得なかった結果と考えられる。川島町の自然堤防上の古墳時代前期の集落でも同様の傾向が認められるが、自然堤防上という立地条件から、河川の氾濫等による自然災害により集落を廃絶せざるを得なかったことが考えられる。

標高30m前後の高坂、松山台地上に立地する遺跡では、弥生時代中期後半から集落が形成され始め、古墳時代後期までの長期間、継続的に集落が営まれる拠点的な集落が多く認められる。水稲農耕を営む沖積地を臨む格好の適地であり、集落を継続していくための条件が揃っていたと考えられる。また、越辺川と都幾川の合流地点に位置する高坂台地上の代正寺遺跡、大西遺跡、高坂一～三番町遺跡などと低地部の銭塚遺跡、反町遺跡のように、同時期に台地上と沖積地に住み分けされた集落跡が検出されており、どのような集団体制であったのかは、詳細が公表されてからの検討課題としてあげられる。

最後に、吉ヶ谷式土器を主体とする集落は、沖積地を臨む丘陵端部や台地縁辺部に占地し、岩鼻式土器を主体とする集落は台地縁辺部から自然堤防上の微高地に占地する傾向があると金井塚氏らによって指摘されてきた問題がある。台地や丘陵上での調査事例は確実に増加しており、吉ヶ谷式土器を主体的に使用する集落跡の検出は増えているが、岩鼻式土器を主体にした集落跡の検出例が増えていないため、現段階においてもそれを立証できるような集落跡は検出されていない。ただ近年、吉ヶ谷式土器を主体的に出土する遺跡の中に、岩鼻式が客体的に出土する遺跡が検出されており、それらの遺跡を詳細に検討することにより、異型式の土器を使用する集団の関係性が明らかになる可能性がある。

おわりに

比企地域における弥生時代から古墳時代前期にかけての集落立地についての概観を行い、何点かの傾向を見出すことができた。本稿では、筆者の準備不足等もあり、各遺跡出土遺物の検討・分析を行えず、遺跡の時期については報告書記載の時期に準拠しているため、極めて雑駁なものとなってしまった感が歪めない。今後、吉ヶ谷式や岩鼻式土器の問題を含め、該期の集落として比企地域に特有の傾向が認められるのか、詳細な検討を加える必要がある。各遺跡の出土土器などの詳細な分析により、比企地域における単位集団の動態を探究できればと考えている。

また、本稿では遺構の問題についても論じることはできなかったが、川島町内で近年数多く検出されている「周溝」遺構については、従来から言われてきた古墳時代前期の墓制でよいのか、あるいは低地部特有の居住施設、祭祀施設なのかも検討事項として残されている。今後新たに機会を設け、該期の遺物・遺構の各論により当地域の集落像の解明を試みたいと考える。

参考文献

今井宏・井上尚明ほか『屋田・寺ノ台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第32集　1984

今泉泰之ほか『田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川』埼玉県遺跡発掘調査報告書第５集　埼玉県教育委員会　1974

植木弘『古里古墳群―北田遺跡・上土橋支群・駒込支群の発掘調査―』嵐山町遺跡調査会報告２　嵐山町遺跡調査会　1987

植木弘『行司免遺跡―遺構図版編―』嵐山町遺跡調査会報告３　嵐山町遺跡調査会　1987

植木弘『行司免遺跡―本文編―』嵐山町遺跡調査会報告４　嵐山町遺跡調査会　1988
植木弘『行司免遺跡―遺物図版編―』嵐山町遺跡調査会報告５　嵐山町遺跡調査会　1988
江原昌俊『岩鼻遺跡（第２次）』東松山市文化財調査報告書第21集　東松山市教育委員会　1993
江原昌俊・長井正欣『上松本遺跡（第２次）』東松山市遺跡調査会発掘調査報告書第２集　東松山市遺跡調査会　2004
太田賢一「吉見町三ノ耕地遺跡の調査」『第31回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか　1998
太田賢一『下遺跡』吉見町遺跡調査会発掘調査報告書　吉見町遺跡調査会　2003
太田賢一『西吉見条里遺跡―第１分冊―』吉見町埋蔵文化財調査報告書第２集　吉見町教育委員会　2005
大谷徹『杉の木遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第323集　2006
大塚実ほか『八幡・原山・古吉海道』東松山市文化財調査報告書第17集　東松山市教育委員会　1988
小川町『小川町の歴史　資料編１　考古』1999
小川町『小川町の歴史　通史編　上巻』2003
金井塚厚志・原野真祐・渡辺一『今宿東遺跡群Ⅰ―天神台・天神台東・糀谷・小路谷・台遺跡発掘調査報告書―』鳩山町埋蔵文化財調査報告第27集　鳩山町遺跡調査会・鳩山町教育委員会　2003
金井塚良一『五領遺跡Ｂ区―発掘調査中間報告―』東松山市教育委員会　1963
金井塚良一「東松山市天神裏遺跡第一次調査」『埼玉考古』第２号　埼玉考古学会　1964
金井塚良一「埼玉県東松山市吉ヶ谷遺跡の調査」『台地研究』16　台地研究会　1965
金井塚良一「五領遺跡Ｃ区の発掘調査」『埼玉考古』第３号　埼玉考古学会　1965
金井塚良一『番清水遺跡』考古学資料刊行会　1968
金井塚良一・大塚　実『八幡遺跡』東松山市文化財調査報告第５集　東松山市教育委員会　1968
金井塚良一『中原遺跡』東松山市文化財報告第10集　東松山市教育委員会　1972
金井塚良一『大谷遺跡』滑川村教育委員会　1973
金井塚良一『花見堂』嵐山町教育委員会　1976
金井塚良一・高柳茂『船川遺跡』船川遺跡調査会　1987
金子直行『衆生ヶ谷戸』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第12集　1982
川口潤『蟹沢・芳沼入・芳沼入下・新田坊尺尻・尺尻北・大野田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第119集　1992
川島町『川島町史　資料編　地質・考古』2006
栗原文蔵・野部徳秋ほか『岩の上・雉子山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第１集　埼玉県教育委員会　1973
小久保徹『桜山古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第２集　1981
小峰啓太郎『杉の木遺跡』東松山市文化財報告第２集　東松山市教育委員会　1963
小峰啓太郎『雉子山』市史編さん調査報告第８集　東松山市　1977
埼玉県『新編埼玉県史　別編３　自然』1986
埼玉県教育委員会『埼玉県埋蔵文化財調査年報（平成16年度）』2006
埼玉考古学会『北島式土器とその時代―弥生時代の新展開―』埼玉考古別冊７　2003
佐藤康二『大野田西遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第138集　1994
鈴木孝之『代正寺・大西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第110集　1991
高橋好信『町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』小川町埋蔵文化財調査報告書第１集　小川町教育委員会　1991
高橋好信・保田義治『町内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』小川町埋蔵文化財調査報告書第３集　小川町教育委員会　1993
谷井彪・野部徳秋ほか『駒堀』埼玉県遺跡発掘調査報告書第４集　埼玉県教育委員会　1974
玉川村『玉川村史　通史編』1991
津田福治・小峰啓太郎『尾崎遺跡』川島町遺跡発掘調査報告書第１集　川島町教育委員会　2002
都幾川村『都幾川村史資料　２』考古資料編　1998
都幾川村『都幾川村史　通史編』2001
中山浩彦『白井沼遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第315集　2005
滑川村『滑川村史　通史編』1984
坂野和信『下道添遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第67集　1987
東秩父村『東秩父村の歴史』2005
東松山市『東松山市史　資料編第１巻』1981
東松山市『東松山市の歴史　上巻』1985

水村孝行・今井宏『根平』埼玉県遺跡発掘調査報告書第27集　埼玉県教育委員会　1980
宮島秀夫『岩鼻遺跡』東松山市文化財調査報告書第18集　東松山市教育委員会　1989
宮島秀夫・江原昌俊『下寺前遺跡（第２次）』東松山市文化財調査報告書第19集　東松山市教育委員会　1990
宮島秀夫『観音寺遺跡（第２次）』東松山市文化財調査報告書第22集　東松山市教育委員会　1995
宮島秀夫「銅釧・鉄剣出土の方形周溝墓　観音寺遺跡４号方形周溝墓」『比企丘陵』創刊号　比企丘陵文化研究会　1995
宮島秀夫「東松山市東形遺跡（２次）の調査」『第32回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか　1999
宮島秀夫『杉の木遺跡（第３次）』東松山市文化財調査報告書第24集　東松山市教育委員会　2003
村上伸二『金平遺跡Ⅱ』嵐山町遺跡調査会報告９　嵐山町遺跡調査会　2000
村田健二・石川俊英『篭田・鶴田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第20集　1982
村田健二『古凍根岸裏』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第37集　1984
山本禎・西井幸夫『山王裏／上川入／西浦／野本氏館跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第184集　1997
弓明義「吉見町大行山遺跡の調査」『第27回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか　1995
弓明義「吉見町三ノ耕地遺跡の発掘調査」『第30回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか　1997
弓明義「吉見町西吉見条里Ⅱ遺跡の調査」『第35回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか　2002
吉田義和・新井貴『町内遺跡発掘調査報告書Ⅺ』小川町埋蔵文化財調査報告書第23集　小川町教育委員会　2005
吉見町『吉見町史　上巻』1978
嵐山町『嵐山町史』1983
嵐山町『丘陵人の叙事詩―嵐山町の原始・古代―』嵐山町博物誌第四巻　考古・歴史編　2003
渡辺久生『野本東部遺跡群発掘調査報告書―下道添・東町・古吉海道遺跡―』東松山市文化財調査報告書第16集　東松山市教育委員会　1981
渡辺久生・宮島秀夫『観音寺遺跡（第４次）』東松山市遺跡調査会調査報告書第１集　東松山市遺跡調査会　1996

古墳壁画の狩猟図について

若　松　良　一

はじめに

日本の古墳時代絵画の中で、北部九州と東北地方南部太平洋岸を中心とする古墳・横穴墓の彩色壁画は重要な位置を占めている。とくに人物を含む具象画はその主題を読み解くことによって他の遺物では得がたい情報を得ることができる。筆者は形象埴輪の研究を介して古墳時代の葬送儀礼を研究しているが、かねがね、壁画古墳の解析もその一環として行いたいと考えていた。とりわけ、埴輪と壁画の双方に見られる狩猟表現は葬送儀礼の本質を解明する上で必須の研究課題と位置づけているので、本稿では、壁画古墳における狩猟場面を取り上げ、その描出意図を探ろうとするものである(1)。

Ⅰ　古墳壁画の狩猟図

1　福岡県五郎山古墳の狩猟図（図１・２）

福岡県筑紫野市原田に所在する直径32mの円墳(2)で、複室構造の横穴式石室を持ち、玄室の奥壁と左右側壁、玄門の両袖石に黒・赤・緑の顔料を用いた彩色壁画が描かれている。人物を含む群像は奥壁の下段大型の腰石とその上部の五角形をなす石材にある。画像が多く、配置法も複雑であるが、次のように仕分けることが可能と思われる。

① 下段右側に配置された２個の靫・鞆・弓及び中央部の靫は墓室を守護する意図で描かれた武器の図文であり、人物像とは無関係に先行して描かれたものであろう。

② 下段中央部の最下部に描かれた船は玄室の左右に描かれた合計３艘の船と共に巡行する船の動きを表していると捉えることが可能であり、珠文が星を表現したものとすれば、夜間の航海を示すものであろう。

③ 中央部の靫の左側に配置された２つの騎馬像と２匹の四足獣は一体をなしている。四足獣は馬とする意見があるが、裸馬よりも大型の鹿と見たほうがよいであろう(3)。鬣の表現がないことと２人の騎馬人物の姿態が後述する射手と共通することによる。左側の騎馬人物は盾を持つとも旗を持つともいわれているが、いずれも不自然であり、弓とするのが適当であろう。残存状態不良のため復原が不正確となったものかもしれない。したがって、騎馬による狩猟図となる可能性がある。狩猟表現Ａと仮称する。

④ 下段左端の家とその右側に配置された男女は一体をなしていると見られる。男子は家に向かって両足を開いて立ち、両手を斜め上に掲げている。女子は側面図であり、何かを捧げるような姿態で天を仰いでおり、跪いているように見える。家の中心部に描かれた８字形の赤色彩色は報告では人物または霊魂の可能性が指摘されている。傾聴すべき意見である。

⑤ 女子側面図の上部には矢を番える男子と狙われている猪と思われる獣が描かれている。右手を前方に延ばして弓を持ち、左腕を開き、腕を曲げ上げるようにして矢を番えている。左利きの射手となる。ただし矢が弓の奥に廻っていたり、弦が撓んでいなかったり矛盾点が見られる。狩猟場面Ｂと仮称する。

⑥　中央の鞆の右側には犬とそれに追いつめられ背中に矢か鎗の刺さる獣が描かれる。犬の下方には左手に何かを下げ、両手を開く女子像があり、狩猟を見守っている様子である。筆者は背面図と見ている。獣を仕留めたのは下方に描かれた男子と推定されるが、保存状態が悪く、猟具の表現がはっきりしない。狩猟表現Cと仮称する。

⑦　右から2番目の鞆の左側に接して描かれた三山冠をかぶる男子は腰に左手を当て、右手を斜めに掲げているので、一見、四股踏みと見えるが、爪先が左側に向かっているので右半身（はんみ）になっていることがわかる。左側の同心円文と関係性を持ち、それを手招きする姿となろう。

⑧　上段の五角形の石には一際大きく描かれた騎馬像があり、弓を引き絞った前方には小さな獣が描かれている。体部の形状から左向きであろう。馬の尻には湾曲する竿が付き、その先端に緑色に彩色した四角い大きな旗が表現されている。馬の前方に置かれた人物は狩を見守る人物であろうか。3色を用いて描かれた唯一の人物画であり、他と区別される人物を描いたのかもしれない。胸に丸い赤彩があり魂を表現したとする意見がある[4]。狩猟表現Dと仮称する。

⑨　場面⑧上部には右半身となって左手を腰にあてがい右手を斜め上に掲げる人物が描かれている。⑦の人物と同一姿態であり、その前方に同心円文を配する点も一致している。

なお、⑨の右側の離れた位置に同心円文より一回り大きい一つの円文が描かれている。太陽を表した可能性がある。

2　福島県泉崎4号横穴墓の狩猟図（図3）

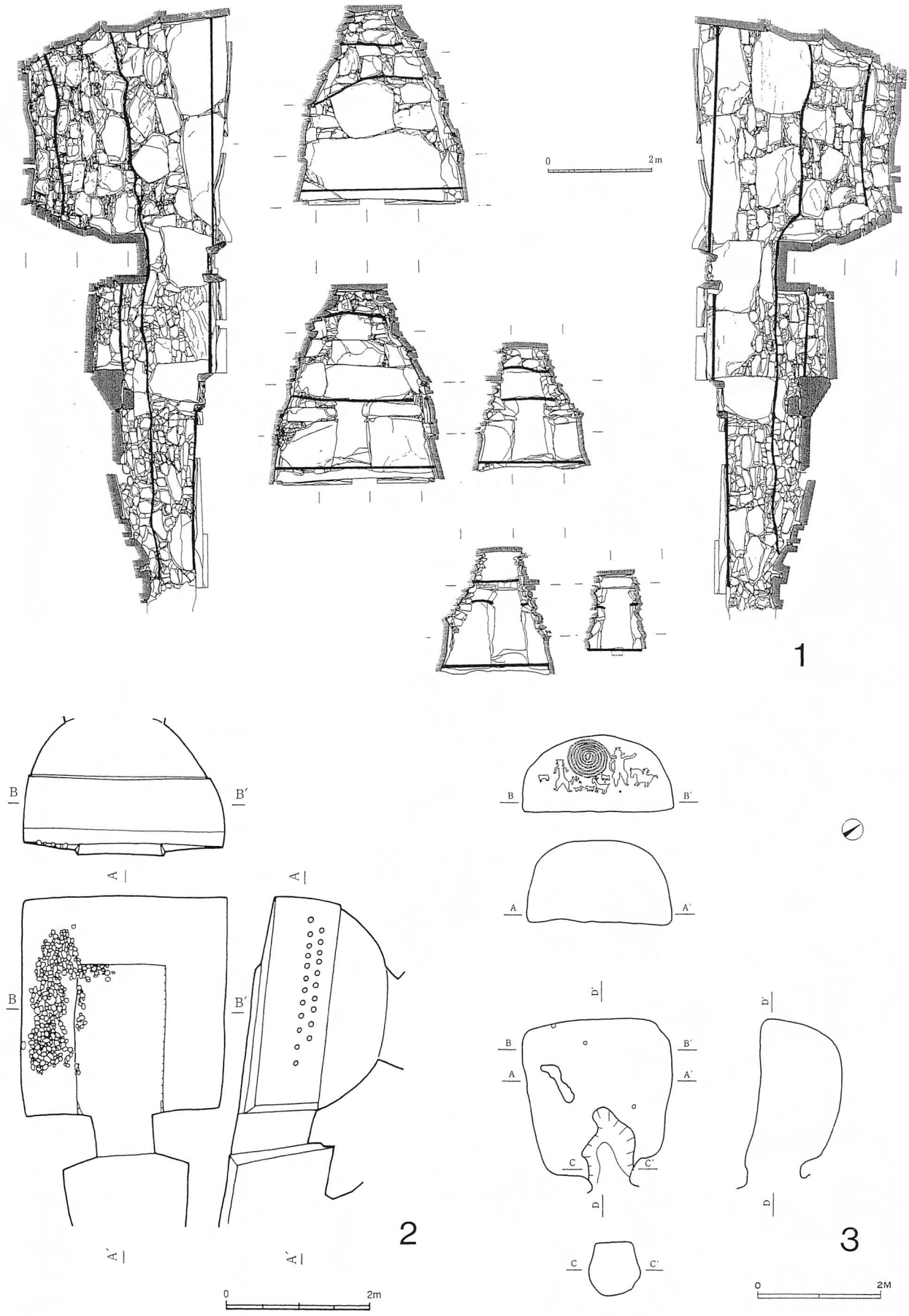
福島県西白河郡泉崎村字白石山に所在する単室構造の横穴墓で、奥壁、左壁、右壁、天井の4面に赤色ベタ塗りの彩色壁画が施されている。築造年代は7世紀初頭と考えられている。狩猟表現は奥壁にある。単列で水平方向に展開しており、向かって左から、①両手で何かを捧げ持つような姿態をとり、裳を付けた3人の同形の女性側面像[5]。②1本の水平線上に足を踏ん張り、手を繋いで立つ同形の4人の男子正面図。③左手に馬に乗って矢を番える男子の右向き側面像と右手に角の表現された牡鹿の右向き側面像。④大きな逆三角文1個。となる。また、これらの下部には珠文が多数描かれるが、中心から少し左側には細い水平線がある。

これらの図像は④を除けば、具象的であり、③が鹿を背後から騎射する狩猟図と見ることにはほとんど異論を差し挟む余地はないであろう。しかし、②については研究者の見解が分かれている。ひとつは4人を勢子と見る説であり、もうひとつは舞踏図と見る説である。福島雅儀氏は狩猟の補助的な立場にある勢子が画面の中央部に来るのはふさわしくなく、①の女性群像が飲食物を捧げ持っていると見れば、②は踊る群像であり、互いに関連して宴会と舞踏が描かれているとする[6]。①と②を関連させ、③を別の画題と見る立場となろう。また、福島氏は②を祖霊像とする大林太良説を飛躍があるとして退けている。

筆者は①から③全体を関連させて見る立場を取る。まず、②と③は一体の場面であり、勢子が手を繋いで鹿を追い込み、逃げようとする鹿を背後から騎射する場面と見る。ここで問題となるのは①の解釈である。五郎山古墳の奥壁場面④の女性像と共通性の高いこの構図はやはり重要なものを捧げ持つ姿であり、それは鹿の肉であろうと推量する。その場合、異時同画手法となるが、狩猟の結果、獲物の肉が捧げものとなる因果関係は古代人には自明のことだったのではなかろうか。

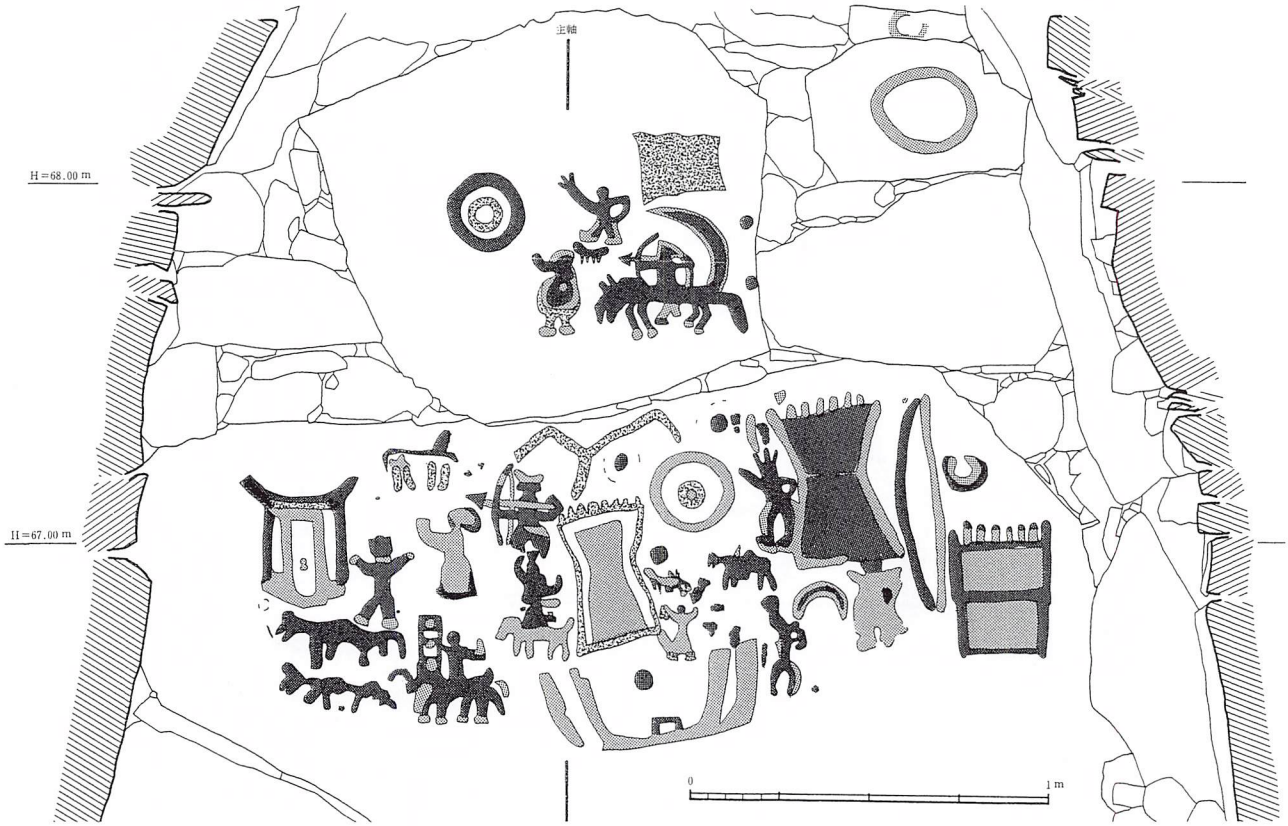
3　福島県羽山1号横穴墓の狩猟図（図1・4）

福島県原町市中太田字羽山に所在する単室構造の横穴墓で、玄室の特徴と出土遺物から7世紀中葉でも古く位置づけられている。彩色壁画は奥壁に赤色ベタ塗りの具象画、左壁、右壁、天井の3面には家の梁軒線と点文が赤と白で描かれている。狩猟表現は奥壁にあって水平方向に展開してい

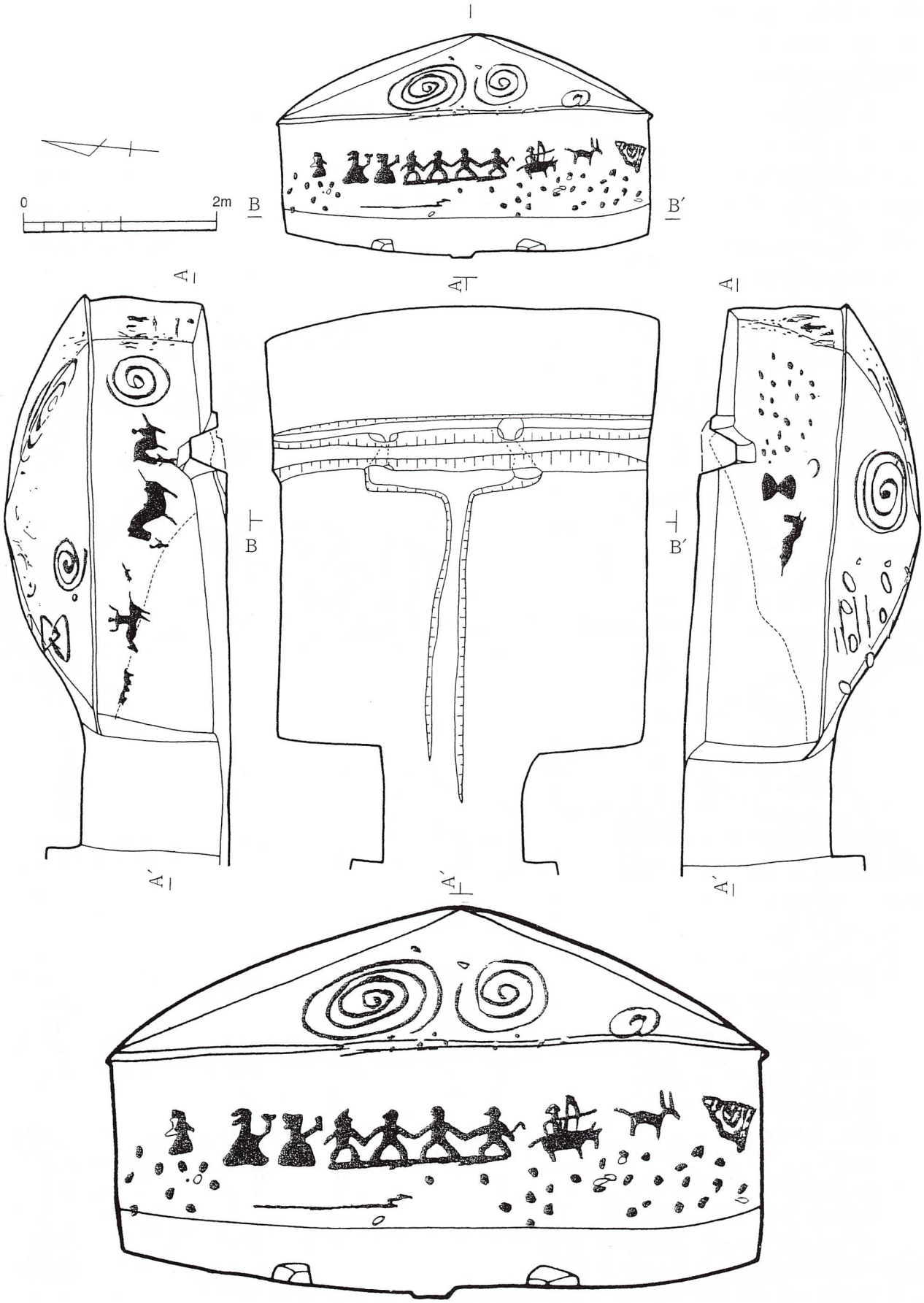


第１図　五郎山古墳・羽山１号横穴墓・清戸迫76号横穴墓測量図

１　五郎山古墳（太い水平線は築造工程ごとの仕上げ面を示す）　２　羽山１号横穴墓　３　清戸迫76号横穴墓



第２図　福岡県五郎山古墳壁画と分割される場面

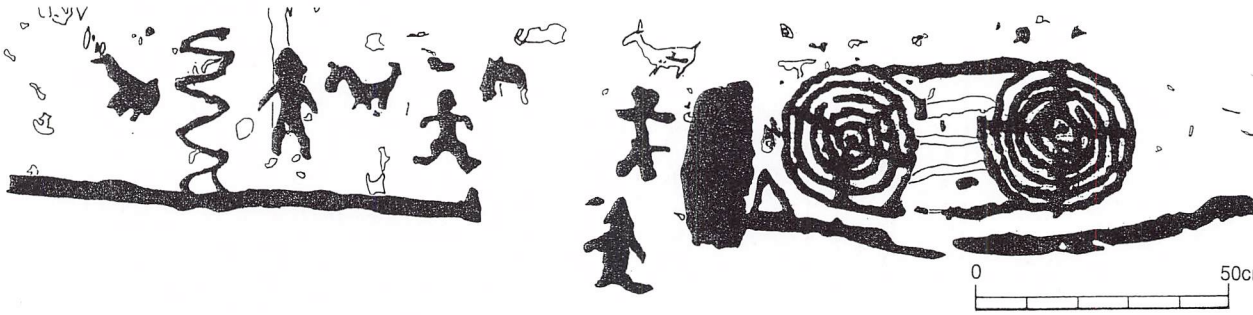


第3図　福島県泉崎4号横穴墓壁画

る。向かって左から、①動物の左向き側面像と垂直方向のジグザグ線。②人物と動物を交互に2組配した群像。③垂直軸上に上から白鹿の左向き側面図・両手を広げて立つ人物・両手を斜めに下げる人物。④塗りつぶし表現の長方形とその右側に配置された2つの渦文。が描かれている。これらの下端には水平線が引かれ、中央部でとぎれる。③の下段人物像はこの切れ目の外に位置している。

これらのうち、③の上段の鹿のみ白色の顔料で描かれ、赤色の斑点が加えられるという丹念な描法であり、抜きんでている[7]。下方に描かれた2人の人物は白鹿に向かっているので、これを捕獲しようとする場面と見てよいであろう。弓矢が描かれていないので勢子となる可能性が強い。左側に隣接する②の中で左側の動物は白鹿との類似性から鹿と見るのが妥当であろう。右側の動物は体部が消えているが、頭部の形状から馬となろう。このことからすれば、②は③と切り離す必要はなく、一体的に狩猟場面を描いたものと見ることができる。①のジグザグ線は巻狩りの際に、獲物を追い込むための柵を表現したものであろう。また、同様に、下端の水平線も柵か塀を表現したものであって、その切れ目は入口、長方形は門扉を象ったもの見れば、全体構成の把握が可能となろう。この場合、猟場は占野あるいは禁園に類する共同体の施設であったと考える必要があろう。

なお、赤と白の珠文が渦文の周囲に配されている。さらに附言すると、④の渦文は雲文の変形、したものと考えているので、車や鞆などの具象画とする意見には深入りしないことにする。



第4図　福島県羽山1号横穴墓壁画

4　福島県清戸迫76号横穴墓の狩猟図（図5）

福島県双葉郡双葉町字新山に所在する単室構造の横穴墓で、玄室の特徴から7世紀中頃でも後半に位置づけられている。彩色壁画は奥壁に赤色ベタ塗りの具象画が描かれている。配列は先に見た泉崎4号墳や羽山1号墳と異なり、水平軸上にはなく、構図と対象の大小によって三つの場面に分けることが可能かと思われる。

① 中央部にあるのは狩猟図で、2頭の獲物を追いつめて吠え掛かる犬と、その背後から矢を放つ。射手が描かれている。右手の動物は枝角のある牡鹿であるが、左手のものは小さく描かれる。頭部の右側にかすかに残る2本の短線を角と見れば、小鹿ともとれるが[8]、足の短い点、頸部と体軀の形状から猪とみたほうがよかろう。射手の放った矢はこれに向かっている。鹿の上部にも獣らしきものが描かれているが、残存状態が悪い。犬となる可能性があるように思う。

② 場面①の左側には正面を向き、両足を踏ん張って直立する男性が描かれている。頭部には美豆良と投げ捨て頭巾状の被り物が描かれている。両手を反らせて見得を切るような仕草をとる。人物の左側には四足獣が描かれるが、残存が悪く、その種類を明らかにすることは困難である。人物は高さ50cmほどで、①の射手の約15cmに比して著しく大きく、正面向きである。

③ ①の右側には正面を向いて立つ男性像が大きく描かれている。高さは約70cmあり、②の男性像より一回り大きい。ズボンを着け、足脚を結び、履をはく服装は①の男子像と共通している。頭部には頂部と耳の左右に突起する表現があり、従来、眉庇付冑とする意見[9]が強いが、筆者

は二つの理由で、異論がある。一つ目は日下氏も触れているように、眉庇付冑は5世紀に用いられたものであって、7世紀の壁画に描かれていることに問題のあること。二つ目は①の男性像と比較した場合、やはり左右の突起は美豆良とすべきで、頭頂部の突起も頭巾とすべきではないかということである。おそらく頭巾が一回り小さく描かれたために、眉庇付冑のように見えたということに過ぎないのではなかろうか。

人物は右手を腰にあてがい、左手を延ばして右側の騎馬の人物に向かって呼びかけるような仕草をとる。馬は左向きの側面図であり、人物に比例せず小さく描かれ、菅笠状の被り物を着け、両手を開いた人物小像を伴っている。人物像と騎馬像との間には対応関係を見てとることができる[10]が、図像の大きさを変えることによって、左側の人物像が主体であり、右側の騎馬像は客体であることが示されている。ここで問題となるのは人物の履の爪先方向が正面を向いていることである。なぜ右向きの側面図としなかったのか。それは、側面図では左手を挙げ右手を腰に当てた腕の表現が影絵的な絵画の場合、胴部と重なり表現しきれなくなるためであったと推量される。五郎山古墳の画工のように履の爪先方向で半身の姿勢を示す描法を清戸迫76号横穴墓の壁画を描いた画工はおそらく、知らなかったのであろう。この人物像の右肩に繋がって大きな渦文が描かれており、画面の中央部に位置している。

第5図　福島県清戸迫76号横穴墓壁画

II　壁画狩猟図の構成と表現方法

検討を行った4つの古墳及び横穴墓における狩猟表現がどのような構成をとり、表現手法がいかなるものであったか、類型を抽出して具体的かつ簡潔にまとめておきたい。

1　単位狩猟場面の類型

A　徒歩の射手を描くもの

1　徒歩の射手が正面から猪を弓で狙う構図（五郎山B）

2　徒歩の射手が犬に追いつめられた獣を弓または鎗で狙う構図（五郎山古墳C・清戸迫76号横穴墓）

※五郎山古墳Cでは狩を見守る人物を伴う。

B　騎馬の射手を描くもの

1　騎馬人物が背後から鹿を弓で狙う構図（五郎山古墳A・泉崎4号横穴墓）

※五郎山古墳では騎馬人物と獲物が複数である。また、泉崎4号横穴墓では4人の勢子を伴う。

2　騎馬人物が背面から獣を狙い、狩を見守る人物を伴う構図（五郎山古墳D）

C　射手の存在が明瞭でなく、複数の勢子を描くもの（羽山1号墳）

※場面中央に馬が描かれているが、保存状態が悪い。騎馬の射手が本来は描かれていた可能性がある。

2　狩猟図の構成ー見守る人物の存在ー

類型化の検討を通して、単位狩猟場面にはA（徒歩の射手）とB（騎馬の射手）とがあり、徒歩では正面から猪を射る場合が2例あったのに対して、騎馬では背後から獲物を射る場合が3例あり通則と見られた。そして後者の内2例の獲物は鹿であった。このことは猪突猛進型の猪と敵の気配に敏感で俊足な鹿では猟法が異なっていることをきちんと描き分けていることを示している。また、狩猟の補助者として犬を用いる場合と複数の勢子を用いる場合とが描かれているが、後者は多人数による協同狩猟であったことを明瞭に示している。とくに羽山1号墳では柵と門が表現されることから、禁園か共同体の狩場が描かれたものと考えることが可能である。

いっぽう、狩の参加者以外に、狩の様子を見守る人物が描かれていることが留意された。五郎山古墳Cに登場するのは裳を着けた女性で、左手に何かを下げている。筆者は場面④において家に向かっている女子像と着衣表現が一致することから、同一女性を描いた可能性が高いと考えている。

五郎山古墳Dの場合、馬の前方に群像中唯一の3色で描かれた異形[11]の人物が立っている。頭頂部の赤彩を頭髪、頭部左側の突出部を腕の表現とすれば、右側の馬に向かって左半身になって右手を挙げた姿勢と理解される。獲物との位置関係から勢子とすることは困難であり、心臓部に赤丸を表現することから、被葬者の霊魂を象徴していると推測する。これと対比できるのが清戸迫76号墳②の男子像である。左脇に獣が描かれることによって狩の場に立つことが示されている。遠近法のない画面構成において他より著しく大きく描かれた人物像は、実在の人物ではないことを示しており、狩の様子を見守る被葬者の霊魂をひとがたに表現しようとする意図を汲み取ることができる。

III　狩猟図を含む壁画の主題とその描出意図について

1　福島県羽山1号横穴墓の壁画主題

幾何学文である渦文を除外した場合、壁画は囲いのある狩場で4人以上が行う協同狩猟が唯一の画題となり、統一的な構成法で描かれている。獲物は赤と白で描き分けられた2頭の鹿であり、消失した中央部画像は騎馬の射手であったと推測される。赤と白の珠文が画面全体に散在している。

2　清戸迫76号横穴墓の壁画主題

主題は二つある。ひとつは中央部下段から左側に展開する構図で、狩猟場面とそれを見守る被葬者の霊魂であり、それはひとがたに描かれる。もうひとつは中央部上段から右側に展開する構図で、騎手の乗る馬を招く被葬者の霊魂をやはりひとがたに描く。二つのひとがたは服装と被り物が一致しており、同一人物であることを示している。渦文はここでは冥界を象徴しており、これと繋がることによって他界する被葬者の霊魂が愛馬を冥界に連れて行く様子を表している。

3　泉崎４号横穴墓の壁画主題

奥壁に描かれた主題は４人の勢子を伴って行う騎射の鹿狩りの場面と供物を捧げ持つ３人の女性とで構成されている。供物はその鹿の肉である。したがって、両者は別の画題ではなく、狩猟とその結果としてえられる肉の供献という一連の流れを異時同画技法によって描いた統一的な主題とみなすことができる。これと全く共通する構造が次に述べる五郎山古墳の壁画にも認められる。

なお、奥壁の壁画下方には珠文が多数描かれ、右側壁に及んでいる。また、右側壁には裸馬１頭が、左側壁には２組の馬とこれを引く馬子及び騎馬人物像が描かれており、奥壁とは別の主題となる。清戸迫76号墳例と同じく、愛馬を冥界に連れて行く様子を描いていたのかもしれない。渦文は７個が天井部に珠文や円文、２本１組の曲線文などとともに描かれ、左側壁の右端にも１個が配置されている。瑞雲が湧き星の煌く冥界が表現されていると見なされよう。

4　五郎山古墳の壁画主題

五郎山古墳の場合、先に延べた三つの横穴墓に比べて壁画の規模と図像の数が格段に大きく、全体の構成法も複雑である。狩猟はＡからＤの四つの場面によって構成されている。しかし、これは間に靫が介在しているためであって、一体的に大規模な協同狩猟が繰り広げられていると把握するべきであろう。これに付帯するいくつかの表現を読み解くことができれば、狩猟場面が描出された理由が自ずから明らかになるものと思われる。

① 狩猟表現Ｃに伴う女子像が狩を見守った後に手にしたのは獲物の肉と理解される。場面②に描かれた家は喪屋であり、この女性は喪屋の前に跪いてその肉を捧げようとしている。こうした因果関係を一つの画面に分けて描く異時同画技法は泉崎４号横穴墓と共通するものである。喪屋の前で両手を開く男性は背面像で、喪屋に向かって魂振りの呪術を行っていると見てよいであろう。このことは狩が死者への供犠のために行われたことを示している。

② 狩猟表現Ｄの騎馬には緑色に彩色した大きな四角い旗が描かれている。これは挽旗[12]であり、弔いのために行う狩であることを明示している。

③ 場面⑦と⑨に共通表現として現れる腰に左手を当て右手で手招きするような人物は一体何を表しているのか。両者が共に獲物の真上に描かれ、同心円文に向かって手招きをしていることに着目する必要があろう。同心円文は鏡や日輪・月輪を表現する場合が知られるが[13]、ここではそのいずれを候補としても狩猟との関係性を読み解くことが出来ない。同心円文は獲物の霊魂を描いたものであって、手招きは魂呼びの呪術を表現すると見て取ることができる。供犠は肉を得るだけでなく、動物霊（マナ）の獲得も目的としていたことがわかる。喪屋の中の死者に扶植する呪術が想定されよう。

④ 狩猟表現Ｄにはそうした狩猟の有様を見守る被葬者の霊魂が異形のひとがたに表現されている。狩を見守る被葬者の霊魂は清戸迫76号横穴墓にも表現されていたところである。このことは死者が自分のために供犠が行われるか否かを最大関心事としていたことを示している。

おわりに

我が国に現存する４つの狩猟場面を描いた古墳壁画を読み解くことによって、主題がモガリ儀礼における供犠であったことを推定した。中国ハニ族のモガリにおける供犠[14]と同様に、日本の古墳時代の死者にとっても、供犠は霊魂が冥界へ往生するために不可欠だったのであろう。今回は埴輪における狩猟表現との対比について触れることが出来なかったが、筆者は埴輪による狩猟表現が死者のために行われた供犠を示していることを論証し、既に論文[15,16]と口頭発表[17]を果たしている

ので、参照していただければ幸いである。

なお、小田富士雄氏は筆者の報告した瓦塚古墳における形象埴輪祭祀のあり方[18]を五郎山古墳の壁画と対比して相互に共通する内容を含むことを論破されている[19]。卓抜な研究手法であり、示唆されるところが多かった。

最後に、気にかかっているところを述べれば、それは壁画の場面設定である。珠文が星を表しているとすれば、高句麗古墳の影響を受けた可能性も考えられる。辰巳和弘氏は冥界に往生した後に、被葬者が生前と同様に王者として狩猟する姿と読み解いておられる[20]。傾聴すべき見解である。しかし、白石太一郎氏のように高句麗壁画の影響はほとんどなかったとする意見もある。五郎山古墳を除く三つの壁画が非首長墓に描かれたことから、王権儀礼を想定することは適当でなく、階層を超えた基層的な文化が背景にあったと考えてみた。

今回は、紙数が制限されている上に、準備不足で、壁画研究の先学の成果を十分に咀嚼し紹介することが叶わなかった。埴輪との関係も含めたより精細な壁画研究を今後の課題として、稿を閉じることとしたい。

最後に古墳壁画について御教示を賜った小田富士雄先生、辰巳和弘氏、桃崎祐輔氏、福島正儀氏に心から感謝申し上げる。

注

(1) 小論執筆の契機は筆者の勤務するさきたま史跡の博物館において、平成19年1月13日から3月18日の会期で開催した特別展「吉見の百穴と東国の横穴墓」に担当者のひとりとして参加し、日下八光氏の壁画模写図を熟覧する機会に恵まれたことによる。

(2) 周溝の内側にテラスを持ってから直径30mの墳丘が立ち上がっている。ここでは周溝内径を計測値とした。

(3) 黒色彩色の馬は蹄を赤で区別する通則からみても馬と見なすことが困難である。

(4) 羽方誠「壁画の調査」『国史跡五郎山古墳―保存整備に伴う発掘調査―』福岡大学考古学研究室　1998

(5) 右側の2人は高坏を捧げ持っている。

(6) 福島雅儀「福島県の装飾横穴」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集　1999

(7) 竹島国基氏は白鹿を聖獣ととらえて、被葬者がこれと巡り会った記念と解した。

(8) 日下八光氏の模写では角を描いていない、また子鹿は3才まで牡であっても角は生えない。したがって角状に見える短線の評価は微妙であり、消えかかった上部の残存部が偶然、角に見えている可能性がある。そうした場合、この図像はますます猪に近づくことになろう。

(9) A　日下八光『東国の壁画古墳』雄山閣　1998
　　B　福島正儀「福島県の装飾横穴」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集　1999

(10) 人物と馬の足もとの位置が①②よりも高い同一水平上にあることもその一理由である。

(11) 他のどの人物像よりも体軀が太く、頭髪を表現するのは五郎山古墳の男子像では異例である。

(12) 青旗が挽旗であることは万葉集に木旗・忍坂・葛城山などの枕詞となって挽歌が多く歌われていることによって知られる。万葉集巻2の第148首には「青旗の木旗の上を通うとは目には見れども直に逢はぬかも」とある。辰巳和弘氏もこのことを注20文献で述べている。辰巳氏は筆者と異なり、青旗の騎馬人物を被葬者その人と見ている。

(13) 小林行雄『装飾古墳』平凡社　1964

(14) 蘇紅「ハニ族の葬俗と日本の葬俗との比較」『東アジアの古代文化』71号　1992

(15) 若松良一「猪鹿埴輪論」『法政考古学』第30集　2003

(16) 若松良一「狩猟を表現した埴輪について」『幸魂』増田逸朗氏追討論文集　2004

(17) 若松良一「形象埴輪祭祀の構造と機能―狩猟表現埴輪を中心として―」『埴輪の構造と機能』第12回東北・関東前方後円墳研究会発表要旨資料　2007

(18) 若松良一「再生の祀りと人物埴輪―埴輪群像は殯を再現している―」『東アジアの古代文化』72号　1992ほか

(19) 小田富士雄「彩色壁画考」『国史跡五郎山古墳―保存整備に伴う発掘調査―』福岡大学考古学研究室　1998

(20) 辰巳和弘『「黄泉の国」の考古学』講談社現代新書　1996

吉見百穴をめぐる人々
特別展「吉見の百穴と東日本の横穴墓」によせて

昼　間　孝　次

埼玉県のほぼまん中、東西に横たわる比企丘陵は凝灰岩が発達し、お椀を伏せたような地形が連なっている。今から1300から1400年前、古代人たちは凝灰岩をくり抜いて墓をつくった。掘るに堅すぎず、手ごろな耐久力もあったからだ。比企丘陵はこうした横穴をつくるには最適の地だった。八丁湖や市の川に面した吉見町の丘陵地にも古代版「霊園団地」を見ることができる。「黒岩横穴墓群」と「吉見百穴（よしみひゃくあな）」だ。

この特集は百穴に挑んだ男たちと、近代考古学を切り開いた男たちの物語である。

その１　根岸　武香（たけか）　天保10．5．15―明治35．12．3（1839―1902）

根岸武香
（『東京人類学会雑誌』207号から）

追　悼　明治35年（1902）12月10日、大勢の会葬者が見守る中、東京帝大（現東京大学）勤務の柴田常恵は、弔辞を代読していた。「根岸武香君曩（さき）に東京帝国大学理科大学に於て松山近傍の横穴を調査せし際諸種の便宜を謀り後同学より埼玉県下人類学上の調査嘱託を受け益々斯学の爲めに尽す所あり今や溘焉（こうえん）長逝せらる誠に痛憤の至りに堪へざるなり―略―」[1] と読み上げた弔辞は、日本人類学の基礎を築いた同大学教授坪井正五郎が寄せたものだ。坪井は「氏の死去は学会の大損害で有りまして、私は私交上のみならず。学会の爲にも深く悲んで」[1] と哀悼した。

名主を務める素封家　古墳が点在する大里郡甲山（かぶとやま）村（旧大里町、現熊谷市）。この葬儀―神葬祭は、国道407号と県道307号・福田―吹上線が交差する南東角地に長屋門を構える広壮な屋敷内で執行された。武香の生家である。

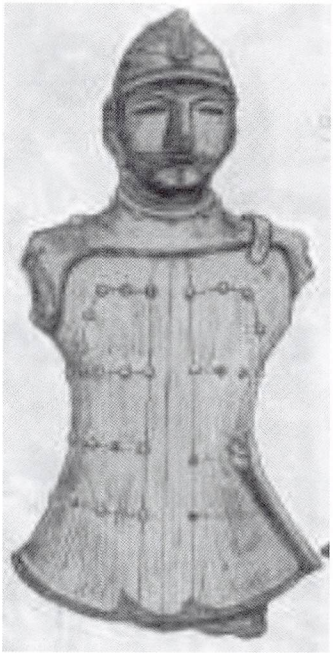
武香の活躍は政治、農業、土木、教育、学術など多方面に及んだ。その足跡に比例して、土地の名士はいうに及ばず、外国人から大学教授まで、交際範囲も広い。代々名主を務め、父友山以来、幅広い人脈が培われ、武香の名声に訪ねる人は後を絶たなかった。

因みに、30年「貴族院議員選挙有資格者」[2] によると、武香の税額は1,299円16銭６厘、県内ではベスト15の７位にあげらた豪農である。

パリ万国博への出品　31年９月、武香のもとに一通の封書が届いた。〈親展〉とあり、消印は〈東京下谷〉、差出人は〈帝国博物館總長男爵　九鬼隆一〉とあった[3]。

開封すると、上中条村（現熊谷市）出土の武人埴輪―後、帝室博物館（現東京国立博物館、重要文化財）蔵―と大谷村（現東松山市）出土の男子埴輪を明治33年に開かれるパリ万国博に出品する『日本美術史』へ掲載するための依頼文だった。当人は「名誉ノ至ニ付」と快諾、同書は後年日本国内でも出版された。

収集家の貢献　このように、武香は中央でも知られる収集家だった。「余性好古ノ癖アリ」[1] というように出土遺物から、古美術、古文書、書籍、古銭、印鑑など多岐にわたった。村人が持ち込ん



パリ万博に出品された武人埴輪
（『東京人類学会雑誌』207号から）

だ遺物を買い入れたり、時には知人に贈ったりもしている。

とにかく武香は忙しかった。公務や家政の合間をぬっては、頻繁に上京する。武香の足は、東京深川へ向かう。江戸幕府編さんの『新編武蔵風土記稿』発行について、印刷兼発行所の近藤圭造と打合せるためだ。内務省地理局に代わって出版発行請負人となり、明治17年６月出版にこぎ着ける。

全80冊、定価20円。現在の価格に換算すると4,000倍以上になろうかという高額さだ。投入した資金をどれくらい回収できたかは、わからないが、トップセールスを展開。比企郡番匠村（現ときがわ町）の医師・歴史学者として名高い小室元長（1822―1885）らが買い求めている。武香の財産は、いまも必携の書として出版が続けられている。

また昭和６年（1931）故人の遺志により、古写経、古文書、地誌類など約950点が上野の帝国図書館（現国会図書館）へ寄贈。「冑山文庫」の名を冠され、開放されている。

古代への憧憬　よき薫陶を受けた教養人は、地方行政を担うかたわら、間近に眼にしてきた古墳の記憶が、古代への憧憬となったのだろうか、考古学の世界へ誘われていった。周辺に点在する遺跡は、格好の遺物採取の場であり、なれ親しんだ自分の庭でもあった。例えば、明治９年の日誌には[4]、

一月二日―略―内山温載（久米田村戸長）ヲ訪フ斎瓶一口瓶岡堀出シ。贈ルタ陽ニ至リ帰ル　―略―

七日―略―大谷塚ニ而銀環又五ツ堀出ス

―略―

十六日曇　松浦（武四郎）へ土偶人ヲ贈ル男首附欠同左腕三同右腕三女首髷付一同左右腕二壺三同大一総テ目方二貫八百匁松山ヨリ川越船へ積ル七刀鋏鏃ハ道義持参之事

とある。武香がしばしば足を運び、遺物採取を行ったのが、三千塚古墳群のある大谷村（現東松山市）だった。遺物収集趣味は高じ、遺跡発掘への思いが次第に募っていった。

その夢は、米人動物学者エドワード・Ｓ・モースが日本の近代考古学の夜明けを告げる大森貝塚

根岸武香から松浦武四郎に贈与された遺物
（松浦武四郎『潑雲餘興』斎藤　忠『日本考古学資料集集成１』1989より作成）
塩野博著「埼玉の古墳」比企・秩父から

を発掘してから３か月後の明治10年11月、「穴居跡」発掘に結実する。穴居跡は横見郡黒岩村（現吉見町）の八丁湖に面した、丘陵斜面を掘った横穴だった。既に人の手が入っていたらしく、発掘した16の横穴からは期待ほどに遺物は発見されなかった。

横穴を踏査した内務省（現総務省）職員の柏木貨一郎は「腹に穴を穿ちたる瓦器１個を得た」[5]のみで、武香は「穴中ヨリ出品ハ別紙図之如陶器壱品獲候ノミニテ右陶器ハ横見神社ニ有之候」と埼玉県へ報告している。この唯一の瑳は明治13年、横見神社から帝室博物館へ献納された。

穴居か墓穴か　武香たちは発掘の記録を残さなかった。何を目的に黒岩横穴を発掘したのかわからない。穴居説を実証するためだったのか、遺物の収集だったのか、ハッキリしない。先の柏木など、断片的な報告からうかがい知れるだけだ。柏木は『黒岩村穴居の記』[5]で「当時の人民野草を以て此床を覆ひ以て安居となせしと推知せらる」と、「横穴穴居説」を主張したが、穴居説は次第に劣勢となり、昭和へ入って決着する。

反響を呼んだ『黒岩村穴居の記』　発掘例の少ない時代、柏木の踏査記への反響は大きかった。著名な人物が次々と穴居跡を訪ねる。武香はどんな感懐を抱いて博物局職員、わが国を代表する考古学者やヘンリー・シーボルト、エドワード・モースらを案内したのだろうか。

黒岩横穴群

先見性　百穴発掘の様子は、次回以降に譲るとして、今日、残されている写真は百穴の遠景、関係者や地元の子供たちなど、発掘終了間もない明治21年に撮影された。これらはアメリカで写真術を身につけた著名な写真師・小川一真（1860―1931、現行田市出身）に武香が撮らせたうえで、関係者へ配ったものだ。

まだ、写真の珍しい時代によくその記録的、資料的価値に気づいた、と感心せざるを得ない。さらに百穴保存のための卓越したアイデアとは……。

入場料、絵はがきの売り上げを維持・管理費にあてようと考えたのである。「縦覧切符」千枚、「優待切符」百枚、絵はがきと思われる「百穴写真」裏活印刷千五百枚を４月、小川に発注[6]。保存の夢が実現に近づいたのである。

そして「私（坪井）が（武香）氏を知り始めたのは明治18年」[1]という出会いに始まり、古代への情熱が二人の心を共振させ、武香を軸に、新たな展開を見せる。

注

(1)　東京人類学会雑誌第18巻第207号『根岸武香氏紀念号』、明治36年
(2)　埼玉県立文書館明2118帝国議会Ｃ7813
(3)　埼玉県立文書館林家文書7543
(4)　埼玉県立文書館林家文書7537「明治９年　千秋日誌」
(5)　『黒岩村穴居の記』東京日々新聞、明治11年４月
(6)　埼玉県立文書館6033根岸家文書1009

その2　坪井　正五郎　文久3．1．5―大正2．5．26（1863―1913）

坪井正五郎
（『人類学雑誌』第28巻1号から）

明治22年（1889）、わが国の「人類学のパイオニア」となる坪井正五郎は英国へ留学する。国をあげての近代化は、産業界にとどまらず、自然・人文科学などの世界でも例外ではなかった。留学の目的は、人類学の修得にあった。

14年、東京帝国大学（現東京大学、以下帝大）へ入学。人類学への意欲はつきなかったが、生物学を専攻。人類学を専攻するのは、人類学科のまだない19年、大学院へ進んでからだ。この時代の人類学は研究範囲が広く、考古学も含まれていた。

東京府下目黒村（現東京都目黒区）や埼玉県黒岩村（現吉見町）の黒岩横穴などの発掘に正五郎が確立しようとした人類学が垣間見える。

根岸武香との出会い　帝大在学時、根岸武香との交遊が芽生える。「氏を知り始めたのは明治18年」（東京人類学会雑誌第18巻207号）と述懐しているが、恐らく、論敵となる白井光太郎（しらいみつたろう）と「黒岩村及び北吉見村横穴」を実査したときを指すのだろう。

2年後、再訪の機会がめぐってくる。卒論のため20年8月4日、雨のちらつくなか、知人と横穴調査―測量を目的に武香を訪ねる。翌5日、武香を再び訪ね、6日にかけて黒岩を「穿鑿」後、北吉見村（現吉見町）の横穴―吉見百穴へ足をのばし、穿鑿。

百穴が大規模であることを感知する。7日は雨に見舞われ、発掘を断念。武香が持つ「古器物」を写した。8日、本格的な調査体制を組み、全容を明らかにしなければならないことを痛感し、帰京する（武香の日誌は5日来ル、7日黒岩北吉見へ行、とあり日付に齟齬がある。ここは坪井の記述によった）。

百穴発掘の序章　帝大要路の人に調査体制の整備と、それには多額の資金が必要になる旨を説き、現地見学を請うた。17日、帝大から郡區戸長地主等へ宛てた依頼書を携え、吉見へ取って返す。横穴の発掘現場には、地主の大澤藤助（とうすけ）に案内された帝大総長渡邉洪基（ひろもと）が立ち、つぶさに発掘を見学した。

18日、洪基と百穴を見た後、実力者である甲山（現熊谷市）の武香に引き合わせる。正五郎は洪基を紹介し、来意を告げる。

発掘調査に理解を示す武香は、地元の発掘に寄せる期待が熱いことを述べ、全面的な協力を約す。洪基は調査費用の拠出、発掘作業員の手配、宿舎の提供などを申し出る武香らの好意と、正五郎たちの「古代への情熱」に感じるものがあった。

洪基の経歴は明治初年、岩倉遣外使節団に加わった後、当時の政府最高機関―太政官に出仕、東京府知事などを経て19年3月、帝大初代総長に就任。同年6月、栃木県足利町（現足利市）でたまたま足利公園の出土品に接し、正五郎を発掘調査に差し向ける約束を足利織物講習所（現栃木県立足利工業高校）へしている。既にこのとき、埋蔵文化財の重要性を認識していたのである。

正五郎の良き理解者は、大学からの資金援助を決断する。

百穴の発掘　こうして半年に及ぶ、これまで経験したことのない大規模な発掘が下旬から始められる。

正五郎は科学的に遺跡・遺物へアプローチする。今日では発掘時、遺構に番号を付し、出土地点を記録するのは基本中の基本だが、正五郎は個々の横穴に番号をつけ、遺物がどの横穴から出土したか、判別できるようにした。横穴の形状、出土状態にも注意を払い、記録、分類していった。し

かし伝えられる遺物は、出土した横穴が明らかではない。

発掘は「敷迄」土をさらった。開口している横穴は、発掘するのがやさしかったが、出土する遺物は少なかった。未開口の横穴は土のくぼみ具合、足踏みしたときの音の響きで探し出したが、土は堅く、掘るのが難しかった。積もった土は入口を塞ぎ、内部は高さ5分の4ぐらいまで埋まっていた。

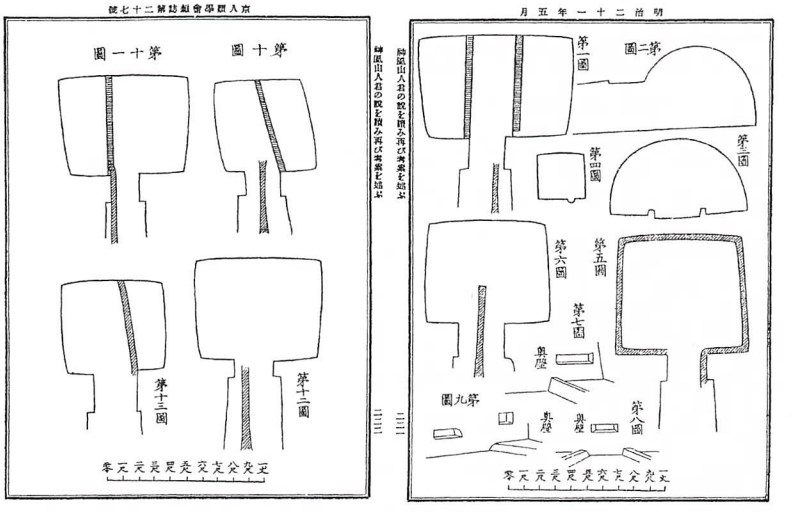


図19　吉見百穴実測図
（坪井正五郎『人類學會雑誌　第二十七號』1888より作成）
塩野博著「埼玉の古墳」比企・秩父から

横穴の構造は（図参照）室につながる「入り道」（羨道（せんどう））、入り道と室の境「中門」（玄門）、死者を納める「室」（玄室）に分け、壁の傾斜や敷の水平差などを細かく観察、床（棺をおく棺座）にも目を配った。完掘後は測量を行い、図面を作った。

出土品は後世の遺物が混入してはいたものの、入口の閉塞石や内部の石積の前で発見された。人骨、曲玉、管玉、直刀、小刀、鏃、金環、祝部土器〈須恵器〉、埴部土器〈埴輪、土師器〉などである。

人骨は完全なものはなかった。頸骨は床の上から、頭骨は崩れた土の上から散らばって発見された。祝部土器は室内にもあったが、たいていは入口の石戸や石積みの前から発掘された。

穴居説に固執　正五郎は発掘期間中の9月、東京人類学会の会合で横穴の性格について発表している（東京人類学会雑誌第2巻19号、第3巻22号）。「住居」「墳墓」「倉庫」の三つの説をあげ、

① 入口がせまいのは内外を区別し、戸で室を閉じるため
② 水はけをよくしている
③ 棚のあるのは住居と倉庫だけに用い、墳墓には不用
④ 横穴の構造が大同小異で、それぞれがほぼ同じ時期に作られたと見えるのは、墳墓というより、住居か倉庫という方が考えやすい
⑤ 室内に床のあるのは住居なら寝床、墳墓なら死体をおく所と思われるが、倉庫では解釈が難しい

と指摘したうえで、この五つの性質が残らず「合格」するのは住居ばかりで、倉庫は四つ、墳墓は二つしか合格しない。倉庫に床は不用であり、墳墓には「水はけ棚」は設けないので、一般に横穴は「穴居」とし、黒岩、北吉見の横穴は穴居と推量した。

最後に7項目をあげ

㈠ 黒岩、北吉見兩村の横穴は住居の爲に穿たので有らう
㈡ 是等を作た者は金属の利器を所持して居たに違無い
㈢ 是等を作た人民は多分土蜘蛛と呼ばれた者で有らう
㈣ 是等の中には曲玉時代に葬穴に用ひられたものも有る
㈤ 葬穴に用ゐたのは我々の祖先で埴輪以後の事で有る
㈥ 北条執世の末頃にも横穴に人を葬た事が有るらしい
㈦ 葬穴に用ゐた横穴を後世に至て発掘した痕跡が有る

と締めくくった。

埴輪は横穴から出土しないのだが、この講演では66番の穴の前からほぼ完全な「筒」〈円筒埴輪〉3コを発掘した、とあり、「横穴を葬穴に用ゐた事は疑無なく」と横穴が墓であることを認めながら、何故か穴居説に固執した。

斜面にへばりついての作業は、足もとが悪く大変だったが、長い間埋もれていた事実を考えると、発掘は楽しかった。季節は移ろい、冬に入ると強風が彼らを容赦なく襲った。だが、白茶けた斜面にポッカリ口をあける横穴は、しだいに数を増し、発掘の終わる1月頃には200をこえていた。

人類学会の設立　正五郎らが後の弥生土器となる土器を発見した明治17年(1884)、同好の志と「人類学会」を創立する。彼らはこれ以前、遺跡探訪を繰り返し、遺物を採取しては、会合をもっていた。しだいに会場の手配や仲間への連絡などに不便を生ずるようになったのが、設立の契機だった。若い学徒たちが起こした波紋は、東京を核に弧状列島を南北に広げていった。

人類、民俗、古物遺跡などを研究対象に14人で発足した会は、正五郎が留学中の23年には174人にふえている。渡邉洪基、若き日の鳥居龍造（蔵）〈民族・考古学者〉、三宅米吉〈考古・教育学者〉、白鳥庫吉〈東洋史学創始者〉など、斯界では高名なメンバーにまじって根岸武香、大澤藤助長男、穹那（たかとも）の名が見える。

25年、帰朝すると帝大に人類学教室が創られ、第一代の講座担任者となった。以後、同教室は多くの人材を輩出、考古学界のけん引車となっていく。

吉見の百穴から世界の百穴へ　22年、正五郎が集めた色々の図をパリ万博へ出品、その中には吉見百穴の図2枚があった。百穴がパリから初めて世界に知らされたのである。さらに24年、ロンドンで開かれた第9回国際東洋学会では、「東京近郊における横穴200余の発見について」発表。百穴は世界の研究者に注目され、好資料を世界へ提供したのだった。

サンクトペテルブルグに死す　突然の死がやってくる。大正2年（1913）5月、帝國学士院（現日本学士院）を代表してサンクトペテルブルグ（ロシアのレニングラード）で開かれる第5回国際学士院連合大会へ出席するが、急な病を得て、客死した。「けふで会もお仕舞、めでたしめでたし」が最後の手紙となった。

多才にして多彩な江戸生まれの粋人は、道なかば、考古学の普及に努め、基礎を固めて逝った。

正五郎が標榜した考古学。それは道具（遺物）の背後に、必ず使った人がいることを念頭において論究した点にある。

参考文献

東京人類学会雑誌第18巻第207号『根岸武香氏紀念号』、明治36年
東京人類学会雑誌第2巻第19号『埼玉縣横見郡黒岩村及び北吉見村横穴探究記、上篇』明治20年
東京人類学会雑誌第3巻第22号『埼玉縣横見郡黒岩村及び北吉見村横穴探究記、下篇』明治20年
東京人類学会雑誌第18巻第207号『根岸武香氏紀念号』武蔵国横見郡北吉見村百穴之記
『坪井正五郎集』上巻1971、同下巻1972、築地書館

その3　大澤　藤助　　天保10．1．14—明治45．7．30（1839—1912）

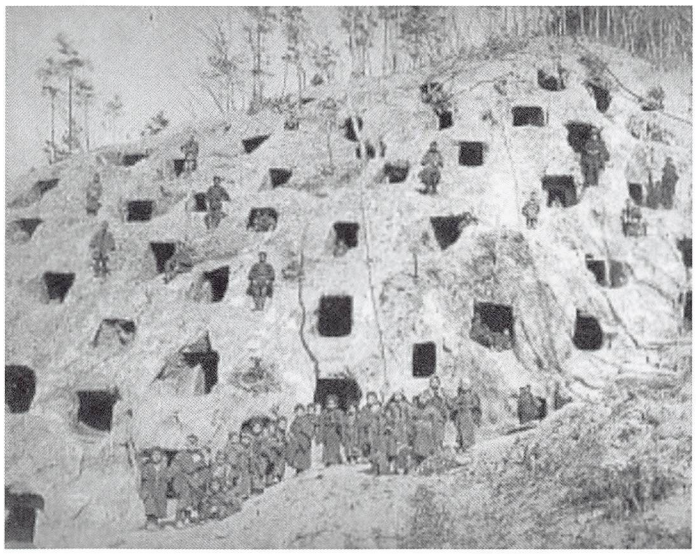
数は230　百穴は7—8世紀にかけて営々と築かれた。その数は230以上。1,000人が葬られたと推定されている。死者が葬られるとふたが閉められ、外部としゃ断された。百穴は吉見や東松山の共同墓地だった。

やがて、長い年月が墓を土の中におおい隠し、人々の記憶から遠ざけていった。時たま墓はポッカリ口を開け、村人を驚かせた。里人は雨が降ったとき隠れる穴だとか、松山城の武器庫だとか言い伝えた。時には旅の僧やこじきが宿ることもあっただろう。江戸時代には再び存在が知られ、「百

穴」と呼ばれるようになった。

百穴は古物好きの人たちに憶説を生ませた。「住居だ」「いや、墓だ」と。こうして、明治20年（1887）８月東京帝大生（東京大学）らによって、６か月にわたり発掘が行われた。

発掘には地元の素封家も加わった。百穴の地主である甲山村（旧大里町、現熊谷市）の根岸武香と吉見村（現吉見町）の大澤藤助である。



明治21年、発掘後の風景

発掘成功の原動力　視察に訪れた渡辺洪基・東京帝大総長は大澤家に宿泊。藤助の案内で百穴や黒岩横穴を訪ね、未知の学問の可能性を感じ取った。地元と大学側の資金拠出により、それまでに例を見ない大発掘が始まった。

藤助は発掘を支える人夫を集め、進んで自宅を発掘隊に開放した。「吉見百穴」と染め抜いたハッピを着込んだ人夫たちは、藤助の長男、穹那（たかとも）指揮のもと、岩山に挑んだ。初め村人は「バチがあたるぞ」としりごみしたらしいが、藤助らの説得によってしだいに興味を示し、連日見物に押しかけた。出土品はベースキャンプの大澤家に運ばれ、黎明期の若い学徒たちは考古談義に花を咲かせた。

藤助らの物心両面の援助が功を奏し、白茶けた岩はだに黒い点が毎日のようにふえていった。こうして237の横穴が発見され、遠望すると「ハチの巣」のような姿が出現したのである。

発掘に要した人足賃は235円。このうち東大からの交付金85円88銭５厘は、数回に分けて正五郎から武香に渡された。７割弱が人足費、運搬費、畑などを踏み荒らした一若干の保証金に支出された。人夫賃総額の約６割を藤助や武香たちが負担したのだ。まさに、地元が発掘を支えたのである。

保存に奔走　発掘の行方が見えかけた11月中旬、正五郎、穹那、武香は発掘の善後策を協議した。遺跡保存の方法は、維持費は、誰が管理するのか、話しあった。穹那はその後も武香と面談して、保存策を煮つめていった。12月、土地を献納し、「看守人」を藤助と決め、同時に管理事務所などの建設が始められた。人類学会は地元の動静に反応し、同月、保存費用５円を寄付、学会の協力を得た保存工事は前進していった。

百穴の名前は広く知れわたり、遠くから訪れる者もあった。しかし、心ない来館者は横穴内にいたずら書きをしたりして、藤助たちを嘆かせた。そのため柵をめぐらすなど保護策を講じたが、「無頼の乱入者」はあとを絶たず、明治21年、武香と連名で保存請願書を宮内省（現宮内庁）に提出する。「古跡ヲ再ヒ埋没スルモ遺憾ナレハ更ニ此地ヲ献納シ　皇室ノ御料ト為シ無窮ニ傳エ度仰聞届御採用相成候……」。「皇室には関係がない」と却下されてしまった。土着民に由来するような遺跡は指定の対象にならなかったのである。

保存に要した費用は、外柵費65円、事務所費335円、雑費100円（旅費、写真代）だった。現在の貨幣価値では1,000万円くらいになろうか。

料金を取り保存　武香と藤助らは一計を案じた。保存のために入場料をとることを考えたのだ。大澤家は以後百穴の管理にあたった。大正12年(1923)、国の史跡に指定されても大澤家の墓守は続いた。町の手に管理が移ったいまもまだ縁は切れていない。料金所の跡に「百穴発掘の家」というみやげ物屋を営んでいる。

明治45年７月30日、「住居説」「墓地説」が対立するなか、藤助は亡くなった。因みに明治天皇が

崩御、大正と改元した日でもあった。

生花の師匠は大貫齋という号をこよなく愛し、墓碑銘にもこの名前を刻んだ。

年に30万　藤助たちが守りぬいた百穴は、東武東上線東松山駅の東方２㎞の地点にある。さらに東へ４㎞、吉見観音の北側、八丁湖を望む黒岩の地は、吉見の百穴に先べんをつける発掘が行われたところでもある。それは東京の大森貝塚が発掘され、わが国における考古学発祥の年となった明治10年のことであった。いま、閑散とした黒岩とは対照的に、吉見の百穴は古代史ブームにのって、年間30万（現在は６万）を超える人たちが押し寄せている。死者の魂も休まるひまがない昨今である。

参考文献

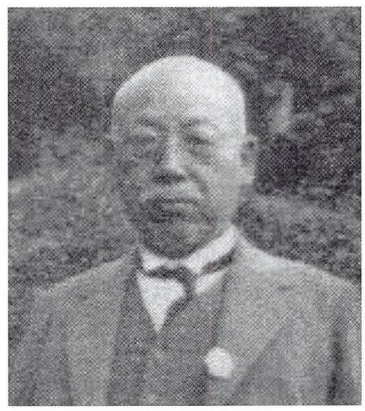
『吉見町史』上巻

金井塚良一著『吉見の百穴』

＊初出、朝日新聞さいたま特集（別刷り）「吉見の百穴」

＊今日では使われない語句がありますが、歴史性を考慮して、初出時のまま掲載しました。

その４　白井　光太郎　　文久３．６．２―昭和７．５．30（1863―1932）



白井光太郎
（『白井光太郎著作集』から）

福井藩士の子として、江戸藩邸に生まれる。広辞苑（第５版）には「植物学者。江戸の生まれ。本草学の権威。また、日本の植物病理学を開拓」とあるが、専門的な辞書を除くと大同小異「植物学者」としている。これは光太郎の一面しか伝えていない。植物学者に「考古学者」を加えるべきだ。

縄文土器の名づけ親　東京帝国大学で植物学を専攻するかたわら同級生の坪井正五郎と共に熱心に遺跡を訪ね歩く、考古学徒でもあった。明治17年（1884）「人類学会」の創設に参画した青年は、10代後半から20代半ばまで考古学と関わり、学史に残る業績を挙げた。

世界最古といわれる縄文土器。その命名者が実は光太郎であった。

それまで貝塚土器などと呼ばれていた土器を16年、原稿に初めて「縄紋土器」と書き記した。それから３年後の19年、縄文土器の名が公表される。人類学会報告第４号『中里村介墟の報告』の中で「縄紋土器」の語句を用いたのだった。その名が浸透し始めると、専門用語は固有名詞化、広く使われるようになった。

考古学上の足跡　これに先立つ16年７月19日、新編武蔵風土記稿から調べた足立郡貝塚村（上尾市）を踏査。

17年３月には正五郎らと新しい土器―後の弥生土器―を発見する。22歳の時だ。

同年７月から８月の夏休み、動物学助手の動物採集に正五郎と随行した旅は、遺物採集も兼ねていた。越後、越中、能登、加賀、越前、若狭、丹後、近江、山城、摂津を経て神戸から帰京する長旅だった。

遺跡、遺物の渉猟はさらに続く。

黒岩、吉見へ　明治十八年五月二日午後、坪井正五郎、神保小虎の二君とともに武州横見郡吉見村および黒岩村の百穴を探らんとて東京を出で、上野より汽車にて鴻の巣に至りここに一泊し、三日朝甲山村根岸武香氏の家を訪ひ古物を見せられん事を乞ふ。折節主人不在なりしが老大人出で合はれ、まづ座敷に通されたり。談話の際同家所蔵の埴輪土偶を示されん事を乞ひしに、右は東京の知人に貸し渡しあれば手許になし、かつ主人留守なれば古器は展覧に供し難し、ただ石鏃

の類のみ見すべしとて、所蔵の石器類数十函を出だし示さる。石鏃あり石剣あり石斧あり石小刀あり、その種類その員数ははなはだ多けれども一も出所を記せしものなく主人もこれを知らざるよしなり、されば、学問上にはあまり益なき品々なり。—略—元来根岸氏は甲山村の豪農にて好事の名高ければ、近辺の農民は石鏃土器の類を得るに随ひて携へ来て贈り物とする故、かく多数蒐集し得たるなりといふ。この日根岸氏より予等のために百穴案内者として篠崎仁平といふ人を付せられたれば、吉見黒岩両村横穴の巡見に大なる便宜を得たり。ここの横穴は穴居跡と称せらるるものにて、皆洞窟を岩壁中に横に掘りしものなり。—略—

吉見村の一窟の壁に、Siebold1878（明治11年）と刻みたる文字あり、外人の爲に先鞭せられたるを遺憾とす。この窟中より人骨の出でたるをシーボルト持ち帰れりと老大人の話なり、予は黒岩村土窟の坑口外において行基焼土器（須恵器）の破片を得たり。

この百穴を穴居跡といふ人あれども、予は一見してその墓穴なるを確信せり。第一洞穴の多数群集するは畿内の諸地に存する千塚の一種と見れば不思議なく、洞穴の構造各地の古墳に見る石槨（せきかく）と異らず、黒岩村の洞窟の如きは屹立（きつりつ）せる岩壁に掘り込み二丈（3.03m）近き高き場所に部屋の広さ三尺（91cm）にすぎざる小さきものあるは、穴居としては解する事能はざるを実見したればなり。（『明治十八年中埼玉県黒岩吉見両村における百穴を探るの記』、昭和３年７月「史蹟名勝天然記念物」第２集第７号）

横穴は墓穴だ　出土地の記載がなければ「学問上にはあまり益なき品々なり」と断じ、横穴は穴居ではなく「墓穴」だと直感した。横穴を畿内の古墳群などと同一とみれば「不思議なく」、石室の構造も古墳のそれと変わらない、部屋の広さが91cmでは居室として狭すぎ、住居と解することは不可能である、と実見した結果を述べた。

穴居説は明治10年ころには流布しており、墓穴説は少数派であった。20年、途中から吉見百穴の発掘に参加した光太郎は、このとき自説の正しさを確信したことであろう。

吉見百穴の発掘調査中、正五郎が『埼玉縣横見郡黒岩村及び北吉見村横穴探究記』を発表すると、神風山人の名で21年『北吉見村横穴ヲ以テ穴居遺跡ト爲スノ説ニ敵ス』（人類学雑誌25号）と題して、正五郎の穴居説に反論した。

論戦のはじまり　古事記を引用して「穴居は横穴にあらずして縦穴」と述べたうえで、同書には住居を横穴とみなす証拠はないとして、北吉見村横穴報告の穴居遺跡と認める非を論じた。

次に坪井の穴居説、５点をあげ、個々に批判を加えた。

1　横穴をつくるのには三つの目的がある

①　住居のため

②　墳墓のため

③　倉庫のため

水はけに注意し、棚を設けているのは、住居と倉庫のみに必要であり、墳墓には不用である。

評者（白井）はいう。水はけに意を用いるのは倉庫と住居とは限らず、墳墓にも必要である。死体が水や湿気に直に接しないよう葬るのは今も昔も変わらない。石棺や木棺に納めて葬るのはそれを嫌ったものであり、塚を築き、山を掘って好んで高燥の地を選んで葬るのは、この意味に他ならない。吉見村横穴は坑口がとても狭いので、棺を使わず、直に床上に安置したのだろうか。そうならば、水はけに意を用いるのはもっとも必要なことで、敢えて疑うべきものではない。

また、棚の有無はあまり関係はない。棚と名づけているが、棚らしいのはなく、棚のある穴はいたって少ない。

2　多くの横穴の構造が大同小異で、遠くない時期につくられたと思われるのは、墳墓というよ

り住居か倉庫のほうが考えやすい

評者。墳墓の一つ所に集在するのは普通のことで、その構造が一様なのはつくられた時が近いことを証明している。その数が多いのは、「居民」の多さを証明している。塚穴が近い間につくられた、と認めているが、墳墓説とは矛盾する。穴が穴居とするには証明不足である。

3　室内に床があるのが住居ならば寝床、墳墓ならば死体を置く所と思われるが、倉庫と見ると、解釈が難しい

評者。これを以て倉庫とするは附会の説であって、評価に値しない

4　武蔵国橘樹郡新作村（神奈川県川崎市）の「4階穴」や連結した穴がある事実は、横穴が穴居である、と推知される

評者。坪井が個々にあげた横穴は、未だ穴居という証拠がない。幾百列挙しても北吉見村横穴の穴居を証明するには足りず、前文のような結論を述べるこそ不思議である。

5　わが国においては古代土雲およびその他で穴居が行われていた

評者。口の狭い穴に人が住んだとは聞いたことがない。自ら4、5日穴の中で寝起きすれば、住居に適しているかどうか、わかるというものだろう。坪井の論は臆説であって、世を欺くだけである。反論を待ち、それに対する論文を発表する。

光太郎の反論は、手厳しく、痛烈であった。当然、正五郎も黙ってはいなかった。

土雲だとか、今では荒唐無稽な論争に思えるが、第一線の学者が繰り広げた論戦は、光太郎の墓穴説を契機に大正まで続いた。

終止符を打ったのは根岸武香の葬儀のおり、弔辞を代読した内務省嘱託の柴田常恵であった。大正14年（1925）のことである。

論争は不毛ではなかった。「コロボックル」の存在が否定される成果もあった。

光太郎は、論争の火蓋を切ったが、以降、論戦を静かに見守った。時折、人類学会創立時の思い出や序文を人類学雑誌などに寄せた。

植物学者・武田久吉は光太郎の懐古談として、「元来考古癖があって、それを専攻したいのは山々であったが、それではなかなか思うように衣食しがたいので、パンを獲るすべとして植物学を選ばれたのだということである」と。

参考文献

白井光太郎著作集　全6巻　科学書院

＊原文の（　）とルビ、傍点は筆者。原文は全て縦書き

＊本項はさきたま史跡の博物館ホームページに連載のものを、加筆して載せました。

さきたまの津を探る

井　上　尚　明

はじめに

「埼玉の津に居る舟の風を疾み綱は絶ゆとも言な絶えそね」これは万葉集東歌の一首で、埼玉の津を舞台にした恋の歌である（十四巻三三八〇）。「埼玉の津」の位置を巡っては、小埼沼周辺にあったと一般的に考えられているが(さいたま文学館2003)、利根川の旧流路であるとする説(奥田1977・丹治1984）や荒川旧流路ではないかとする説（千田1974・佐々木1998)、あるいは利根川か荒川水系か判然としない（中村1994）など、諸説があるのが現状である。『新編武蔵国風土記稿』では、「埼玉の津」は足立郡見沼池、「小埼の沼」は岩槻城下尾ヶ崎村・羽生町場隣村の尾崎村などの説を挙げているが、「さして知るべからず」「その実は知るべからず」など慎重な言い回しをしている。

埼玉古墳群の南端に近い浅間塚古墳には前玉神社が鎮座しており、ここの社殿階段下に「埼玉の津」と「小埼の沼」の歌が刻まれた灯籠２基が建てられている。元禄十年（1697）に埼玉村氏子によって奉納された、日本最古の万葉歌碑である。「小埼の沼」については、万葉集に、「埼玉の小埼の沼に鴨そ翼霧る己が尾に降り置ける霜を払ふとにあらし」（九巻一七四四）の歌が詠まれており、高橋虫麻呂の歌30首以上の中で唯一の旋頭歌である。行田市埼玉の尾崎沼神社境内には、忍城主阿部正因が宝暦三年（1753）に万葉遺跡として顕彰するため建てた「武蔵小埼沼」の碑がある。19世紀前半の『忍名所図會』[1]によると「小埼の沼」の所在地は「武蔵小埼沼」の碑のある場所と断定し、註には船舶の碇留する水駅があったと記している。また、明治十年の『埼玉県地誌略』でも「小埼ガ池」が「埼玉の津」であるとしている。これに対して、前述のように『新編武蔵国風土記稿』では慎重な扱いをしており、古代史や歴史地理の研究者でも諸説がある。しかし、これらの碑の存在によって、「埼玉の津」と「小埼の沼」は一体のものであり、万葉集が歌われた舞台となったのは、碑の場所であったという先入観を抱いてしまっているのも事実である。桜井満はこれを石ぶみの呪縛と呼んでいるが(桜井1986)、ここではこの呪縛を解いて、考古学的に「埼玉の津」について考えてみたい。

写真１　前玉神社万葉歌碑

写真２　武蔵小埼沼碑

1　将軍山古墳石室の石材について

「埼玉の津」を考える前史として、将軍山古墳の石室に使われた房州石の存在を改めて確認しておきたい。将軍山古墳は全長90mの前方後円墳で、明治時代に後円部の横穴式石室から、馬具・乳文鏡・環頭大刀・銅碗など多くの遺物が出土したことで著名な古墳である。特に馬冑と旗ざお金具と考えられる蛇行状鉄器は、朝鮮半島との関係が指摘されるなど、6世紀後半の古墳として際立った存在である。現在埼玉古墳群では、確認されている唯一の横穴式石室であり、石室の側壁・奥壁には千葉県富津市鋸山西麓の金谷海岸で採取された房州石が使用されている（高橋・本間1994）。写真の資料は、凡そ50cm四方で厚さ50cmである。大きさには大小があるが、このクラスが標準よりやや大きい部類である。この房州石を巡っては、近年に限っても石材流通の視点などからいくつかの論考を見ることができ（松尾2004、利根川2005）、被葬者の権力基盤や交流に関わる資料としても注目されている。鋸山と将軍山古墳の距離は約120kmであるが、その間にも房州石を用いた古墳が松戸市栗山古墳群・市川市法皇塚古墳・北区赤羽台4号墳などで確認されている（松戸市立博物館2003）。これらの古墳では房州石と逆ルートで鴻巣市生出塚埴輪窯の製品が供給されており、さらに木更津市金鈴塚古墳では秩父産緑泥片岩が使用されている。房州石の輸送については、研究者の多くが舟運を想定して論じているが、埴輪や緑泥片岩の移動についても下り船であることを考えれば、当然舟運であると指摘することができよう。房州石は近世～近代においても、道路普請や建築部材などとして広く流通しており[2]、舟運を利用して江戸・東京を中心に環東京湾地域に運ばれていた（西川1993）。重量物を大量に運搬するには、輸送効率や運賃の面から、陸上交通より水上交通が上回っていることは江戸時代ばかりでなく現代でも言えることである。石材や埴輪のように重量があり、数個単位で需要が完結するものではない物資の輸送には、季節性・危険性あるいは古墳時代の技術的制約といったリスクを差し引いても、水上交通の優位性は変わることはない。また、海と川を往来するこれらの物資を船積みあるいは荷降ろしするためには、港湾施設とこれに接続する道路も存在したであろう。足立区伊興遺跡のような古墳時代の祭祀を伴う遺跡は、位置的にも海から川への中継地点として注

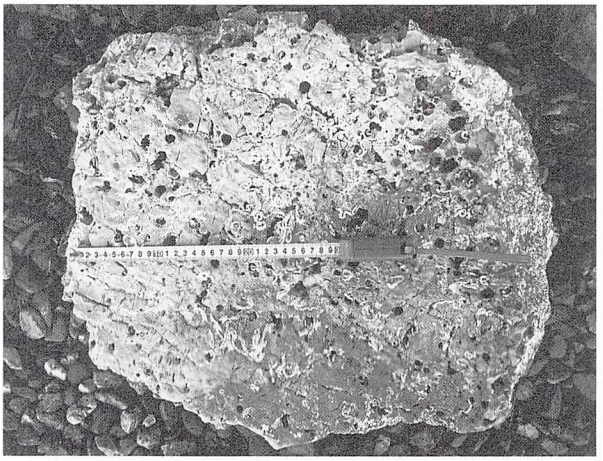


写真3　将軍山古墳出土房州石

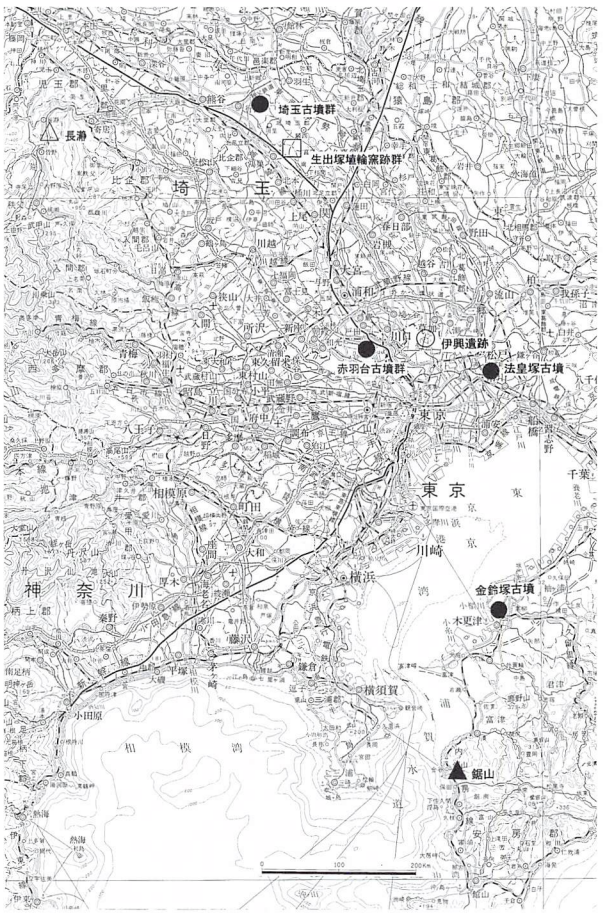


図1　埼玉古墳群と鋸山位置図

目できるのではなかろうか。ここに、東京湾と河川を利用した、臨海地域と内陸部を結ぶ水上交通が6世紀段階まで遡る可能性を指摘しておきたい。

古墳時代における「さきたまの地」と船や河川・湖沼との関わりを証明する考古学的資料として、瓦塚古墳出土の白鳥と考えられる水鳥埴輪や、埼玉古墳群の北1.5kmにある地蔵塚古墳の船を漕ぐ人物の線刻壁画がある。地蔵塚古墳は、埼玉古墳群の北を東流する長野落に沿って広がる低地を挟んだ若小玉古墳群に位置し、一辺28m高さ4.5mの方墳である。胴張りのある横穴式石室の西側側壁に、人物7人・馬1頭・家と船に乗り櫂を持った人物・水鳥が描かれている(栗原1963)。この線刻は追葬毎に追刻されたと指摘されており(金井塚1982)、7世紀中葉から7世紀末までの時期が考えられている[3]。地蔵塚古墳の線刻からは、この地域における7世紀後半段階の船や水鳥と人の関わりの深さを知ることができる。船は小型で乗船する人物は一人であり、福岡県剣塚古墳の線刻画と同様に人物は櫂あるいは棹を持っているが、最も単純な構造の単材刳船と考えていいだろう。各地で発見されている埴輪や線刻壁画からは、帆船や準構造船を見ることができるが、内陸の河川で使用される船については、櫂や棹で推進・操船を行なうこのような単材刳船か複材刳船が主流であったのであろう。あるいは筏式の船であったかもしれない。「埼玉の津」では、帆掛船の存在も想定されているが(丹治1984)、追風を利用する程度の技術段階で河川交通に帆船が存在したか疑問である。中世絵巻からも川船は三材構成の複材刳船が描かれており、帆柱の表現は見られないようで(安達1998)、準構造船は海船として描かれることが多い。江戸時代の浮世絵や道中物などの絵画資料に見られるように、上りについては曳船が中心であったと考えられる。写真4の浮世絵は、広重の安政四(1857)年作『名所江戸百景　四ツ木通用水引ふ祢』(埼玉県立川の博物館蔵)で、四ツ木通用水は元荒川を水源とする本所・深川方面への上水であるが、水路としても利用されていた。柴又帝釈天などへの交通路として利用され、緩やかに蛇行する用水には数艘の船が浮かび、上下船ともに曳船されている様子が描かれている。左岸には平行して走る道があり、船を曳く人物や通行人と船着場などを見ることができる。古代河川交通のルートについても、航路の安全性や操船のし易さ、さらには水路の維持管理・繋留施設の設置を考えれば、大河川よりも川幅が狭く流れが緩やかな中小河川が優位ではなかったろうか。時代を超えてこの浮世絵に近いイメージを想定しておきたい。

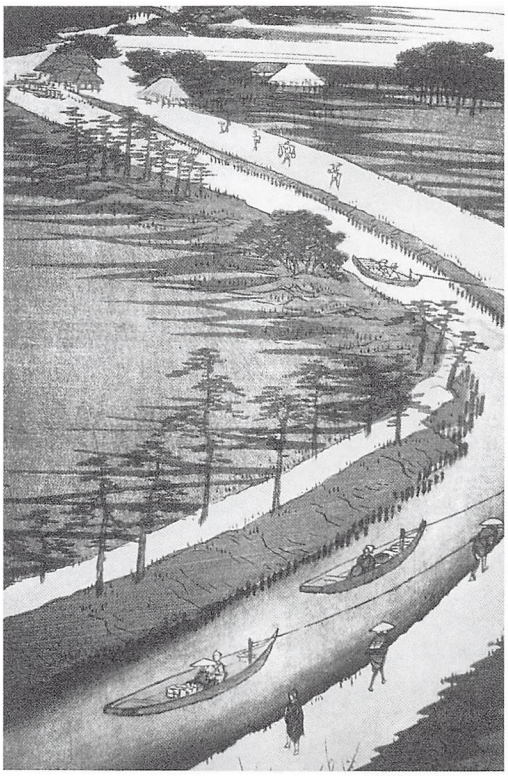


写真4　浮世絵　四ツ木通用水引ふ祢（部分）

埼玉古墳群を中心とした地域の船・川・鳥などとの強い関わりについては、房州石の存在から6世紀後半の舟運、7世紀の地蔵塚古墳に描かれた船の線刻、そして8世紀には万葉集で津が恋の舞台として歌われ、さらに、小針遺跡出土の紡錘車には『丈部鳥麻呂』の線刻が見られるように（行田市郷土博物館2005)、9世紀には人名に鳥の文字が使用されている。これらから推測できることとして、古墳時代から古代にかけての「さきたまの地」には、船が浮かび水鳥が飛び交う景観を復元することができ、数世紀にわたる河川交通の存在を想定することができる。房州石を荷降ろしした場所と「埼玉の津」が必ずしも同一であるとは限らない。しかし、流路変更や施設の再整備などを勘案しても、連綿と続いた水上交通の拠点として、両者は地域的にオーバーラップし、エリアとしても接近した存在であったのではなかろうか。

2　港湾遺跡・埠頭遺構の検討

津に関わる遺跡を見る前に、津が律令でどのように取り扱われているかを若干触れておきたい。各令では、『職員令民部省条』に橋道・津済などの掌握、『営繕令津橋道路条』には修理に関する規定、『雑令要路津済条』では渡船に関することが記載されている。民部省が掌握するのは地図上のことで、実際の維持管理は国・郡司であった。義解では要路の津には船が置かれて交通の便を図ることが記され、承和二年六月の官符では、渡河地点に船を置く例を見ることができる。津済の区別については、津は水上交通の拠点として船が停泊する所で、済は陸上交通上の渡河地点として理解しておきたい。

「埼玉の津」を検討するために、古代の津が遺構としてどのような姿で検出されているか類例を分析する必要があるが、用語の問題についても整理しておきたい。これまで津に関わる遺構として、船着場遺構・桟橋状遺構・接岸施設などと呼ばれていたが、港湾工学の用語に沿って（久宝1985）以下のように整理しておく。水陸交通の連結部を意味する港を運営するには、多種多様な施設が必要であり、防波堤・水門などの外郭施設をはじめ、繋留施設、接岸施設や場合によっては修船施設や航路標識も必要になる。船舶を横付けにして荷役・乗降する水際の施設は、一般的に埠頭と呼ばれる。桟橋などは接岸施設に区分されるが、地質が軟弱であったり水深が不十分な場合には埠頭として桟橋を用いる場合もある。埠頭には陸地を切り込んだ泊渠と陸地から突き出した突堤埠頭などがあり、船を岸に繋ぐけい船柱も埠頭エプロンに設けられている。ここでは、港の管理・運営に関わる建物や埠頭などの陸上施設と、船舶が碇泊する水域を含めて港湾遺跡と呼び、船を接岸し荷降しや乗降するために設置・加工された構造物を埠頭遺構と仮称しておきたい。港湾遺跡の概念を津に相当させ、水上交通と陸上交通の最初の接点であり、津のメルクマールともいえる施設を埠頭遺構と考えておきたい。

港湾遺跡に関わると考えられる遺跡については、静岡県伊場遺跡が津ではないかと指摘されて以来、その後具体例の提示に乏しく久しく検討の俎上に載ることはなかった。しかし、近年日本海沿岸を中心とした各地で類例が追加され、現状では20例近くの遺跡をピックアップすることができる。これらの中で、津の中心施設の一つである埠頭と考えられる遺構について、以下のとおりタイプの異なる３遺跡を取り上げてみたい。

伊場遺跡は戦後まもなく発掘調査が実施された学史に残る遺跡であるが、その性格については現在でも議論が続けられている（山中・佐藤1985）。伊場遺跡・梶子遺跡などを通過する、伊場大溝と呼ばれる河川跡を水路と想定して、津に関わる施設ではないかと指摘されており、桟橋状の杭群や大溝に下りる階段状遺構などが発見されている。７世紀末ころの大溝は、幅12～16m・深さ40cm～80cmでＳ字状に屈曲しながら枝溝と合流し、旧入江が想定される現馬込川右岸地帯に向かっている。さらに南は太平洋である。郡家説・駅家説あるいは厨の雑舎説などがあるが、郡家などの中枢施設とするには躊躇せざるを得ない。また、杭群などには貝塚が伴う例が多く、生活臭の強い遺跡でもある。しかし、両岸に総柱や桁行５間の大型建物を含む建物群が展開し、城山遺跡・梶子遺跡・梶子北遺跡など周辺に郡家を含むと考えられる遺跡が伊場遺跡と一体的に広がっている。大溝西縁の長さ５ｍほどのテラス状面の先端に大きな杭が打ち込まれ、さらに数本の細い杭が溝内に穿たれているＮＦ４は桟橋と考えられており、大きな杭はけい船柱であろうか。対岸のやや南には階段状遺構と幅0.7m、長さ1.7mの２列の杭列、および大溝に並行する杭群で構成されるＮＦ３はテラス状の施設と考えられている。この他に枝溝には橋と想定されるNF12などが発見されている（斉藤他1977）。溝からは「津」を含む墨書土器・「浜津郷」木簡や木製品・土器など大量の遺物が出土している。

図２　伊場遺跡

新潟県門新遺跡は、長岡市（旧和島村）の島崎川低地内の微高地に立地しており、南には古志郡衙の可能性が考えられる八幡林遺跡が所在し、さらに島崎川流域には製鉄遺跡や須恵器窯が多く分布している。八幡林遺跡は８世紀前半から10世紀初頭にかけて機能した遺跡であり、９世紀中ころを境に衰退を始めるが、門新遺跡はこの遺跡の廃絶直後に出現し、10世紀後半まで継続する。位置的・時期の継続性さらに門新遺跡の官衙的な建物配置から、郡衙の解体と共に郡が持つ機能の一部を掌握した、富豪層・首長層の新しい地域支配の拠点と指摘されている（田中1995）。最盛期の10世紀第２四半期には、蛇行する河川に３方を囲まれた範囲に、７棟の建物と川岸に船着場と考えられる遺構が発見されている。建物群の東を流れる河川の左岸側つまり建物群側に、14m×３mで深さ約50cmの長方形のテラス状遺構が河道に面して構築されており、荷の積み降ろしに関わる施設と報告されている。この遺構の西に接するように３×３間の総柱建物があり、船着場と関わる倉庫と考えられている。この時期の主屋となる建物は、７×２間で桁行側東西と南の梁側に２間分の庇が付けられ、南側を除く３面に雨落溝が伴っている。また、上屋を持つ井戸や柵列なども確認されており、漆紙文書を含む多くの遺物が出土している。

山形県古志田東遺跡は、最上川やその支流によって形成された扇状地の末端にあり、９世紀後半を主体とする時期の置賜郡の有力豪族の居館と考えられている。大きく屈曲する河川跡の内側に、掘立柱建物７棟・井戸２基・土壙25基などが発見されており、河川跡からは木橋・船着場とされる遺構も検出されている。中心となる建物は10×３間で北側を除く３面に庇を持つ大型建物で、間仕切り状の柱穴も見られるものである。河川跡は旧堀立川で、幅９～13.7m、深さは最深部で1.5m、平均１mの規模を持ち、西側左岸に直径7.5m、深さ1.4mの半円形の掘り込みと、右岸には直径

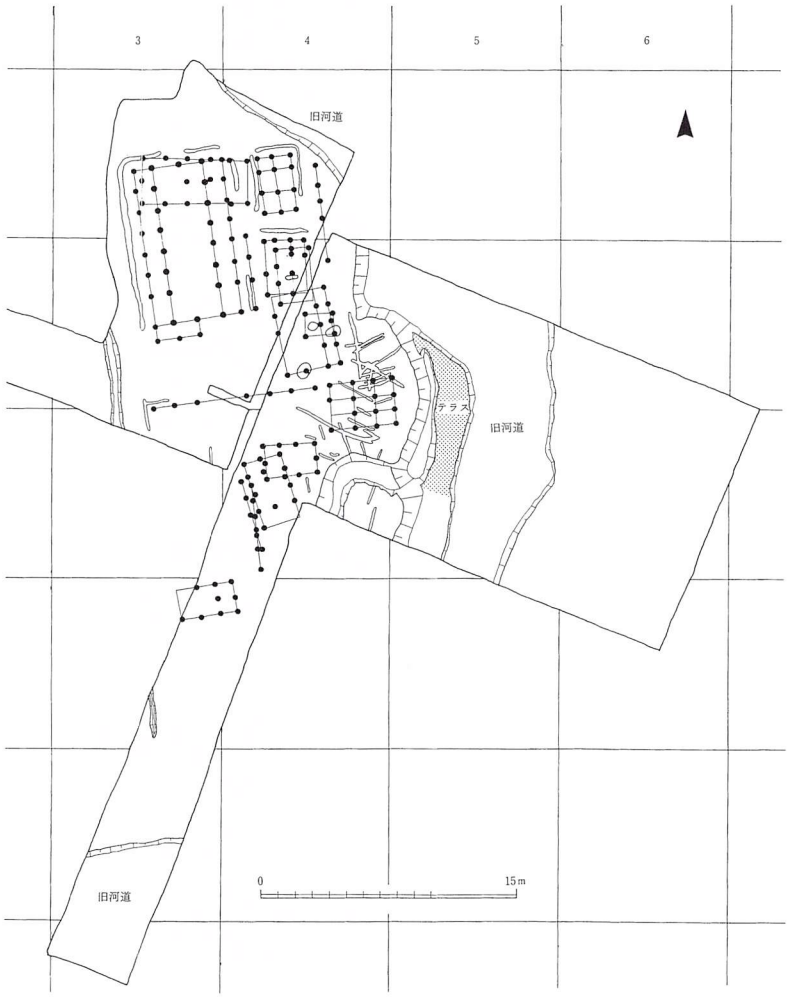


図３　門新遺跡

10m、深さ1.5mの不整円形の掘り込みがあり、船着場とされている。この他に河川縁辺部でＵ字状の落ち込みが６ヶ所確認されており、船を接岸固定する施設と推測されている。建物の性格としては母屋・倉庫・工房・迎賓館的な施設が想定されており、多くの労働力を動員できた有力豪族の屋敷と考察している。出土遺物には、呪術系を含む多くの墨書土器や木製品などと、船着場遺構からは『船津運十人』の木簡が出土しており、文書業務・祭祀などを行い、運河を管理し交易を行う在地豪族の姿が想起できる。

以上の３遺跡の水上交通に関わる遺構としては、桟橋状の杭列・テラス状埠頭・土壙状埠頭の３タイプの遺構が発見されており、桟橋状の杭列は突堤埠頭、後の２者は泊渠に区分できるだろう。これらは、地形や流路などに則した施設を採用しているものと考えられる。類例には桟橋状杭列は新潟県蔵ノ坪遺跡で、テラス状埠頭は石川県上荒屋遺跡で、土壙状埠頭は富山県中保Ｂ遺跡で発見されており、複数タイプが共存する遺跡も見られる。さらに、古志田東遺跡では接岸遺構とされるＵ字状の掘り込みが水路縁辺で確認されている。桟橋状杭列は、埠頭として桟橋を利用しているか、杭列で護岸してけい船柱を打ち込んだような構造が考えられる。テラス状埠頭は、水路縁辺部を水位に合わせて掘り込み、船を接岸して作業スペースとして確保する構造であろう。この構造でもけい船柱が必要になってくるであろう。土壙状の掘り込みについては、本流から船を引き込むような小さな入江を想定できる。古志田東遺跡で接岸遺構とされているものについては、報告書ではそう考えた根拠と船との位置関係が読み取れないが、舳先から引き上げて繋留するものであ

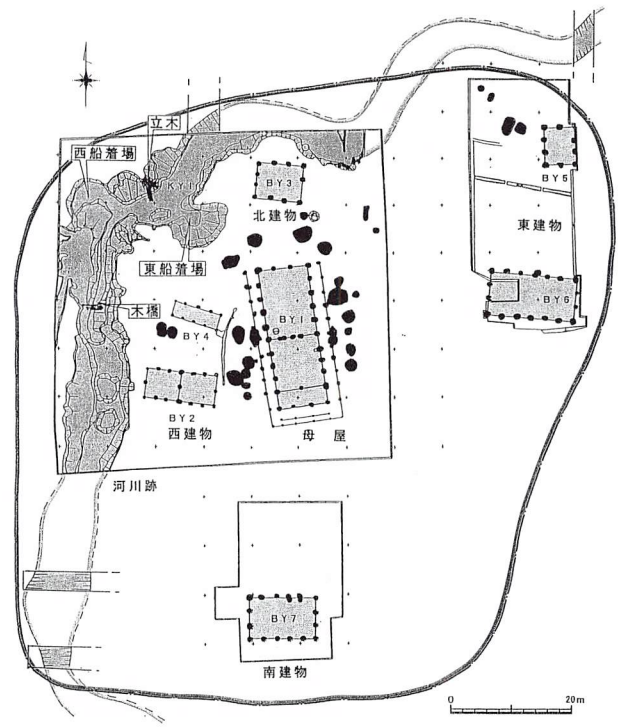


図４　古志田東遺跡

ろうか。何れにしろこれらの遺構は水路縁辺を造作して船を安定させ、物資の積み降ろしをするスペースとして設置したものと考えられる。また、埠頭遺構と道路遺構が接続する例も見られ、石川県加茂遺跡では古代北陸道側溝を源とする水路が西流しており、富山県中保B遺跡でも埠頭遺構から派生する道路が発見されている。これらの例は、船の発着地点が物流の始発や終点ではないことを示しており、物資は陸路によって集積され、陸路によって供給先へ運ばれるもので、水上交通は其れのみで交通システムとして完結するものではない。港湾遺跡は水陸交通の連結部であるとの認識を再確認しておきたい。

なお、出土文字資料を見ると、各地の遺跡から「津」「舟」などの墨書土器・木簡が数十点出土しており、港湾遺跡としてここで取り上げた、山形県古志田東遺跡の木簡をはじめ、富山県中保B遺跡・新潟県蔵ノ坪遺跡などから「津」「津三」といった墨書土器が検出されている。また、内陸部である埼玉県宿宮前遺跡からは「川津」墨書が発見されており、今後出土文字資料の検討も重要な課題となることは間違いない。

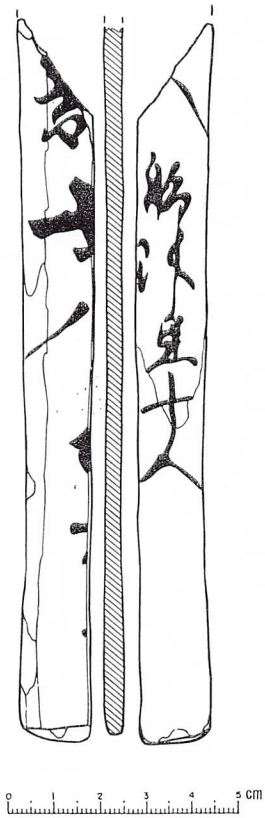


図5　古志田東遺跡出土木簡

3　埼玉古墳群周辺遺跡の検討

現在、埼玉古墳群周辺は標高20mに満たない水田地帯であり、丸墓山古墳の墳頂から周囲を一望しても台地と低地の区別がつかない平坦な土地である。しかし、古墳群の立地する基盤となる地層はローム台地であることが発掘調査で判明しており、周囲には粘土層などが堆積する低地帯が広がっていた。これは関東造盆地運動により台地が低地化している結果であり(堀口1981)、台地は現在より2mほど高かったことも指摘されている。埼玉古墳群の他にも、佐間古墳群・若小玉古墳群・若王子古墳群などが周辺の台地に造営されており、これらの台地の間を縫うように小河川が血管のように広がっていた。埼玉古墳群を中心としたこの地域の地形については、杉崎により復原・検討されており（杉崎2004)、律令時代の遺跡分布についても図化されている。武蔵国埼玉郡は大田・笠原・草原・埼玉・餘戸の5郷から構成される下郡で、東は上野国や下総国と接し、西は足立郡・大里郡・幡羅郡と接する南北に長い郡である。郡家所在地としては、埼玉古墳群や式内社前玉神社と8世紀末から3度の葺替が見られる旧盛徳寺の存在、さらには『矢作私印』や瓦の出土などから、行田市埼玉を中心とした埼玉郷説が有力である。7世紀まで続く埼玉古墳群の被葬者の系統が、律令国家の地方行政機構の中にどのように反映されるのか、あるいは削除されるのか興味深い問題であるが、現状では埼玉郷＝埼玉古墳群周辺にその位置を求めるのが妥当であろう。

埼玉郷を中心とした地域に分布する古代の遺跡としては、小針遺跡・愛宕通遺跡・旧盛徳寺・原遺跡・陣場遺跡・野合遺跡・柳坪遺跡・築道下遺跡・八ツ島遺跡とやや距離はあるが、北島遺跡・諏訪木遺跡・池上遺跡および木簡が出土した小敷田遺跡などがある。北島遺跡と諏訪木遺跡は9世紀以降の豪族居館的な様相が、池上遺跡・小敷田遺跡は官衙的色彩の見られる遺跡である。旧盛徳寺については、寺院跡として明瞭な遺構が確認されてはおらず、瓦の出土を特徴的に捉えたもので、あるいは郡家であった可能性も想定できるのではなかろうか。これらの遺跡のうち、埼玉古墳群から半径3km圏内にある前者の遺跡群は、小針遺跡と築道下遺跡を除くと竪穴住居跡を主体とした集落遺跡であり、遺跡の規模も大きくはない。前章で見てきた港湾遺跡の特徴は、規則的な配置を見せる掘立柱建物群が中心となるもので、庇を有する大型建物や総柱建物を含むことも多い。遺跡の

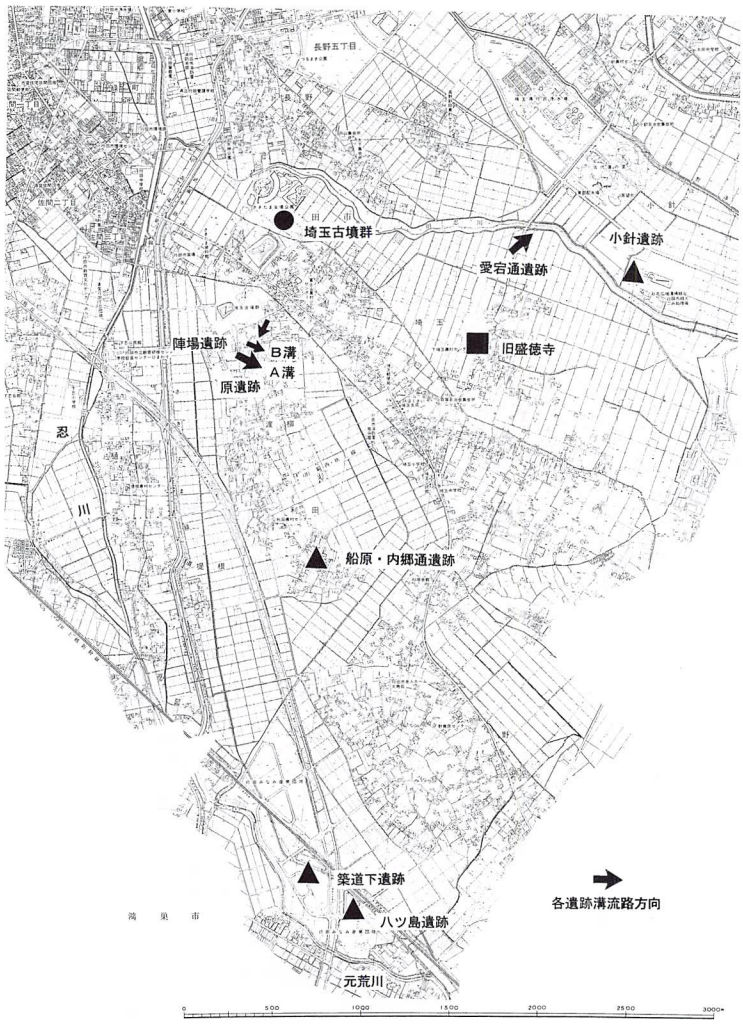


図6　埼玉古墳群周辺遺跡分布図

広がりなどを考慮しても、小針遺跡・築道下遺跡に匹敵する規模の遺跡は見られない。

小針遺跡は、埼玉古墳群の東2km弱の距離にあり、これまで5次におよぶ調査で、古墳時代から平安時代の遺構が多数発見されている。この地域はかつて小針下沼と呼ばれ、昭和10年代の干拓以前は、対岸に船で渡ったと伝えられており、アシ・マコモが繁茂する湿地帯であったようである。古墳時代には、小針型と呼ばれる特徴的な土師器坏のタイプサイトとなっており、埼玉古墳群との関係も強調される遺跡である。律令時代の遺構は主に4・5次調査で発見されているが、2次調査では「私物」や鳥の線刻がある紡錘車が出土している。先述した「丈部鳥麻呂」線刻紡錘車は4・5次調査で発見されている。現状ではまだ整理作業が進んでいないが、3×3間の総柱建物など20棟近くの掘立柱建物跡が発見されており、竪穴住居跡も40〜50軒確認されている。また旧忍川を挟んで南約1kmには「武蔵小埼沼」碑が建っているなど、出土文字資料や位置からは「埼玉の津」の候補の一つとして取り上げることができよう。今後資料整理が進めば、小針遺跡の重要性はさらに増すであろう。

築道下遺跡は、忍川が元荒川に合流する地点のやや下流左岸に細長く伸びる微高地上に位置し、埼玉古墳群から低地に沿って南に3km程の距離である。古墳時代後期以降の竪穴住居跡789軒と179棟の古代の掘立柱建物跡が調査されている(山本他2000他)。報告書では、八ツ島遺跡を含め元荒川を利用した河川交通を強く意識した遺跡と捉え、建物の配置も元荒川を意識し、庇を川に向けた建物の存在を強調している。出土遺物には円面硯・火打ち金・錠・鉄鉢型土器・「寺」墨書土器など官衙・寺院的な色彩の強いものもがある他、湖西産須恵器などの土器も見られる。総柱や四面庇建物を含む多数の掘立柱建物が存在するが、院を形成するような区画施設・建物配置はなく、墨書土器などの出土遺物総体からも郡家とする積極的証拠はない。しかし、これまで見てきたどの港湾遺跡よりも規模的には大きいもので、庇付大型建物が埠頭遺構に隣接する有力豪族層の水運拠点タイプではなく、伊場遺跡に近い公的な施設の可能性が高いといえるだろう。全体像がつかみにくい報告書であるが、遺構・遺物の再検証を進める必要のある遺跡として指摘しておきたい。

以上のような周辺遺跡と「埼玉の津」を考え合わせる時、今一度万葉集の歌の意味を振り返ってみると、「埼玉の湊に泊まる船のように、風が強くて綱が切れてしまっても、愛のことば(恋文)だけは絶えないでほしい」といった内容で、船出する男の無事を祈る女性の歌と解釈されている。津を舞台としたこの歌の背景として、船が碇泊する港とこれを取り巻く古代の港町とも呼べるような、

地方都市的な景観を思い浮かべることができる。この想定を遺跡に置き換えれば、竪穴住居で構成されるような集落ではなく、大型掘立柱建物や総柱建物が並ぶ規模の大きな遺跡と捉えることができよう。現状でこのような景観に該当する遺跡としては、築道下遺跡が最も近いといえる。また、港湾遺跡は陸上交通の拠点でもあることを考えると、築道下遺跡C区63号掘立柱建物跡のような、桁行10間を越える長大な建物に注目したい。このような建物を駅家・津・郡家のような交通施設に関わる主要建物とする指摘もあり（田中2004）、遺跡の性格の一端を示す遺構として特徴的な存在である。この建物は、他の建物群が元荒川に並行しているのに対して、梁行を川に向け直行する方向に建てられており、河川を意識した建物群とは基本的な性格が異なっていることが考えられる。河川と直行する道の存在を示唆している可能性もある。さらに、湖西産や群馬産などの土器が出土するなど、他地域との交流も活発であった様相が見られる。

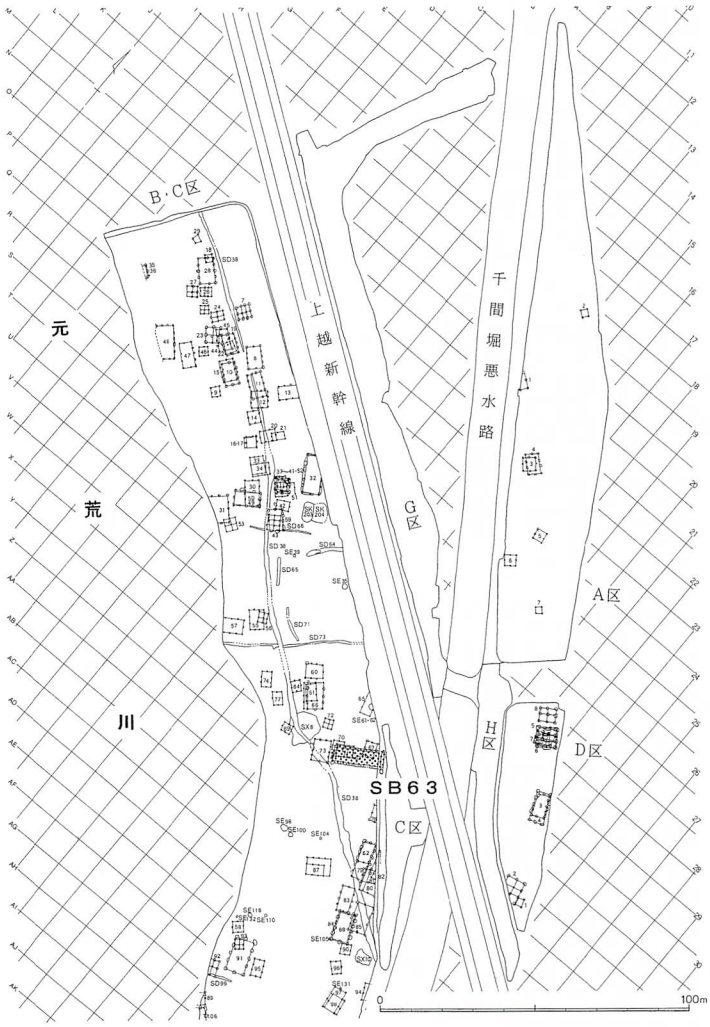


図７　築道下遺跡（SB63周辺）

築道下遺跡では埠頭遺構は発見されていないが、これまで見てきたような状況証拠から、港湾遺跡の陸上施設とその周辺の関連集落とは考えられないだろうか。さらに、元荒川右岸の鴻巣市川面・箕田の微高地ではなく、埼玉古墳群側の左岸に占地したことの意味を重視したい。水上・陸上交通の機能を持った水駅ともいえる築道下遺跡は、物資の集積だけではなく市が立ち宗教施設も併設され、さらに情報の巷（佐々木1998）と呼べるような役割も果たしたのではないか。築道下遺跡と八ツ島遺跡の間に、湾入するような窪地があるが、この窪地に面して四面庇建物や５×３間二面庇建物があり、こういった地点に埠頭遺構存在の可能性を求められるのではなかろうか。先述したように、「埼玉の津」と房州石を荷降しした場所は同じとは限らない。しかし、築道下遺跡出現が埼玉古墳群の造営開始時期と重なることから、両者の関係は密接であると考えられ、港湾遺跡としての機能を６世紀後半にまで遡らせることに異は感じない。また、小針遺跡についても、埼玉古墳群との関係もさることながら、古代埼玉郡において重要な位置を占めていたことは明らかであり、それからのさきたまを解明するキーワードとなる遺跡であろう。

さて、本章の最後に埼玉古墳群周辺で発見されている、古代の可能性のある溝状遺構のうち幅２ｍを超える規模のものについて考えてみたい。該当する溝は陣場遺跡、原遺跡、船原・内郷通遺跡、愛宕通遺跡で発見されているが、形態などからより古代の用水路の可能性の高い、原遺跡と愛宕通遺跡の規模や方向を比較すると次の通りとなる。陣場遺跡と原遺跡は、埼玉古墳群の南に接するように広がる一体となる遺跡群で、陣場遺跡４次・５次調査で幅2.8m～3.5m、深さ1.9m以上の断面

箱薬研状の溝が発見されている（中島1992）が、箱薬研であることからここでは除外する。原遺跡の１～３・６～９次調査で平安時代とされる複数の溝が発見されている。８次調査で検出された部分は幅６ｍ、深さ1.2mほどあり、粘性土が堆積し土師器・須恵器も出土しており、溝の南には竪穴住居で構成される９世紀代の集落が広がっている（門脇2000）。１次と３次調査で確認された溝は、８次調査の１号溝と同一の可能性が高く（Ａ溝と仮称）、約50m北にこれと平行するように２次と６次調査でやや小型の溝が発見されている（Ｂ溝と仮称）。両溝は古墳群のある台地から南東方向に向かって下っていたと思われる。また、９次調査でも幅４ｍ近い溝がＡ・Ｂ溝と直行する方向で発見されているが、Ａ・Ｂ溝と接しているかは不明である。愛宕通遺跡１号溝は、幅3.8m、深さ70cmを測り、壁は急傾斜で立ち上がり溝底は平坦で、北の旧忍川に向かって傾斜している。９世紀後半以降の須恵器坏などを出土している。この溝の他、９世紀前半から10世紀代の竪穴住居跡25軒と埋甕が発見されており、壺Ｇや瓦と鞴の羽口などが出土している（滝瀬1985）。南に隣接して旧盛徳寺が所在し、出土した瓦や時期からも両者は密接な関係にあることが伺える。溝上流は旧盛徳寺の方向に伸びている。

両遺跡の溝のうち、原遺跡の溝は堆積土層から水が流れていた可能性が高く、多くの労働力を投入して幅６ｍの溝を開削している。この溝には枝溝があることが予想され、埼玉古墳群を意識した集落の北辺としても機能していたようである。通常このような溝は農業用水や排水路として開削されているが、台地を斜めに横断するような位置にあり、用水・排水のみの機能であったか疑問が残る。この水路を西に上ると現在の武蔵水路が走る低地が広がり、さらに西には忍川が南流する。東方向には浅間塚古墳を基点とした、大字渡柳と大字埼玉に挟まれた低地に至り、両低地を下れば２km強で築道下遺跡である。憶測すれば、これらの溝は自然河川を経由しながら、築道下遺跡に向かっていたのではなかろうか。部分的な調査であり、現状ではこれ以上の検証も困難であるが、溝状遺構の重要性を喚起する意味も含めて、用水などのほかに水路としても利用されていた可能性を挙げておきたい。

以上、推論に推論を重ねながら「埼玉の津」を築道下遺跡に求めてきたが、越えるべきハードルはまだいくつも残っている。現状は状況証拠の羅列に過ぎないが、周辺地形の分析や遺構・遺物の検討によってさらに状況証拠を固め、地域を絞りながら、埠頭遺構を発見するための科学的調査の機会を待ちたい。

4　古代河川交通研究への序

はじめにで述べたように、古代史や歴史地理の研究者からは古代水上交通に関して多くのアプローチがなされており、千田稔や松原弘宣の研究をはじめ多くの蓄積がある。これに対して考古学からの検討については、報告書や論考などで水上交通の重要さを指摘したり、遺跡の分析では水陸交通の要衝であると記述するに留まっており、具体的な検討は遅れていた。しかし、近年日本海側の各地で埠頭と考えられる遺構の発見例が相次ぎ、それに呼応するように集成や検討も行なわれ、90年代には葛野泰樹・出越茂和などの論考が、2000年代に入ってからは根津明義の分析などを見ることができる。古代道路の発見・認識と研究の進展と同様な状況であるが、まだ認識のレベルでは道路遺構には遠く及ばない。水上の道自体が流体でありカタチが無い上に、埠頭などは遺構としての残存度も低く、道路遺構の研究と比較しても急速な発見例の増加は期待できない。埠頭遺構は港湾遺跡＝津の重要な施設の一つであり、川沿いの集落と区別できる最大のメルクマールとなるものである。しかし、類例の集成・分類などの検討、構造や規模の分析とこれらを基礎とした属性の抽出など、課題は多い。新発見ばかりでなく、これまでの調査で溝状遺構、あるいは河川跡として処

理されていた遺構からの再発掘も重要な作業である。また、本論では港湾遺跡＝津と考えてきたが、官衙としての津と古志田東遺跡のような私的支配が濃厚な津、さらには村落に付随するような津の存在も想定でき、津の名称を官衙に限定するかなど概念の整理も必要である。

遺構以外についても、先述の出土文字資料の集成・検討も課題で、既に遺構とこれらの文字資料が結びつく遺跡も数例あり、「津」以外にも対象とすべき文字のピックアップ作業も必要であろう。この他にも、遺跡分布や旧地形の復原あるいは総体的な出土遺物の観察など環境整備から進め、さらに歴史地理や河川工学など他分野の研究者の協力も得て、拙速ではなく巧遅を目指す分野とすべきではなかろうか。古代交通体系のもう一つの大きな歯車を回転させることで、古代社会の実体に迫る重要なアイテムを獲得できるに違いない。

おわりに

埼玉古墳群を背景にした河川交通は、石材や埴輪といった死者のためばかりでなく、より生活に密着した部分でも流通の要となっていたことは容易に想定できる。また、古墳群の占地自体が、河川交通に大きく依存しており、背景にある被葬者たちの権力基盤もここにあった可能性は高い。ここでは、このような自然環境を含めた河川交通のインフラが整備された「さきたまの地」における、万葉集という古代文学の舞台になった「埼玉の津」をケーススタディーにして、古代河川交通研究の糸口を考古学的側面から探る試みをしてみた。しかし、問題や課題はまだ山積するばかりである。現在同時並行で河川交通をテーマにした分析を行なっているところであり、ケーススタディーの範囲を広げつつ今回の再検討も含めて、多くの方々の意見を聞きながら逐次発表していきたい。

なお、本論を草するに当たり、吉岡康暢・高橋一夫・小堀信幸・川崎晃・根津明義・中島洋一・小倉均の各氏と、船の科学館・高岡市立博物館・高岡市万葉歴史館・長岡市立科学博物館・市立米沢図書館・行田市教育委員会・埼玉県立川の博物館の各機関には情報提供や資料収集などで御協力頂いた。また、当館の杉崎茂樹・若松良一の両氏からは、埼玉古墳群および古墳時代の基礎的な部分について助言を頂いた。文末であるが感謝したい。

注

(1) 『忍名所図會』は天保年間（19世紀前半）に編纂されたもので、忍城や埼玉古墳群の丸墓山古墳などが描かれている。ここでは、1986年の再復刻本を参考にした。

(2) 建築部材としての房州石と石室石材の房州石とは石質が異なるようであるが（高橋・本間1994）、産出地が重複する点、舟運によって搬出する点でここに引用した。

(3) ここでは、地蔵塚古墳の年代を７世紀後半としているが、石室の形態から７世紀前半とする指摘もある。

引用・参考文献

安達裕之『日本の船 和船編』船の科学館　1998
飯坂盛泰他『蔵ノ坪遺跡』㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団　2002
井上尚明「北武蔵の古代交通路について」『研究紀要第10号』㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1993
井上尚明「太平記絵巻に描かれた交通システム」『紀要28』埼玉県立博物館　2003
井上尚明「描かれた道と車」『古代交通研究第13号』古代交通研究会　2004
井上尚明「古代集落と官衙のはざま」『平成18年度考古学講座　古代遺跡再発見』神奈川県考古学会　2006
奥田久『内陸水路の歴史地理学的研究』大明堂　1977
忍名所図會編纂委員会『忍名所図會』行田郷土文化会　1986
門脇伸一『原遺跡（８次）』原遺跡発掘調査会　2000
葛野泰樹「考古学からみた古代水上交通に関する一試論」『鷹陵史学25』鷹陵史学会　1999
金井塚良一「東日本の線刻壁画―地蔵塚古墳の線刻画を中心にして―」『紀要８・９』埼玉県立博物館　1982

行田市郷土博物館『東歌の郷と古代の文字』2005
清原和義「旅と船と」『高岡市万葉歴史館叢書９　萬葉びとと旅』1998
久宝雅史『港湾工学要論』国民科学社　1985
栗原文蔵「古墳壁画の新資料―埼玉県行田市地蔵塚古墳―」『上代文化33』國學院大學考古学会　1963
剱持和夫『築道下遺跡Ⅲ』㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2000
さいたま文学館『万葉漫遊』2003
斉藤忠他『伊場遺跡遺構編』浜松市教育委員会　1977
桜井満『万葉の歌13　関東南部』保育社　1986
佐々木虔一「津・市と情報伝達」『歴史評論574』校倉書房　1998
杉崎茂樹「埼玉古墳群出現当時の地理的景観について」『調査研究報告第17号』埼玉県立さきたま資料館　2004
高橋一夫・本間岳史「将軍山古墳と房州石」『埼玉県史研究29』埼玉県　1994
滝瀬芳之『愛宕通遺跡』㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1985
田中靖他『門新遺跡』新潟県和島村教育委員会　1995
田中広明「それからのさきたま」『幸魂』北武蔵古代文化研究会　2004
丹治健蔵『関東河川水運史の研究』法政大学出版局　1984
千葉幸美・小椋悠子「歌枕のかわ―平安時代の一級河川―」『にほんのかわ第102号』日本河川開発協会　2003
手塚孝『古志田東遺跡』米沢市教育委員会　2001
利根川章彦「関東地方の古代・中世石材流通に関する一視点」『研究紀要第27号』埼玉県立歴史資料館　2005
中島洋一『陣場遺跡（５次）発掘調査報告書』行田市教育委員会　1992
中島洋一『行田市市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』行田市教育委員会　1993
中村太一「古代東国の水上交通」『古代東国の民衆と社会』名著出版　1994
西川武臣『江戸内湾の湊と流通』岩田書院　1993
根津明義『中保Ｂ遺跡』高岡市教育委員会　2002
根津明義「古代における物資輸送の一形態」『古代の地域社会と交流』岩田書院　2005
堀口万吉「歴史時代の沈降運動と低地の形成」『アーバンクボタ19』株式会社クボタ　1981
松尾昌彦「古墳時代後期の石材交流と舟運」『専修考古学第10号』専修大学考古学会　2004
松戸市立博物館『川の道 江戸川』2003
松原弘宣『日本古代水上交通史の研究』吉川弘文館　1985
水島義治「青柳の張らろ水門に―東歌に見られる水辺の歌―」『高岡市萬葉歴史館論集１　水辺の万葉集』1998
山中敏史・佐藤興治『古代の役所』岩波書店　1985
山本靖『築道下遺跡Ⅳ』㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2000
渡部修「万葉集東歌が詠む東国の情景」『季刊 河川レビュー132』新公論社　2005

「寄り合い」の開催について

浅　野　晴　樹

はじめに

当博物館は、昨年４月に「県立歴史資料館」から「県立嵐山史跡の博物館」と改称した。県立歴史資料館は昭和51年に開館以来30年にわたり、埼玉県内における中世資料や民俗資料にかかわる調査を行ってきた。「板石塔婆緊急調査」「歴史の道鎌倉街道上道調査」「中世城館跡調査」「中世寺院跡調査」「中世石造物調査」などであり、それぞれ報告書を刊行し、その情報を広く県民に公開してきた。そして、調査で得られた写真、実測図、拓本などの多くの資料が当館で保管されている。なかでも、板碑（板石塔婆）調査データには、3,000枚を越える拓本を含んでおり、歴史資料としても極めて貴重なものと評価できよう。

このような資料を、今後も長期にわたり保管し、活用を行っていくことは、当館を始めとした県立博物館施設の重要な役割である。

貴重な資料の活用としては、企画展を行うとともに、さらなる活用への模索としてシンポジウムなどのイベントも実施している。2004年度には、企画展「埼玉の戦国時代　城」とシンポジウム「埼玉の戦国時代　検証　比企に城」を行った。

2005年度には、企画展「まほろばの里・比企～慈光寺とその周辺」を実施した。また、企画展関連事業として「記念講演会」と「寄り合い」を行った。「寄り合い」をどのような趣旨で行い、何を目的としたものか以下に説明を行うとともに、今後のあり方について、触れてみたい。

1　「寄り合い」について

「寄り合い」と言うことばは、最近では死語になりつつあるが、地方に行けば、今でも使われている。筆者が30数年前に観た「男はつらいよ」のなかで、おばちゃんがさくらに「ちょっと寄り合いに行ってくるから」と言うシーンがあり、東京の下町でも「寄り合い」と言うことばを使うのかと関心したことを記憶に留めている。筆者の子供の頃には、地域の様々なことを決定するための集まりが定期、不定期に実施され、それを「寄り合い」と言っていた。そして、その「寄り合い」は、中世以来行われてきた地域の集まりであり、決定手段であった。

当館は、地域に根ざした中世の情報発信を行ってきたが、逆に県民や地域の方々の意見を聞く手立てをうまく行ってこなかった気がする。そこで、その手段として歴史を扱う博物館らしい表現で「寄り合い」と表現した。「ワークショップ」「フォーラム」などに通じるものと言えなくもない。

2　全国の文化財活用事例

「寄り合い」に先立ち、午前には全国の文化財活用事例を４例ほど紹介した。今回の展示が、ときがわ町の慈光寺など寺院資料が多いことから、寺院関係の活用事例を三つ、それと城跡の活用事例を一例紹介させていただいた。いずれの事例についても、当該自治体から協力を得た。

国指定史跡石動山（石川県）

石川県鹿島郡中能登町、七尾市、富山県氷見市にまたがる石動山は、能登二の宮とされる伊須流岐比古神社、別当寺石動山などの遺構が所在する。

石動山では現存する建物を保存するとともに、各所で確認調査や発掘調査が行われ、それらの成果をもとに復元整備も進められている。なかでも石動山天平寺を支配する別当寺として、最も権威と格式を誇る坊であった大宮坊の復元・整備が行われた。この復元された大宮坊は、体験学習、文化活動の場として活用が促進されている。

国指定史跡恵日寺（慧日寺）（福島県）

福島県磐梯町に所在する慧日寺は、会津仏教文化発祥の地とされる。慧日寺は平安時代に法相宗の高僧徳一によって開かれた寺院で、東北地方では開基のあきらかな寺院として最古のものとされる。

磐梯町では、慧日寺関連文化財の保存と活用のために慧日寺資料館を開館した。町の重点施策の一つとして、慧日寺の環境整備を進めるとともに、磐梯山西麓に広がる湧水群などの自然と調和した史跡の活用を進めている。

国指定史跡樺崎寺跡（栃木県足利市）

足利氏時二代目義兼によって創建された浄土庭園を持つ中世寺院と言われている。

足利市では、寺院の発掘調査を継続的に行い、発掘調査を基に庭園を復元整備し、史跡公園として活用することを考えている。

国指定名勝東氏館跡庭園（岐阜県郡上市）

東氏は、古今伝授の祖といわれる東常縁の一族で下総の千葉氏の出身であり、鎌倉御家人の重鎮である千葉常胤の六男、胤頼に始まり、三代胤行のとき、拠点を下総から美濃の地に移したとされる。東氏の居館とされる一帯は、発掘調査により、礎石建物、庭園などが確認され、昭和62年に国指定名勝に指定された。この史跡の注目すべき点は、庭園周辺に、和歌文学館、東氏記念館、短歌図書館、レストランももちどり、茶屋いなほせどりなど、文化施設に限らず様々な施設を配し、これらの施設を総称して「古今伝授の里フィールドミュージアム」と呼び、文化財の多面的な活用を図っている。

3　「寄り合い」の概要

企画展「まほろばの里・比企」の関連事業として実施したものであり、主たる展示品が慈光寺を中心とした文化財であったことから、「文化財を活用した町おこし」というテーマとした。しかし、ときがわ町の地域起こしを目的に事業を展開するなどと言う、おこがましいことが念頭にあるわけではない。地域に密着したテーマを検討する試みをとおして、地域のなかで公立博物館がどのような役割を担うべきか、自ら問うことを最大の目的としたものである。

「文化財を活用した町おこし」と題し「基調報告」と「寄り合い」を行った。基調報告は、平泉町世界遺産推進室の八重樫忠郎氏にお願いした。メインの「寄り合い」は、大東文化大学の宮瀧交二氏にコーディネーターをお願いし、コメンテーターとして、歴史環境研究所の菅野進と東京大学大学院教育学研究科の押田貴久の両氏にお願いした。次に、その概要を紹介させていただく。

(1)　基調報告「文化財を活用した町おこし」

（八重樫氏は、平泉町に文化財担当職員で採用され、町内の毛越寺や中尊寺や奥州藤原氏に関わる遺跡の調査を長く行ってこられた。現在は世界遺産推進室で平泉町内の文化財の世界遺産登録に向

けて活躍されている。)

みずからの価値に気づく

平泉町は、観光立町を謳っているが、実は第１次産業がメインである。そして、中尊寺や毛越寺があり、年間200万人の観光客が訪れるが、文化財は厄介ものと言う認識が強かった。しかし、文化財保護の活動を行うなかで、次第に史跡に対する理解が得られ始めた。具体的には史跡の清掃、また、ボランティアガイド事業などの参加により、文化財への理解が一層浸透しはじめた状況であるという。

基調報告を行う八重樫氏

役所の職員の文化財に対する調査では、藤原四代の名前を役場の中で知っている者は、実に22人しかいなかった。金色堂にはアフリカゾウの象牙が使用されており、まさにシルクロードを経て平泉にもたらされたのであるが、そのことを知る町民も少ない。このような驚くべき事実は、行政職員の怠慢であるとともに、文化財担当職員の責任も問われることが指摘された。

文化財の啓発教育も重要なことである。平泉では主に子供を対象として、文化財の啓発活動を行ってきた。それとともに、最近では教員に対しての文化財教育を定期的に進めている。

古代中世において、藤原氏の平泉建設の理念は、理想郷を作ることを目的にした。それは、仏教による秩序の回復であり、戦争のない仏国土の建設を意味した。そのような理念を受けて、平泉では町づくりを行っている。

文化財とは何か

会津若松市七日町通りの例では、観光客０の通りを60万人の通りにしたというものである。その手段として郷土料理を作り、観光客に振舞ったり、交通量調査を行い、現状の把握に努め、次第に集客を行っていったという。この事例に見られるようにそれぞれの地域で、町づくりを行うには、様々な方法があるわけだが、現状を把握するとともに、自ら地域の価値に気づくことが大事である。

郷土自慢には、豊かな自然があり、貴重な文化財が挙げられる場合が多い。常日頃、文化財を邪魔者扱いする平泉町の職員達も、他所に行き郷土自慢をするときは、平泉の寺院などの文化財を出すのである。平泉では、文化財が、地域住民のアイデンティティとして、無意識のうちに確立していた。

私たちにできること

平泉の文化財は、無意識のうちに地域住民が守ってきたものである。平泉では、町条例で景観保護条例を作ろうとしたとき、様々な規制がかかることから非常に住民の抵抗があった。しかし、数年の後に、世界遺産のためには嫌だが、自分たちの子孫の為に良い環境を良い景観を残せるのならば協力してもよいとの流れになり、2005年の１月に議決し、景観保護条例がスタートした。

これからの住民生活は、多くの規制がかかる時代になることは仕方のないことである。今までは、少しの便利さのために、多くの犠牲が払われたことも事実であり、今一度、ゆっくり振り返ることがあってよいのではないか。良い町を残し、良い景観を戻すようにしなければいけなという想いが、住民の方々の中に生きてきたのである。景観条例で、違法な看板は撤去され、新しい歩道は電線を地中化し、歴史遺産を生かした町づくり、ゆっくりできる町、できるだけ歩いて生活できる町にしたいという住民の意思が反映された。

世の中が変化し、価値観も変わっている。あちこちの過疎地の自治体で、活性化のために、企業誘致を進めたが、そのことにより人が飛躍的に戻って来たとは聞かない。なぜか、町に魅力がない

からである。雇用が促進されるだけでは魅力とはならない。地域を見直すには、自らの生き様を変えて行くことである。

平泉町には、毛越寺、中尊寺を始めとした文化財があり、多くの観光客が訪れていることから、平泉町の文化財行政に携わること自体が、取りも直さず文化財を活用した町づくりを実践していることにほかならない。しかし、八重樫氏の話からうかがえるように、文化財の素材の良さのみで、現在の平泉が形成されたのではなく、町民自身の意識が極めて重要な要素であることが分かる。

⑵ コメント　菅野進「文化財を活用したまちおこし」

（菅野進氏は、有限会社歴史環境研究所のチーフプロデューサーで、史跡整備や活用に関わるコンサルティングを行っている。県内の鉢形城跡、河越館跡、さきたま古墳群などの整備に関わって来られた。）

文化財の活用とは、どのようなものであるか。縄文時代の集落遺跡の活用（第27回全国遺跡環境整備会議　資料）では、史跡の場を利用した事例として次のようなことが行われている。

○　ものづくり系の活用（26%）
　土器、石器、アクセサリーの製作体験、宿泊体験、縄文時代の植物の栽培体験など

○　イベント系の活用（20%）
　地場産品の販売、各種のまつり、花見、イベントなど

○　講座・学習系（13%）
　ガイド、自然観察、学習会など
　このような活用には広い意味合いと狭い意味合いの活用がある。

４月から５月の開花時期に下野国分寺には28万人もの人が集まり、史跡 PR には十分な効用が上がっている。また、まつりの中で史跡情報に特化したイベントを組み合わせ、史跡の理解を深めるために、効果を挙げている。また、木原城まつりでは、競走馬のトレーニングセンターがある地の利を活かし、騎乗体験を行っている。このように現在各地で様々な活用が行われているが、狭義の部分の史跡活用は、地域住民を含めた一般来訪者の史跡等への理解を助けるために実施されるものといえる。

文化財を活かしたまちおこしは、普遍的な文化財の価値を認識し、必要な段階を経て、地域住民ひいては地域形成のために資産として生かすことである。そのためには、知るための場や機会の提供として、地域の博物館や資料館の役割が見直されるほか、生涯学習活動との連携充実等も大切になる。それらを検討し、地域住民と行政が一体となって、進めるプロセス全体がまちおこしである。

文化財を活かすというキーワードは、文化財のもつ学術的な認識ではなく、自分たちの身近な問題として、生活の中にどのように活かすことができるのかということを認識することにある。この点を理解するには、様々な事例紹介、史跡や地域を知るための場や機会をつくり、時間をかけて育んでいくことが必要である。基本的にまちおこしは、人づくりである。

宮瀧、押田、菅野、八重樫の各氏（左から）

まちおこしには、明瞭なイメージの提示が必要である。参加する人や組織も多く、そのイメージの裾は広く、明確にして、共有化することが重要である。共有することができないとまちおこしの内容や範囲、役割が判然と

しないばかりか、相互に重要なパートナーを失うことにもつながる。

博物館施設の利用で思うことに、展示品などをみて、わからないことは学芸員などに聞いたりすることはできる。しかし、現在、多くの博物館は、図書館のようにものを調べたりするには、十分な施設とはいえない気がする。今後、もっと活用しやすい場として変わっていく必要がある。

⑶　コメント　押田貴久「文化財を活用した新しい町づくり」

（押田貴久氏は、東京大学大学院教育学研究科博士課程に在席中である。押田氏は、昨年まで玉川村教育委員会に勤務され、生涯学習の実践的活動を行ってこられた。その実践的な活動と玉川村教育委員会勤務の実績を基に、生涯学習によるひとづくり・町づくりについて発言をいただいた。）

都幾川村と玉川村が合併し新しく、ときがわ町になるに向けて、町の新しい目標や姿を合併協議会の中で協議してきた。その中で３つ目標が示された。

１番目に「人と自然が共生する美しい町」で、玉川村には里山文化園というところがあり、里山を一つのキーワードとし地域づくりを行ってきた。そのなかで、地域の子どもは大切な宝である。子どもを地域の中でどのように育てるかということも町づくりの大事な視点である。

２番目に「地域資源を生かし、新しい地域を創造する町」ということで、私たちの生活を支えてきた自然、歴史、文化等の地域資源を大切にして、有効に活用しながら、次世代に継承して新しい地域文化、地域産業を創造し魅力ある町づくりを目指すものである。

３つ目には「人々が共同する活気のある町」とある。一人一人の住民が自立するとともに、なおかつそれを乗り越え共同していくことである。行政、地域の業者、企業、住民というそれぞれの立場で自立した個として存在し協力を求め、新しい町づくりをしていくことが大切である。

「町づくりは住民が主役」ということは昔から言われてきたことであるが、現状はまだまだ行政に依存してしまっている部分も多く、また行政も「私たちがやらなくてはいけないのだ」という意識がまだ残っていると思う。行政の役割は住民の活動のサポート的なものでよいと思う。しかし、最近は行政が手を引きすぎる部分が多い。それは国の政策的な動きもあるのだが、行政から何でもかんでも住民へ、民間へという流れもよくないことである。やはり、住民ができない部分は行政に提案し、実際に前に進めていくことが大事なことである。

文化財の活用ということだが、活用の前提として文化財の保存がある。このことを忘れてしまい活用のことだけを考えることはできない。

しかし今なぜ、文化財の活用のことを考える必要があるのか。ときがわ町の住民にとって「文化財って何？　資料館って何？」という声も多く、住民には文化財や博物館は馴染みの薄いものである。文化財は地域のなかで、価値を共有し、大切にされて、親しまれる存在になっていない。地域の宝物であるために教育普及活動や、学習活動を地域ぐるみで行っていくことが大切である。まずは、「文化財を知る」ということが重要である。そして、「知ったこと」を今度は地域の中で活用する活動に広げていかなければならない。その中で、地域住民が文化財を大切にしようという精神を育てていくことが必要である。

文化財を始め、地域資源を活用することが、地元の商工会からも注目されている。ときがわ町でも観光やハイキング等と文化財が結びつかないかという形で商工担当の方々から相談も受けた。その為に史跡や散策コースを整備しようという話も実際にある。これを機会に地域の方や観光客の方に知っていただけるとよいのではないか。

玉川村には総合グランドがある。年に３回、わずか１時間だが、村のグラウンドを村民挙げて、ボランティアで整備を行ってきた。役場としても住民の皆さんの手を借りて、自分たちのものを自分たちで管理して活用していくことを投げかけ、このグラウンドができてからずっと玉川村では続

いてきました。このように訪れる人、住んでいる人にとって、優しい人作りを、文化財を通して進めてみることが出来るのではないだろうか。

最後に、歴史資料館への期待として、再編については、社会環境の変化にともなう役割の転換というなかで、ある意味仕方のないことかもしれない。これからは博物館として持っているよいものを、どのような形で地域のなかで活かしていくか、続けていくかが重要である。地域住民のための新しい博物館創造に向けた試行として、比企地域の文化財や伝統芸能の保存と創造に向けた新しい文化財町づくりの拠点にすることが望まれる。また、住民主導のマネージメント、人「財」育成（文化財ボランティア、市民学芸員、NPO）としての役割を担う場所として期待されるのではないだろうか。

⑷　宮瀧交二氏「地域に開かれた博物館」について

（宮瀧交二氏は、現在、大東文化大学で教鞭を執っておられる。大学に勤務する以前は、埼玉県立博物館に学芸員として勤務されており、博物館の実践的な活動について非常に造詣が深い。）

埼玉県の財政状況の悪化の中で、埼玉県立の博物館の再編が進められている。

埼玉県立の博物館関連施設11館（埼玉県立歴史資料館、埼玉県立博物館、埼玉県立さきたま資料館、埼玉県立自然史博物館、埼玉県立民俗文化センター、埼玉県立近代美術館、さいたま川の博物館、埼玉県立文書館、埼玉県立埋蔵文化財センター、埼玉県平和資料館、さいたま文学館）が、果たして本当に“地域に開かれた博物館”だろうか。

県立博物館関連施設の再編が進められ、閉館（県立民俗文化センター）・移管（県立歴史資料館）等の日程が決まる中で、利用者（県民）から存続（現状維持）を求める声が上がらなかったことを、博物館に勤務する者達は、深刻に受け止めるべきではないか。

地域に開かれた博物館の４つの条件

①　都・道・府・県や市・区・町・村といった行政区分を超えたエリアの対象とする活動を行うべきでないか。

埼玉県立歴史資料館では、「比企歴史の丘」構想の中で拠点施設として位置づけられ、巡回展を開催してきた。県立であったとしてもそれぞれの館の所在地域を対象とした活動に重点が置かれることは当然ではないか。

その活動のなかで、先ず特定の「地域住民」と「何らかの関心を持つ県民」を把握することに努め、徐々にこれを拡大していくことこそ大切ではないか。

②　地域住民と一体となった博物館活動の実施が必要ではないだろうか。

平塚市博物館では、「放課後博物館」として住民参加の調査・研究活動を行っている。そのような住民が参加した事業展開を歴史資料館も実施してくればよかったのではないか。普及事業などではボランティアの積極的な参加は見られるが、展示や研究などの活動にも地域住民の参加がもっとあってもよいのではないかと反省される。

③　博物館の本来的活動（展示・普及事業等）に加えて、地域住民に親しめる諸活動を実施してよいのではないか。

博物館が普段から地域住民に親しめる場として役立てることを怠ってきたと思われる。例えば、博物館の中庭で、フリーマーケットや農産物を販売することでもよいはずである。

将来的には「道の駅」や「農産物直売所」をはじめとする各種商業施設・観光施設等との複合施設化も視野にいれてもよいのではないか。

④　地元自治体の行政との連携を積極的に行うべきではないか。

地元自治体への長期計画策定への参画

学校教育・社会教育の支援

地域の文化財の保存・管理（博物館の一義的機能は、資料保存機関）

地元自治体の長期計画等策定などに、県立施設が位置づけられてもよいのではないか。そのような場に博物館が認識され、組み込まれる状況になっていかなかったことは、博物館職員に責任の一端があるのかもしれない。

博物館職員は、一歩踏み出した博物館を作ることを考えるべきであり、また地域住民も積極的にいろんな要望を出していただき、どんどん自分達のものとして活用していただきたい。

⑸　参加者の意見など

参加者　八重樫さんや菅野さんの話では、町づくりに関して説明をいただいたが、地域住民と外からの訪問者とでは、文化財に関してのイメージにギャップがあると思う。コンサルティングの立場でどのように考えるのか。

菅野　史跡の活用を活かした町づくりが、どのようなものなのかというと、なかなか形にならない。また、地域が外に向けて発信しているイメージが、外の方はＡと思っているのに対し、地域ではＢというイメージである場合もある。そのため、来訪者のイメージを壊す結果は当然起こり得る。地域では、来訪者のイメージを壊すというようなことはしたくない。この２つのイメージを活かした方向性の町づくりをしていくことが必要か。

八重樫　飽きられないように、継続的に工夫したり、他地域との連携が必要だ。例えば、温泉、おいしい食べ物、文化財など地域を越えて来訪者に提供する。平泉では、食べ物のコンテストを行ったりして、住民間でも工夫を進めている。

参加者　文化財とは直接関係ないのですが、ボランティアの基本的なあり方についてお聞きしたい。

押田　ボランティアの基本は、相手が望むことに対し過不足なく応えることと、教えられた。過不足なく応えることは難しいことである。そして、知らないことは、知ることからはじめる必要があるのではないか。

参加者の発言

参加者　以前、中山道をテーマとして、板橋区、蕨市、長野県、滋賀県の自治体など都県を越えて連携した企画展があった。このような広域的に連携した事業は、魅力がある。県立博物館ももっとそのような事業展開をするべきではないか。

県立文書館の図書室は図録がそろっており、よく利用するのだが、博物館でも過去の図録を手軽に閲覧でき、情報が手に入りやすい環境があるとありがたい。そういう知的な好奇心を続けていける環境を私たちは求めている。

参加者達

参加者　市町村立の博物館は、行政エリアを越えた展示や活動をなかなかやらない。そのようなとき、県の役割はやはり大きい

のではないか。

参加者　行田は足袋産業が盛んであった関係で、足袋にかかわる工場や倉などが残っているが、それが次第になくなりつつあり、行政では保存することがなかなかできない。そこで、地元の方々の協力でNPO法人を作り、保存に向けて活動を行っている。その足袋工場を保存する手段として、博物館として活用できないか思案していたところ、県のNPO法人に対する補助金をいただくことができた。このような形で、地域住民と文化財を残すこともできると思う。地域に帰って、自分達でやはり活動を行うことが大事かと思う。

参加者　慈光寺等の文化財をあらためて知ることができよかった。実際お寺が繁栄した頃の地域の生活が分かると地域の方々も親近感が沸くのではないか。大変立派なものがあっても、エピソード的なものがなければ、何か惹かれるものがないのではないか。

宮瀧　慈光寺には国宝が展示されているが、慈光寺の直ぐ近くに博物館があってもよいわけである。これからの博物館は、単に展示のみでなく、美味しいレストランなどが併設されており、展示の見学とともにレストランで、ワインを飲み食事できて、一日家族で過ごせるような場を作って行くことも大事だと思う。従来の博物館のようなあり方ではだめで、地域の中で複合的な要素を作って行く必要があると思う。このような内容は、地域住民からの声を上げて頂くことが、行政側が動く要素となると思う。また、規制緩和も必要ではないか。役所に特定の業者を入れてはいけない等があったが、公立の博物館なども緩やかな対応が必要ではないか。企業などのスポンサーを得て、活動することも必要である。

押田　宮瀧さんから規制緩和の話がありましたが、規制緩和は、国民や住民を守るために造られたもののはずである。しかし、住民を阻害するものがある。今、少し緩める方向にありますが、規制をきめるのも住民である。地域づくりの視点では、住民が主導的に決めていくことが大事だと思う。規制についても住民との話し合いの中で、決めていく必要があるのではないか。

参加者　宮瀧さんから、県の博物館の実情を聞きましたが、県の予算が多額の負債を抱え大変な状況であることは分かるが、文化行政に多大な影響を与えていることは納得できない。そして、社会的にも経済優先の状況が強いなかで、博物館などの知的好奇心を呼び覚ますような施設は、お金に換算できないはずだ。そのような中で、博物館施設も、こども向けの事業も行われているようですが、そのようなこども向けの事業を行っている施設が廃止されることはよくないことだ。コンピュータなどでバーチャルな博物館などを体験することは出来るが、博物館で得た実体験は、子供には貴重な経験である。子供の教育には博物館は重要だ。行政の中で、経済効果などが優先されるなかで、博物館などの文化施設が廃止されることは、将来に問題を残すことだと思う。

このほか、参加者から同趣旨の多くの御意見をいただいたが、全てを掲載できなかった。御容赦いただきたい。

⑹　共通する認識

基調報告を行っていただいた八重樫忠郎氏、コメンテーターとして発言を頂いた菅野進氏、押田貴久氏、さらにコーディネーターをお願いした宮瀧交二氏、また、参加者の多くから意見をいただいたが、そこで共通する認識を整理してみよう。

- 郷土自慢として文化財（地域のアイデンティティの確立、創出）
- 町おこしは、人づくりである
- 博物館は文化財活用の中核として必要
- 博物館単体としての活動のみでなく、行政の枠を越えた連携が必要
- 博物館に対する評価の変化を把握し、博物館自身が変わる必要がある

・学芸員、文化財職員の怠慢、職務意識の欠如、学芸員を含めて文化財職員の意識改革

このような指摘を受けて、今後、当博物館がどうあるべきか、また「寄り合い」的事業をどのように進めるべきか考えてみたい。その前に、事業実施前に行ったアンケート結果と、従来当館が行ってきた市町村との連携について述べたい。

4　ときがわ町内における文化財意識調査

「寄り合い」時の参考資料として、ときがわ町内で文化財の意識調査を行った。本来、ときがわ町の住民意識調査とときがわ町来訪者の二面からの調査を行いたかったが、時間的制約もあり、地元住民の意識調査は行うに至らなかった。今回は来訪者に主体をおき実施した。

場所は、ときがわ町「とうふ工房わたなべ」の御協力を得て、工房の駐車場で行った。「とうふ工房わたなべ」は来訪者が平日でも500人を越えており、ときがわ町でも町外の方が多く集まるところである。アンケート調査実施日は、2006年1月21日（日）午前9時から午後2時頃まで実施し、145名の方からアンケートを取ることができた。アンケートの狙いとしては、来訪者のときがわ町の文化財や歴史資料館に対する認識を中心に行った。

第1表は、来町者の住まいを聞いたものである。比企地域が81人と最も多い。次いで、比企地域周辺の坂戸市、日高市、川越市などの市町村が48名で続く。ときがわ町内は8名と少ない。さらに、都内を中心とした県外の方が8名であった。第2表は、歴史資料館の認知度を知るために行ったものである。県立歴史資料館見学を目的としない方々の調査であることから、比較的厳しい結果がでるものと想定した。比企地域を中心に137名からのアンケートにも関わらず、85人、59パーセントの方が歴史資料館を知らないという結果であった。歴史資料館が設立されてから、30年を経過したことから考えて、やや厳しい結果と言わざるを得ない。従来、博物館などで行うアンケートは、博物館来館者を中心に、来館目的、事業の内容などを問うことが多く、資料館外において、歴史資料館自体の認知度などを問うたことはなく、検討資料としては貴重な結果を得ることができた。また、表で示さなかったが、ときがわ町にある文化財に関しての認知度についても調査を行った。対象文化財については、慈光寺、多武峰、小倉城跡、代官跡などを対象としたが、慈光寺以外は、ときがわ町外の方にはほとんど認知されておらず、それぞれ10パーセントにも満たない状況であった。それに対して、慈光寺は、比企地区内の方を中心に認知度は高く、「よく知っている」「一応知っている」を合わせて79名であった。しかし、他群市、県外者には極めて知名度が低い結果がでた。慈光寺には、国宝法華経一品経、重要文化財開山塔など多数の文化財があるが、その認知度は極めて低く、「よく知っている」「一応知っている」と合わせて44人と全体の3割程度であった。

第3表以下は、歴史資料館内で企画展「まほろばの里・比企」の際に得たアンケート結果である。第4表を見ていただくと分かるように、圧倒的に企画展を目的としての来館が多いことが分かる。このような、結果は当然のことである。

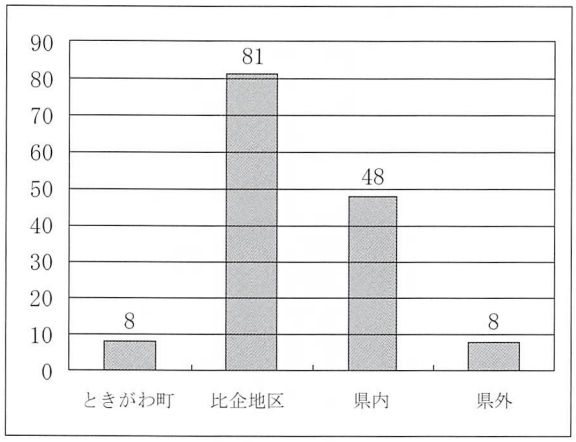
目的を持った方に対しての意識調査のみならず、今後は地域に出てゆき、博物館にあまり興味のない方々の博物館や文化財に対する要望や意識調査、PRなどを積極的に行っていく必要を痛感する。それは、当館のみならず、博物館全体で考えることではなかろうか。

5　地域との連携

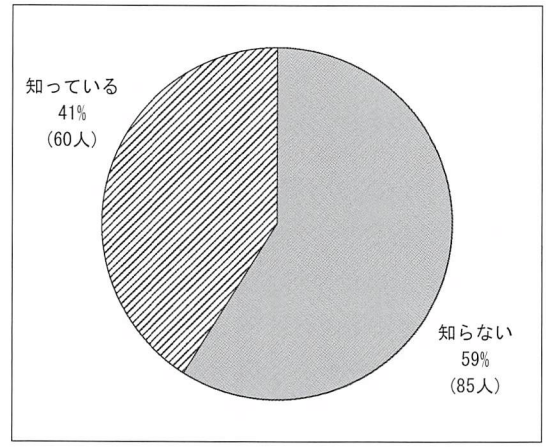
比企歴史の丘整備事業の一環として、比企管内の市町村、市町村教育委員会などとともに様々な事業を展開してきた。その主要なものとしては、平成12年から継続して実施している「比企歴史の

ときがわ町内における文化財意識調査

第１表　どちからか来られた

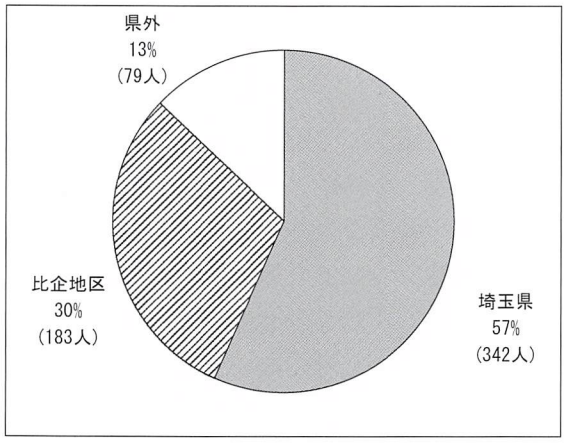


第２表　歴史資料館の認知度

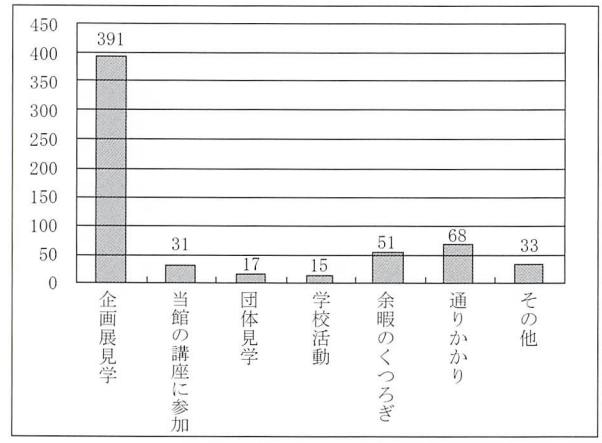


企画展「まほろばの里・比企」観覧者動向

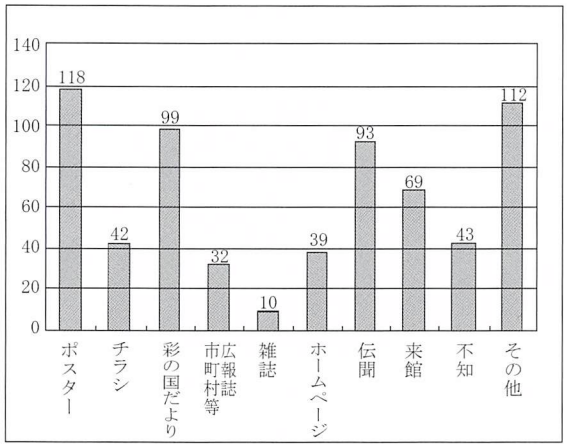
第３表　来館者住まい



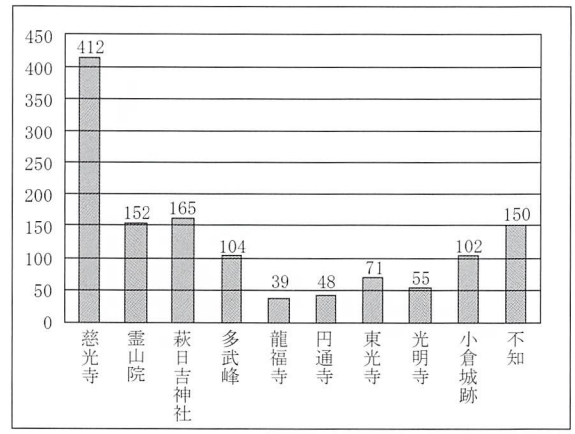
第４表　来館の目的



第５表　認知経路



第６表　文化財の認知度



丘巡回文化財展（比企のタイムカプセル）」がある。各市町村の展示施設、公民館などを利用し比企地域の文化財を紹介するもので、例年8,000人近い観覧をいただいている。

平成16年度に実施したシンポジウム「埼玉の戦国時代　検証　比企の城」は、比企管内の教育委員会文化財担当職員の集まりである比企地区文化財振興協議会、県立さきたま資料館、県立埋蔵文化財センター、県内の歴史研究団体の共催で実施した。さらに、国立女性教育会館・比企地区市町村教育委員会連合会・埼玉県地方史研究会の後援も得ることができた。従来の「比企歴史の丘巡回文化財展」と異なる点は、テーマに対して学術的な検討を加えるとともに活用に向けての検討を行った点である。

企画展「まほろばの里・比企」においても、都幾川村、玉川村（会期中に合併しときがわ町となった）内の商工会の協賛をいただき、極めて意義のあることであった。しかし、県機関へのお付き合い的な事業参画では、継続的な事業展開ができないことは予想されることである。地域と密着した形での連携がなされ、地元自治体や各種団体にとっても有益なものでないといけない。

平成18年度に実施した企画展は、東松山市・吉見町・嵐山町の三自治体、東松山市教育委員会・吉見町教育委員会・嵐山町教育委員会・小川町教育委員会・川島町教育委員会・鳩山町教育委員会・滑川町教育委員会・ときがわ町教育委員会、東秩父村教育委員会との共催事業であったとともに、国立女性教育会館・大東文化大学などの後援を得た。企画展関連事業として行った講演会およびシンポジウムに際しては、自治体職員にはパネリストおよび受付などのスタッフとして多数の参加をいただいた。国立女性教育会館には会場の提供をいただき、大東文化大学の教員の方々にはパネリストして参加いただくとともに、会場からの活発な発言をいただいた。

6　今後の「嵐山史跡の博物館」の役割と課題

今後、当博物館は、比企地域のガイダンス施設としての役割に主体を置くとされる。博物館施設が、地域のガイダンス施設として存在することは当たり前のことであり、さらに地域社会と乖離した博物館などありえない。また、博物館は、学校教育の補助機関として存在するものではないはずである。地域に根ざし、情報発信の場としての役割は、極めて高いものである。

押田氏は「社会環境の変化にともない資料館の役割なども転換している」と指摘されていた。博物館や資料館の役割は、単に展示やイベントを開催することのみでなく、重要な要素として資料の収集、整理、保管などの事業がある。これは、決して社会環境の変化があったとしても変わってはいけない博物館の役割である。しかし、我々は社会情勢の変化を的確に読み取り、対応することに対して緩慢すぎたのではないか。その結果の一つが、博物館の統廃合である。

例えば、少子高齢化社会の到来、行財政改革の中での博物館施設の経費節減、統廃合などの現実的問題に対して、我々学芸員が、どのように考え対応してきたであろうか。ときがわ町での意識調査に見られた低い歴史資料館の認知度、また、宮瀧氏が指摘した博物館存続の反対運動がまるで起きなかった現実もその一つである。博物館が如何に地域のなかで、地域住民の生活に密着した空間として認識されていなかったのか、地域になくてはならない空間として認知されなかったのか。いずれも博物館に勤務する職員の責任は大きなものと反省しなければならない。八重樫氏も同様に、平泉町職員の歴史認識の低さを指摘し、担当職員の怠慢に原因の一つがあることを述べていた。

「寄り合い」参加者の発言にもあったように、情報発信の場、活用の場としての博物館の役割を望む声も強い。また、毎月実施する歴史講座に参加される方々も、継続的かつ高度な勉学意欲を示され、もっと回数を増やしてくれと要望されている。図書の開放なども要望されている。また、今年１月12、13日に実施したシンポジウム「武蔵武士と寺院」には、実に753名の参加を得ることができ

た。しかし、地域に根ざした情報発信は、一機関でできるものではない。地域との連携があってはじめて可能なことである。さらに言うならば、継続的情報発信は、博物館本来の資料収集や研究活動に裏打ちされ始めて可能なことでもある。

宮瀧、押田両氏のボランティアの活用とあり方について御指摘をいただいた。今は、多くの博物館施設がボランティアの活用を進めており、そのような流れは、間違いないものと思っている。当館でも多くの方々に御協力いただき、様々な普及事業の運営を行っている。しかし、今は一方的にこちらの都合でボランティアの活用を行っている側面が強く、ボランティアに協力いただく地域住民の意向が十分反映されていない状況がある。

今、我々の博物館では、すべての事業においてアンケートを取り、事業に対する反応などを問うている。しかし、博物館に来館する方々のアンケートでは、一面的であることは先の結果を見れば分かる。博物館に興味のない方々の意識の把握には、博物館内のみで実施するのでなく、地域社会に出て行き、実施することが大事なのではないか。

おわりに

今、県立博物館が、地域のなかでどのような役割を担うべきかを、我々行政の人間が判断するのではなく、地域に率先して出て行くことにより、活路を見出す必要を切に感じている。

ここ数年、比企地域の市町村と連携して巡回文化財展「比企のタイムカプセル」を実施してきたが、このような既存の事業を通して、文化財の啓発活動を引き続き行うとともに、博物館活動、文化財行政全般に対する要望などを直接住民との対話のなかから得ることを「寄り合い」として位置づけたい。

「寄り合い」は、嵐山史跡の博物館の今後を考えていく上で、多くの方々から当館にどのような役割があり、どのような活動を行うべきかを問う手段として、是非とも今後も続けて行きたいと考える。

企画展「武蔵武士と寺院」記念講演会・シンポジウムのアンケート結果について

君　島　勝　秀

はじめに

埼玉県立嵐山史跡の博物館では、平成19年１月13日（土）に企画展記念講演会、翌14日（日）にシンポジウム「武蔵武士と寺院」を国立女性教育会館講堂において開催した。これらの事業（以下、講演会・シンポジウム）は、平成18年12月９日から平成19年３月４日まで開催された企画展「武蔵武士と寺院」の関連事業として行われた。

企画展では、正法寺、安楽寺をはじめとする比企地域にある寺院と中世の武蔵武士とのかかわりについて焦点を当てて、経塚出土の経筒、板碑、宝篋印塔、蔵骨器などの中世寺院関係の考古資料を中心に展示を行った。講演会･シンポジウムではこの企画展の内容を補強する意味合いも含めて、文献、考古両面からの最新の研究成果を踏まえた内容となった（詳細は「武蔵武士と寺院」シンポジウム実行委員会資料参照）。

当日は実行委員会を組織して運営された。講演会では、最初に中世関連の芸能として横瀬人形芝居保存会による説経節「親子対面矢取りの場～小栗判官実道記より」の上演が行われた。説経節は中世以来の浄土信仰の流行から説経が芸能化する中で生まれてきたものである。上演は舞台のスクリーンに映した人形芝居の映像に合わせて、三味線と語りを進めた。次いで都立大学名誉教授、峰岸純夫氏より講演「大蔵合戦と武蔵武士」が行われた。翌日のシンポジウムでは、５名の中世研究者による発表がそれぞれ行われた後、午後から発表者を含めた10名の研究者がパネラーとなって、質疑応答や活発な意見交流が行われた。

今回参加者からアンケートの御協力をいただき、講演会・シンポジウムの内容や今後の事業に関する感想・意見・要望等をいただいた。今後参考とすべき貴重な内容である。以下、アンケートの集計結果について報告する。

アンケートの集計結果について

講演会・シンポジウムの参加者は、１日目（講演会）が410人、２日目（シンポジウム）が343人であった。このうち、回収されたアンケート数は138枚である。

１．どちらに参加しましたか。

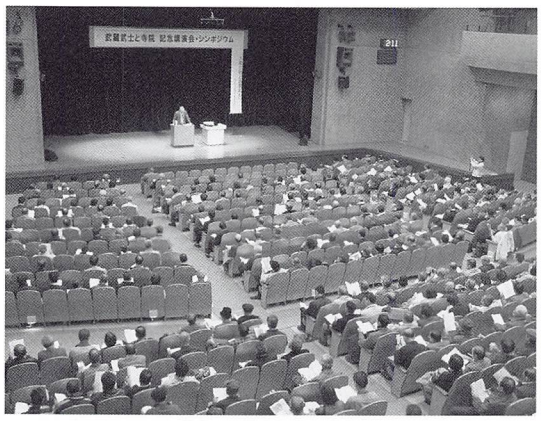
講演会のみ（29人）　シンポジウムのみ（34人）　両日参加（69人）　無回答（６人）

２．性別を教えてください。

男性（110人）　女性（27人）　無回答（１人）

３．年代を教えてください。

19歳以下（０人）　20代（２人）　30代（10人）　40代（11人）　50代（13人）　60代（62人）
70代（35人）　80代（３人）　無回答（２人）



講演会会場風景

設問１～３については、講演会とシンポジウムの連日参加者が多く、参加者の強い学習意識を示している。性別・年齢層から見ると退職後の余暇を利用した男性の高齢者が圧倒的に多い。

４．お住まいを教えてください。

嵐山町（15人）　比企郡（42人）　入間郡（35人）
大里郡（５人）　秩父郡（０人）　児玉郡（０人）
北埼玉郡（０人）　北足立・埼葛郡（28人）
その他県内（６人）　県外（６人）　無回答（１人）

アンケート回答者の住所では嵐山町を含めた比企地域が57人で最も多く、次の入間郡内では川越市、所沢市、毛呂山町、坂戸市が多く、いずれも鎌倉街道や武蔵武士関連の史跡がある地域である。北足立・埼葛郡ではさいたま市、鴻巣市が多い。県外では東京都、群馬県、神奈川県の回答を得た。

５．今回の講演会・シンポジウムをどのような方法でお知りになりましたか？（複数回答）

ポスター（13人）　リーフレット（38人）　彩の国だより（42人）　役場の広報誌（16人）
新聞記事（16人）　雑誌等（１人）　インターネット・博物館ホームページ（14人）
テレビ・ラジオ（０人）　知人に聞いて（15人）　学校で聞いて（０人）
博物館に来て知った（29人）　その他（２人）

今回の広報では企画展ポスター・リーフレットを県内の博物館、図書館及び、近県の大学、研究機関、博物館へ配布したほか、彩の国だより（県の広報誌）、比企地域の各自治体の広報誌に案内が掲載された。新聞・テレビ・ラジオでは朝日新聞社、埼玉新聞社、テレビ埼玉、FM 埼玉で広報され、雑誌では歴史読本に掲載された。アンケート結果では、彩の国だより、リーフレットに次いで、当館に来て初めて講演会・シンポジウムについて知った方が多いのが注目される。

６．講演会・シンポジウムの感想

良くわかった。（36人）　わかった。（45人）　まあまあわかった。（33人）
良くわからなかった。（２人）　無回答（20人）

内容の理解度については「良くわかった」「わかった」「まあまあわかった」までで全体の８割になるが、一方で無回答も一定数存在している。

７．企画展「武蔵武士と寺院」は御覧になりましたか？

もう見た。（57人）　後で見に行きたい。（78人）　見るつもりはない。（２人）　無回答（１人）

講演会・シンポジウムの会場となった国立女性教育会館は嵐山史跡の博物館と隣接している。このアンケート結果からは、参加者の中にはあらかじめ企画展の観覧とセットで講演会・シンポジウムに参加した方も多かったと考えられる。また、シンポジウムに参加してから改めて企画展も観覧したいと考えた方も多かったことを示している。講演会・シンポジウム会場と企画展会場との地の利を生かした双方向の人の流れが作出され、企画展観覧者数は２日間で325人を数えた。

８．今後、どのような事業を行ってほしいですか。

（記述式）　全62件

(1)　武蔵武士や秩父平氏に関するもの　12件

比企一族について。武蔵七党について。平家物語と武蔵武士について。比企丘陵の武士団の変遷。氏姓から見た武蔵武士団の全国展開について。秩父平氏についてなど。

(2)　戦国時代に関するもの　12件

後北条氏の城と合戦。後北条氏と上杉関東管領の城。戦国期の比企地域の城跡。埼玉の城跡についての最新情報。古河公方について。戦国大名、国人等の領国支配についてなど。

シンポジウム風景

(3)　上記以外の中世に関するもの　2件

中世の文化・習慣・生活・民家について。被支配者側から見た中世の世相（歴史）について。

(4)　中世以外の時代に関するもの　7件

古代のことをもっと知りたい。比企地域の古墳について。横穴群の検証。県内の万葉集について。高麗人と埼玉について。古代の鋳造遺跡について。江戸時代の武士の農村支配について。

(5)　神社・寺院に関するもの　4件

廃寺の見学説明会。鎌形八幡神社について。寺院伝承について（住職から聞く）など。

(6)　鎌倉古道や街道について　3件

鎌倉古道（生産と流通など含めた内容）について。街道と城館跡との関係についてなど。

(7)　対象地域についての要望　14件

比企地域の歴史や文化をこれからも取り上げてほしい。（5件）

比企地域以外（入間地域、川越、さいたまなど）の地域ももっと取り上げてほしい。（4件）

埼玉・武蔵国の歴史。全国から見た武蔵国について、その他。（5件）

(8)　その他　10件

史跡保護に役立つ事業。史跡探訪。古典文学と「武蔵国」の資料化。連日講座の開設。庶民の暮らしに関するもの。考古中心でなく文献にもスポットを当てた企画。古文書に接する企画。埼玉県の歴史セミナーの開催。県外史跡のバスツアー。鎌倉見学会。

時代別・種類別に分類し、主な内容を併記した。(1)から(3)までは中世に関する事業の要望であり、全体の4割を超える。従来から中世の時代を中心に活動してきた当館の役割から当然の結果であるが、中でも(2)の戦国時代の城跡に関するものは以前人気が高いといえる。戦国時代や城跡を取り上げた企画展や講演会などの事業は、ここ数年来多くの博物館がテーマとして取り上げられてきた。当館でも平成16年度事業において、「埼玉の戦国時代　城」と題して企画展、シンポジウムを行い、好評を得た。今後もこの分野の事業への需要度は高いといえる。

(1)の武蔵武士などの中世武士に焦点を当てた事業の要望は、(2)と同等に多かった。今回の講演会・シンポジウムで武蔵武士を取り上げたことが参加者には新鮮な受け止めをもたらした結果と考えられる。一方でまた、「戦国時代」や「城郭」と同様に「武蔵武士」「中世武士」というジャンルには従来から高い関心が持たれているのも事実である。今回、鎌倉街道や武蔵武士関連の史跡がある地域からの参加者が多いのは、地元や郷土史との強いつながりを見出そうとする意識が読み取れる。

(7)については、比企地域以外の地域を取り上げてほしいとする意見が一定数あり、入間郡からの参加者が多いことからも、今後検討する必要がある。

この他、考古学の分野だけでなく、文献や伝承、古典文学など他分野との組み合わせを取り上げてほしいとする意見があり、今後新しい切り口の企画を考えていく上で参考にしたい。

9．その他、御意見・御感想・御要望がありましたら御記入下さい。（記述式）　全40件

(1)　講演会について　4件

峰岸先生の講演を多くお願いします。

質問は事前申込にすべき。

スクリーンがあった方が理解しやすい。

学会の発表ではないので成果の発表というより発見の経緯を交えての話が良く伝わります。

(2)　説経節について　4件

説経節はたいへん面白かった。ビデオを使った上演は有効でした。（同様の意見含めて3件）

ビデオ映写中にフラッシュ撮影しないよう注意してほしい。

(3)　シンポジウムについて　20件

発表者1人あたりの時間が少ない。テーマをしぼっても良いのでじっくり拝聴したい。（発表者の数を減らして発表時間を長くしてほしい、など同様の意見含む）　6件

マイクが悪くて良く聞き取れない。3件

（発表者の）話のペースが早過ぎてわかりにくかった。2件

今回のシンポジウムは専門的で難解。素人でも理解しやすい解説を。3件

専門家の方が多く素人には難解だったが興味を持てた。

司会は全員に分かりやすくよく聞こえるように進行してほしい。

パネリストに地元の郷土史家も参加させたらどうか。

「戦国の城」同様にシンポジウムの成果を本にしてほしい。

武蔵武士についてはこれからが本格的に研究される分野なので今後の発展に期待します。

県外の人にも分かりやすく告知してください。参加者にはがき等で案内してほしい。

(4)　当日の資料について　3件

資料がとても立派で敬服しました。

資料の有料は説明不足です。

資料代をとることについてはこの時代では当然のことと思われる。

(5)　スタッフの対応等について　2件

駐車場や会場への案内・誘導が良き届いていてとても良かった。

ボランティアの対応が良かった。長い間の資料館の活動の財産だと思います。

(6)　要望その他　7件

地元に関する歴史講演会はこれからも実施してほしい。（同様の意見含めて3件）

毎年このような事業をつなげてほしい。特に西部地域の歴史と貴館の重要性を考えて、埼玉県でも文化行政の中で特に力を入れてほしいと思う。（同様の意見含めて2件）

嵐山の博物館の存続を切に望む。

説経節や講演会、資料、スタッフの対応などに関しては、概ね好評だった一方で、シンポジウムの内容に関する改善要望が目立った。今後の事業の参考にしていきたい。

おわりに

今回はアンケートの集計結果についてのみ報告した。最後に、講演会・シンポジウム開催当日に御参加いただいた峰岸純夫先生はじめ中世研究者の皆様、実行委員会の関係各位、連日御協力いただいた埼玉城郭探訪会はじめ多くのボランティアの皆様に御礼申し上げます。

埼玉県の大型古墳一覧（1）

宮　　昌之

埼玉県教育委員会では、埼玉県立さきたま史跡の博物館の前身である埼玉県立さきたま資料館を実施機関として、平成元年度から5か年計画で、県内古墳の悉皆調査「埼玉県内所在古墳詳細分布調査」を実施した。その成果は「埼玉県古墳詳細分布調査報告書」として平成6年度に刊行されている。その後10年が経過し、新たな古墳も発見されている。また、データーの変更が生じた古墳も僅かながら存在する。

本一覧表は「埼玉古墳詳細分布調査」の調査データーをもとに、報告書刊行後に確認できた古墳を追加した。

前方後円墳・帆立貝形古墳

古墳名	所在地	現状	全長	後円径	前方幅	後円高	前方高	築造時期	埴輪	埋葬施設	特記事項	指定
白鍬塚山（しらくわつかやま）	さいたま市桜区白鍬	△		30		3		5-III	B		円墳？、剣形石製模造品	市
塚本塚山（つかもとつかやま）	さいたま市桜区塚本	△		35		6		4-III			前方後方墳？	市
井刈（いかり）	さいたま市大宮区三橋	×						6-III	○			
高稲荷（たかいなり）	川口市峯	×	75	50	27	9.5	6.5	4-IV	×	粘		
八兵衛山（はちべえやま）	川口市東本郷	×							伝		伝前方後円墳	
仙元祠（せんげんし）	鳩ヶ谷市坂下町	×	80～90								浅間社	
柊塚（ひいらぎづか）	朝霞市岡	△	(60)	(40)		(7)	(2)	6-II？	○	粘木	中開き扉付家形埴輪	県
峡山（はけやま）	朝霞市浜崎	△										
将軍塚（しょうぐんづか）	鴻巣市滝馬室（たきまむろ）	△	(30)			(1.7)	(1)	6-III？	○		馬室1号	
安養寺南（あんようじみなみ）	鴻巣市安養寺	△	30～40			2		6-III？	○		円墳？	
生出塚2号（おいねづか）	鴻巣市天神	×		(10)				6-III	○		4条突帯円筒埴輪	
新屋敷60号（しんやしき）	鴻巣市東	×	42.5	33	16.5			5-IV	○		周溝底にFA検出	
三島神社（みしまじんじゃ）	鴻巣市明用（みょうよう）	○	(55)	27.5	15	1.5	1.8	6-IV	○	横		市
ひさご塚（づか）	桶川市川田谷（かわたや）	×	41	27	20			6-IV	○	横	柏原1号　馬具	
柏原4号（かしわはら）	桶川市川田谷	×	25					6-III	○			
北袋1号（きたぶくろ）	北本市荒井	△	(20)						○			
中井1号（なかい）	北本市高尾	△	30			0.3		6-III	○	横		
下小坂4号（しもおさか）	川越市小堤	×	40以上	30		2.4		6-III	○	横	銅釧	
西原（にしはら）	川越市小堤	×	31.8	22	13.8	2.5		6-III	○	粘	漢尺で設計か	
南大塚2-4（みなみおおつか）	川越市豊田本（とよだほん）	×	(36)	(24)	(12)	(2)	0.9	6-III	○	横	第2支群4号	
二ツ塚（ふたつづか）	川越市豊田本	△		20		2				横		

古墳名	所在地	現状	全長	後円径	前方幅	後円高	前方高	築造時期	埴輪	埋葬施設	特記事項	指定
慈眼堂	川越市小仙波町	△	(45)									
日枝神社	川越市小仙波町	△							○			
牛塚	川越市的場	○	47	27	27	3.2	3.7	6-IV	×	横	大人塚、馬具	市
舟塚	川越市上老袋	△	50					6-III	○	箱？	円墳？	市
大類1号	毛呂山町川角	●	24.2	11	11.8	2.6	1.8	6-III			観音塚	
大類2号	毛呂山町川角	●	26			2.2		6-II	○			
塚原1号	坂戸市善能寺	○	(44)	28	24	3.8	3.6	6-III	○			
塚原2号	坂戸市善能寺	●	(45)	25	27	(5)	(4)	6-III	○			
塚原3号	坂戸市善能寺	○	(30)	13		(2.5)	(2.5)	6-III				
胴山	坂戸市石井	○	63.2	20	30	2.8		6-III	○	横	新町1号	
下小坂1号	坂戸市中小坂	○	40	19.4		3					浅間塚	
三福寺1号	坂戸市善能寺	×	36～40	24～28				6-II	○	直	挂甲・乳文鏡・珠文鏡	
塚の越1号	坂戸市小山	×	(30)		(9.4)				○			
雷電塚	坂戸市小沼	●	47	25.5	23	4.5	3.3	6-III	○			
長老寺跡	鶴ヶ島市鶴ヶ丘	×										
№60	鶴ヶ島市脚折	×	25			5						
諏訪山35号	東松山市西本宿	●	68			5.8	3	4-IV	×		諏訪山	市
諏訪山36号	東松山市西本宿	△		27		4.3		6-III	○		富士浅間神社	
高坂1号	東松山市高坂	○									高済寺	
反町遺跡第4号	東松山市高坂	×	35	30								
おくま山	東松山市古凍	●	62	40	15	7	2	6-I	○		盾持ち人物埴輪	市
下松5号	東松山市松山	×	27.5	16.5				6-I	○		弓を担ぐ人物埴輪	
岩鼻2号	東松山市松山	×	29.6	23.3					○			
野本将軍塚	東松山市下野本	○	115	56	40	13	8	6-I？	伝	礫？	4世紀後半説あり	県
雷電山	東松山市大谷	●	84	58	40	6	2	5-I	B	粘？	円筒埴輪III式	
弁天塚	東松山市大谷	×	37	25		4	1	6-III	○	竪		
秋葉塚	東松山市大谷	×	45	16	18	2	2.5	6-IV	×	横・竪		
長塚	東松山市大谷	×	36	22	13	4.2	2.2	6-III	○	横・竪		
白山	川島町出丸中郷	△	(50)						伝		横塚、前方後円墳？	
稲荷塚	川島町小見野	△	50					6-III	○			
三ノ耕地4号	吉見町久米田	○	21.8	15.2					○			
円正寺2号	滑川町福田	○	31	18	7	3.4	0.5	6-III	○	横		
月輪15号	滑川町月輪	×	25						○	礫木		
月輪42号	滑川町月輪	×							○			
月輪55号	滑川町月輪	×							○			
太田部3号	秩父市太田部	●	13.3	7.2	4	1.5	1.6				塚？	

古 墳 名	所　在　地	現状	全長	後円径	前方幅	後円高	前方高	築造時期	埴輪	埋葬施設	特記事項	指定
西五十子２号	本庄市西五十子	△	20.5	14.5	9			6－II	○		諏訪廻２号	
若泉稲荷神社	本庄市日の出	●		(38)		2.5						
大林二子山	本庄市日の出	×									馬具	
林５号	本庄市小島	×	(29)	(26.5)								
三杢山７号	本庄市小島	×	28.7	23			9.2		○	横		
下野堂二子塚	本庄市下野堂	×	(60)	(20)				6－IV				
前山１号	本庄市北堀	●	60			5		6－II		竪？		
長沖８号	本庄市長沖	×	26.3	19.7	9.2			6－IV	○	横		
長沖25号	本庄市長沖	×	(40)	(29)	(36)			6－II	○	伝横		
長沖31号	本庄市長沖	△	50.4			2.5		6－II？	○			
長沖32号	本庄市長沖	○	32.8			2		6－II？	○			
長沖十兵衛塚	本庄市長沖	●	37	21	23	3.5	3.5	6－II？	○	伝横		
長沖110号	本庄市長沖	×										
長沖137号	本庄市長沖	●	35			2.5		6－II？	○			
物見塚	本庄市児玉	●	58	42		4.6		5－II	×	竪？	生野山１号	
生野山銚子塚	本庄市児玉	●	54	37	31.5	5	4.2	6－I	○			
秋山諏訪山	本庄市秋山	●	60	36	39	5	7	6－II		横		市
塚原１号	本庄市秋山	△	25					6－III？	○			市
飯倉古墳群	本庄市飯倉	○	(36)									
美里諏訪山	美里町古郡		39	30	18	4	1	5－IV	B	箱	円筒埴輪IV式	市
大町両子塚	美里町猪俣	●	28	15	12	2	2.5	7－I	○			市
広木大町８号	美里町広木	×	(38.5)					6－III？	○	横		市
広木大町９号	美里町広木	×	32	24	(19)	2.5		6－II	○	横		市
広木大町72号	美里町広木	×	(35)	(28)	(7)			6－II？	○			
白石３号	美里町白石	×	31.5	22	15.6	1		6－II？	○	横	銅釧	
大仏二子塚	美里町白石	△	(43)	22	18	4.3	5	6－III	○	伝横		
生野山16号	美里町下児玉	●	58	38.5	32.5	5.5	3.5	6－II？	○	横		
熊谷後１号	美里町下児玉	●	(30)	(25)	13	2		5－IV	○			
元阿保稲荷神社	神川町元阿保	△	(25)			3					伝前方後円墳	
白岩銚子塚	神川町新里	○	46	28	29	6.5	4.2	6－II	○	横		町
北塚原９号	神川町新里	×	29	19	22			6－III	○	横		
南塚原９号	神川町新里	△	24.5	13.5	11.5	2.25	2.5	6－III？	○	横		
海老ヶ久保１号	神川町池田	○	30			3					№190	
城戸野20号	神川町新宿	△	(30)			(2.5)					№253	
中新里諏訪山	神川町中新里	○	41	(22)	20	3.5	2.5	6－III	○	横	馬具	市
八幡山	熊谷市玉井	×	36.2	28	19.1	2.5	1.5	6－III	○	横	№127 入定塚	

古墳名	所在地	現状	全長	後円径	前方幅	後円高	前方高	築造時期	埴輪	埋葬施設	特記事項	指定
二子山	熊谷市三ヶ尻	△	55	25		5	5	6-III？				
運派塚	熊谷市三ヶ尻	△	14		10	0.8	0.6	6-III？				
伊勢山	熊谷市楊井	×	41	19	19	3	3.5	6-III	○	横	馬具	
鎧塚	熊谷市上中条	×	43.8	31.8	12.5	(4)	(1)	5-IV	○	礫	獣形鏡、堀底にFA	
女塚1号	熊谷市今井	×	(45.5)	(36.5)	(19)			6-I	○	礫・礫	堀底にFA	
№197	熊谷市石原	○	34	28	19.1	2.5	1.5					
横塚山	熊谷市中奈良	△	30	22.5	12	3.2	2.5	5-IV I	○	礫？		市
野原	熊谷市野原	×	(40)	(16)		(5)	(2.5)	6-IV	○	横・横	踊る埴輪	
とうかん山	熊谷市箕輪	○	(74)	(37)	(40)	(7)	(6.3)	6-III	○			県
楓山	熊谷市箕輪	△	11			2		6-I			円墳？、伝銅鏡出土	県
東山1号	熊谷市冑山	×	45.4	25.6	14			7-I	×			
大境南1号	熊谷山市冑山	△	40	25				6-IV		横		
大境南2号	熊谷市冑山	×	36	19	14.5			6-IV		横・横		
黒田2号	深谷市黒田	●	41	(28)	12	4.2	1.6	6-IV	○			市
塚原11号	深谷市畠山	×						6-IV？			蛤塚、伝蕨手刀出土	
木の本10号	深谷市原郷	△	41	34	12			6-III	○		おとか塚	市
白山17号	深谷市岡里	×	28	(24)					○		弾琴埴輪	
寅稲荷塚	深谷市岡	●	51	26	34	3	3.5	6-III	○	横？		市
お手長山	深谷市岡	○	49.5	37.4	33.6	3.2		6-IV		横	銅鋺	市
二ノ丸4号	深谷市岡	×	(40)						○			
原ヶ谷戸5号	深谷市西田	×		17.6							円墳？	
千光寺号	深谷市山崎	×	28.1	22.7	11.5			6-III？	○	竪		
西山5号	深谷市山崎	○	31	17		3.5		6-IV	○	横		
小前田6号	寄居町桜沢	×	30	20					○	横	小前田2号	
稲荷山	行田市埼玉	△	120	62	74	11.7	(10.7)	5-III	B	礫粘	※1、二重周堀	国
瓦塚	行田市埼玉	●	73	36.5	47	6.8	7.4	6-II	○		弾琴埴輪、二重周堀	国
将軍山	行田市埼玉	△	90	39	68	(8.4)	(9.4)	6-III	○	横・直	※2、二重周堀	国
二子山	行田市埼玉	●	138	70	90	13	14.9	5-IV	○		二重周堀	国
愛宕山	行田市埼玉	●	53	30	30	3.4	3.3	6-I	○		二重周堀	国
鉄砲山	行田市埼玉	●	109	55	69	9	10.1	6-III	○		二重周堀	国
奥の山	行田市埼玉	●	70	43	47	6.8	7.4	6-II	○			国
中の山	行田市埼玉	●	79	42	44	5.1	5.4	6-IV	○		須恵質埴輪壺、二重周堀	国
若王子	行田市埼玉	×	95	44	56	7.4		6-IV		横	挂甲	
大人塚	行田市渡柳	×	(45)						○			
三方塚	行田市藤原町	×	(58)	30				6-II	○			
愛宕山	行田市藤原町	×	72.5	36.5					○			

古 墳 名	所　在　地	現状	全長	後円径	前方幅	後円高	前方高	築造時期	埴輪	埋葬施設	特記事項	指定
荒神山	行田市藤原町	×										
小見真観寺	行田市小見	●	112	55	48	8	7	6 -IV	○	横・箱	※ 3	国
虚空蔵山	行田市小見	△	(50)				3			横？		
酒巻 1 号	行田市酒巻	×	(46)	(20)	(28)			6 -IV	○	横 2		
酒巻 8 号	行田市酒巻	△	27以上	18				6 -III	○	横		
酒巻15号	行田市酒巻	×	(34.2)	(20.4)	(14.5)			6 -III	○	横		
とやま	行田市犬塚	○	(69)	(34)	(27)	(3.5)	(2.5)	5 -IV	B		円筒埴輪IV式	
真名板高山	行田市真名板	△	(104)	(40)	52	6	7.3	6 -III	○		二重周堀、5 m埋没	県
鶴ヶ塚	加須市町屋	△		(30)				6 -IV	○		円墳？・稲荷塚	
毘沙門山	羽生市上羽生	○	63	(35)	(40)	4.5	4.5	6 -IV	○	横？		
永明寺	羽生市下村君	●	73	36	42	7	7	6 - I	○	礫	挂甲・衝角付冑	市
御廟塚	羽生市下村君	△	(60)			3				横？	陶棺	
小沼耕地 1 号	騎西町上種足	×	39	26	13.3			6 -III	○	箱？		
塚内 9 号墳	春日部市内牧	△								横		市
天王山塚	菖蒲町上栢間	●	107	55	62	(8.5)	8	6 -IV	○	横？		県
本村 1 号	菖蒲町上栢間	×	(40)	20				6 -III？	○			
夫婦塚	菖蒲町上栢間	●	42	23	21	2	1	6 - I ？	○			
東 浦	菖蒲町小林	○	(60)	30	(20)	2.5	2.5	6 -III	○			
目沼 2 号	杉戸町目沼	×	(43)	20.6	13.4	1	1.5	6 -IV	○	横		
目沼 7 号	杉戸町目沼	×	(48)	22.5	(31)	(4)	(4)	6 -III	○	竪？	瓢箪塚・銅釧	
目沼浅間塚	杉戸町目沼	●	(50)	30.4		(5)		6 - II	○		目沼10号・円筒埴輪棺	町
目沼21号	杉戸町目沼	×										
目沼23号	杉戸町目沼	×										

古 墳 名：一段下がりは帆立貝形古墳

現　　状：●は破壊の程度が少ない少ないもの、○は半分近く破壊されているもの、△は一部だけ残っているもの、×は破壊された、または消失したもの

埴　　輪：ＢはＢ種横ハケをもつ円筒埴輪出土、伝は出土伝承があるもの

築造時期：推定されるおよその時期

埋葬施設：後円部の埋葬形態が２箇所の場合は併記し、前方部にある場合は・の右側に示した。横は横穴式石室、竪は竪穴系石室、木は木炭槨、粘は粘土槨、礫は礫槨、直は木棺直葬、箱は箱式石棺、伝は伝承のあるもの

特記事項：※１金錯銘鉄剣・環状乳画文帯神獣鏡・金銅帯金具・馬具

※２馬冑・蛇行状鉄器・銅鋺・馬具

※３挂甲・衝角付冑・銅鋺・頭椎・大刀・圭頭大刀・馬具

前方後方墳・前方後方形周溝墓

古 墳 名	所 在 地	現状	全長	後方長	後方幅	前方幅	後方高	前方高	築造時期	特記事項	指定
塚本塚山	さいたま市桜区塚本	△		35			6		4 -III	前方後円墳？	市
権現山２号	ふじみの市滝	○	31以上	21	21	10以上	2.4		3 -IV		県
中耕42号	坂戸市善能寺	×	28.5	17.4	(13)	(6)	0.8				
広面21号	坂戸市堀込	×	13	10.5	9.3						
諏訪山29号	東松山市西本宿	●	(22)	(22)	(22)	(22)	(22)	(22)	4 -II		
根岸稲荷神社	東松山市古凍	●	25以上	20			1.6		4 -II		
下道添２号	東松山市古凍	×	(22)	14.5	12.5	7.5			3 -IV		
柏 崎天神山	東松山市柏崎	○	(57)	14.5			(4)		4 -II	内行花文鏡・銅釧	
山の根	吉見町久米田	●	54.8	33.6	26.2	19.2	3	1.9	4 - I		
三ノ耕地１号	吉見町久米田	×	48.8	26.8	24.6	(18)					
三ノ耕地２号	吉見町久米田	×	30	18.8	19	(10)					
三ノ耕地３号	吉見町久米田	×	26.8	15.1	14.2						
鷺山	本庄市児玉 町 下浅見	●	(60)	(37)		(30)	(5.4)	(0.5)	4 - I	手焙形土器	県
塚本山14号	美里町下児玉	×	21	15	14					前方後方型？	
塚本山33号	美里町下児玉	×	18	13		5					
塚本山38号	美里町下児玉	×	18								
南 志渡川４号	美里町駒衣	×	25	15		(8)			4 -II		
村 後	美里町小茂田	×	(23)	(15)		(7)			4 -II		
塩第１支群１号	熊谷市塩	●	35.3	21	20	11.7	4.2	1.2	4 -II	狸 塚１号	県
塩第１支群２号	熊谷市塩	●	30	17.5	20.5	11	3.8	1.4	4 -II	狸塚２号	県
石蒔Ｂ８号	深谷市 後 榛沢	×	23	16.2	13	6.1			4 -II		

この一覧表は、「埼玉県所在古墳詳細分布調査」のデーターを基本としたが、他のデーターを用いたものもある。規模については計測方法等の違いから複数の値が示されている古墳もある。また、未報告書なものも知り得た範囲で表に含めた。現況・規模とともに、誤認があれば指摘していただきたい。遺漏もあると思われるが、あわせて次回に補いたい。

引用・参考文献

埼玉県『新編埼玉県史』資料編２　原始・古代　弥生・古墳　1982

埼玉県『新編埼玉県史』通史編１　原始・古代　1987

増田逸朗・坂本和俊・山崎武・山川守男・金子彰男・篠崎潔・鳥羽政之・平田重之「埼玉県における横穴式石室の受容」『第10回　三県シンポジウム　東日本における横穴式石室の受容』第２分冊　1989

埼玉県教育委員会『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』1994

塩野博・坂本和俊・増田逸朗・今井堯・鳥羽政之「埼玉県」『前方後円集成』東北・関東編　1994　株式会社山川出版社

横川好富「武蔵」『全国古墳編年集成』1995　雄山閣出版

塩野博『埼玉の古墳』〔北足立・入間〕〔比企・秩父〕〔児玉〕〔大里〕〔北埼玉・南埼玉・北葛飾〕2004　株式会社さきたま出版会

各古墳の参考文献は次回で示す。

松山城主上田氏の系譜と比企郡進出について

梅沢　太久夫

はじめに

武蔵松山城主上田氏については一九八五年発行の『東松山市史』で藤木久志先生の研究によって、それまで不透明であった上田氏の実像が明らかにされた。

上田氏の松山城在城については、これまで『鎌倉大草子』（『新編埼玉県史』資料編8―五六）に応永二十三年（一四一六）鎌倉六本松の合戦時に「上田上野介松山城主・疋田右京亮討死」と記されたことによりそれ以来、松山城の城主であった可能性が高いとされてきた。

筆者は、二〇〇六年二月に『武蔵松山城主上田氏―戦国動乱二五〇年の軌跡―』出版し、上田氏に関して、これまで進めてきた地方領主上田氏研究の一定の成果を公表した。

そこで、この研究を進め、検証して行く中で得られた資料を整理し、上田氏の武蔵比企郡進出の時期や、松山城主となった時期について再考したい。

一　上田氏研究の経過

松山城主上田氏については、『東松山史話』の中で吉見氏の出身と語られて以来、一九七一年に至るまでその研究の進展はなかった・利根川宇平は、一九七一年の『後北条氏研究』創刊号で、湯山学は一九七六年『関東戦国史の研究』で後北条領内の松山地方領主であった上田氏に初めて学問的なメスを入れた。

利根川が上田氏発給文書の検討を主に比企西部の在地武将の出身の可能性を指摘し、湯山は『小田原衆所領役帳』や『再草昌』の記録の分析を通じて、上田氏は、相模に本拠を置く武将で相模守護代にあった扇谷上杉氏の重臣の一人であったことを明らかにした。

そして、一九八六年の『東松山市史』で藤木久志は、上田氏に関わる史料を徹底的に調査収集し、その分析を通じて上田氏が

一、太田氏と並ぶ扇谷上杉氏の重臣で相模守護代にあった。

二、扇谷上杉氏の武蔵支配の先兵として比企に進出したこと。その年代は本土寺過去帳に応永二十年以降に没した松山在住の人物が記録されること等から、平一揆の乱によって高坂氏・竹沢氏が没落した間隙をぬって、十四世紀の終わり近くに進出した可能性が考えられる。

三、比企地方に在地性を扶植し、扇谷上杉氏滅亡後、後北条氏のもとで松山領の支城主の地歩を保った。

ことなどを明らかにし、上田氏研究の基礎を盤石なものにした。

筆者はこの藤木の研究に触発されて『武蔵松山城主上田氏―戦国動乱二五〇年の軌跡―』の中で上田氏関係史料の集成を図り、その年譜と事績を改めて整理した。そして、浄蓮寺に保存される『慶長八年過去帳』をデーターベース化し、五十八名を抽出。他の日蓮宗寺院の過去帳の記録と合わせ六十八名の上田氏一族の存在を明らかにし、その没年・法名・地域性などを整理して上田氏の系譜を作成した。そこでは永徳二年（一三八二）に上田氏が関東中世史上に出現してから、慶安二年（一六四九）

第1表　上田氏系譜（案）

		南北朝末期	杉禅秀の乱段階	享徳の大乱段階	実田城段階	権現山城段階	河越城段階	松山城攻防戦段階	松山城段階	江戸時代初期
		永徳2年	応永23年（1416）	享徳元年（1455）	文明18年（1486）　永正元年（1504）	大永元年（1521）	天文15年（1546）	永禄4年（1561）	天正10年（1582）　天正18年（1590）	元和2年（1616）　寛永9年
相模国東郡	備前守系　行系				（本）実田城にて没　（文）実田城討死 行尊（1486）（存） 備前守朝直 行本（1504） 存正 備前守息 妙寿（1504）	藤六 妙行（1521） 同息 妙定（1521） 行安（1520） 一存（1520） 行専（1522）	行宗（1546）		新三郎 （行）行蓮	
	河内守系　叡系		（本）鎌倉合戦討死 叡忠（1416） （妙）上野守 叡崇（1455） 叡順（1455） （本）鎌倉合戦討死 叡信（1416）		河内守 叡本（1496） 叡朝（1491）				天正18年松山城代 河内守 宗節（1594） （文）掃部助 （行）淨研 小田原城守 上野入道 （行）淨信 右京亮 淨覚（1588） 研理（文） （大見平） 又五郎 宗建（1589） 犬千世 （行）宗英 （永）	宗観
武蔵国比企郡	上野介系　宗系		（文）上野介・松山城主 貴道（1416） （文）鎌倉合戦討死 貴伝（1416）	小河在郷 上野介（1474生存） 某 （文）河越城将 上田入道某 （1477生存）	（文）実田城立て籠もり （右衛門尉） 宗伝（1496） （妙）上田内 秀幸（1496） （妙）次郎四郎 崇慶（1490）	（文）（妙） 上野守・上野入道正忠 宗詮（1520） （本）上田殿母儀 法詮 （本） 上田源二郎衆 （妙）同息 円宗 （妙） 寿伝 （妙） 宗珍		（妙）案独斎・暗礫斎 又次郎政広・上野介 蓮好（1571） 感応院殿 （東）案独斎母 妙芳 蓮池院殿 妙題（1564） 長清院殿 蓮久（1561）	左近大夫 能登守・案独斎 宗調（1582） 光賢院殿 朝直 上田氏女 妙位 自芸斎 上野介・案独斎 （文）広元・朝広・憲定 隆珙院殿 上野守簾中 妙上（1595） （文）悍珙院 妙俊兄 日能（1605） 玉縄ノ御前 （妙）案独斎息女 妙俊（1594） 北条氏勝内	（行）安心斎後日円 案独　（東）安独斎 日円（1616）　日忠（1633） 卿証院殿　（行）善次郎 善次郎母 妙受 （行）後ノ善次郎母 自芸斎広元末子 金崎佐渡守政秋 成蓮（1594） （円） 某 某 某
	蔵人能登守系　蓮系	蔵人親忠 希道 （文）1382生存）		蓮崇（1463）	中務丞 某（1488） （本）鷹野原討死 □	（文）権現山城立て籠もり 蔵人入道政盛（1510生存） 某 能登守 蓮忠（1518） 妙芳（板石塔婆銘） 妙忠（1522）	（左衛門尉政方） （文）（小沢原合戦） 蔵人（1530生） 某 蓮聖（1543） 上田内 蓮意（1546） （妙）長尾弾正女 下里袋方	小三郎 蓮順（1546） 河越夜戦討死 息 経寿（1544）	蔵人佐・能登守 妙賢院殿 蓮調（1583） 長則 蔵人佐・能登守（天正3年より） 妙賢院殿 蓮調（1583） 長則 （妙）能登守内室 妙栄（1573） （永） （行）前ノ善次郎 賢調（1590）	源左衛門母 妙調（1649）
	その他		註記（妙）妙本寺回向帳　（1234）没年 （行）行伝寺過去帳 （東）東光寺過去帳 （本）本土寺大過去帳 （円）妙円寺過去帳 （文）文書・記録 無　浄蓮寺過去帳			両山9世・上田氏親類 日純（1550）		慈徳院殿 法仁（1572） 法清 （行）上田殿御母 （文）左近 某 小机衆	難波田城主 周防守（仏像銘） 日道（1577） 大泉律師 （文）母は上田氏 日如（1626） 道証	

に大河原浄蓮寺の檀家の一人としてひっそりと消えるまでの二六七年の流れを示す事が出来た。

扱った史料について優劣が存在する事は承知しているが、地域研究を進めるにあたって、史料の優劣を初めに選択するのではなく、可能な限りの史料を収集して、その整合性を見極めながら大胆に検討していくことにした。そうでなければ、閉塞感のみが先行し、上田氏の研究を含め、資料の少ない地域史研究では、これまでのように進展が望めないからである。

二　上田氏の系譜

第一表の上田氏系譜は、相模国東郡グループに備前守・行系上田氏と河内守叡系上田氏が存在し、一方では武蔵国比企郡グループに別れ、上野介宗系上田氏と蔵人・能登守蓮系上田氏が存在することを示した。しかし、細部にわたってこの系譜を見ると、連綿と連なるように見える各系統の上田氏も、初期段階から権現山城合戦段階までは、系譜の継続性は確保されていない事が知られる。特に、希道（貴道）は蔵人の後、上野介を名乗った可能性が高いが、鎌倉六本松合戦で討ち死にした後は、上野介の系譜はやはり六本松合戦で同時に討ち死にした叡忠の子であろう叡崇に受け継がれている。この叡系は日蓮宗第四世日叡聖人にゆかりの法名で、日叡の時、上田氏が日蓮宗の信者になると『門徒由来記抄』（『東松山市史』資料編2―八二三）に記録される。この叡系が上田氏の本流であったのであろう。叡系は実田城合戦段階では河内守を名乗り、上野介は比企郡小河在郷で河越城将の上田氏が名乗っているが、これは相模国東郡グループの叡系から分流したもので、法名は「叡崇」の庶流系を示すと見られる「蓮崇」へと流れたと理解している。上野介系は「希道と共に鎌倉六本松合戦で討ち死にした叡系上田氏の叡崇」を経て、「小河在郷・河越城将・実田城立て籠もりの宗系上田氏の某」に移ったのである。

そして、これらの相模を拠点としていたことが伺える上田氏の系譜の内、叡系は実田城合戦、宗系は権現山城合戦、備前守・行系は権現山城合戦から河越合戦段階でその系譜が途絶えている。

その後、武蔵国に進出していた上田氏のグループでは永正七年（一五一〇）に蔵人入道政盛が権現山城に立て籠もり、敗れて逐電する。この上田氏はこれまでの上野介系とは異なり、円覚寺大般若経施主として最初に記録される「沙弥希道俗名上田蔵人源親忠」と同じ官途を持つ蔵人系の上田氏であった。この系譜は以後、蔵人・能登守系として継続することを考えると、この人物は『浄蓮寺過去帳』等に記される能登守蓮忠に比定される。そして、享禄三年（一五三〇）には上田蔵人（『鎌倉九代後記』）・左衛門尉政方（『上杉年譜』に上田入道ガ祖父）が河越城将として記録される。この蔵人・能登守系は法名に「蓮」を、俗名は「政」を通字としている。そして、文明十年（一四七八）段階に河越城将であった上野介系上田氏も権現山城に在城しているが、その人は権現山城に日蓮宗の九世日純を迎えた上野入道正忠法名宗詮（日現曼荼羅裏書〔名古屋市本住寺蔵〕『東松山の歴史上巻』五〇四頁）であった。そして、この宗詮・円宗並びに備前守行系の上田名字中は永正十七年（一五二〇）に没した。

三　上田氏の比企進出の時期

上田氏出現の記録は『金沢文庫研究』第八巻第九号に報告された『大般若経刊記』が初出であり、この時は源姓上田氏を名乗り、名は親忠、

第２表　上野介系・蔵人系上田氏の主な事跡

永徳２年（1382）	円覚寺大般若経施主	上田蔵人源親忠法名希道
応永23年（1416）	（松山城主）	上田上野介法名貴道没
文明６年（1474）	小河在郷	上田上野介
文明９年（1477）	河越在城	上田上野介
明応５年（1499）	実田城合戦	上田右衛門尉没
文亀２年（1502）	相模守護代上田の館	
永正元年（1504）	実田要害落城・朝直討死	上田備前守（上野守）朝直法名行本没
永正７年（1510）	権現山城立て篭もり・逐電	上田蔵人入道
	神奈川の城（権現山城）在城	上田上野入道正忠
享禄３年（1530）	河越城将（小沢原合戦出陣）	上田蔵人
天文15年（1546）	河越夜戦→安戸に後退	上田暗礫斎
同年	松山城奪回・２の丸守備	上田又次郎政広（暗礫斎）
天文16年（1547）	後北条氏松山城攻略	上田暗礫斎
天文17年（1548）	本門寺三門施主	上田左近大夫朝直
天文19年頃	松山城主・慈光寺攻略	上田案独斎朝直法名宗調
同年12月晦日	浄蓮寺へ所領寄進	上田案独斎朝直
永禄３年（1560）	秩父大宮合戦・氏康松山在城	
永禄４年（1561）	太田資正松山城攻略上杉憲勝城主	
	北条氏康・武田信玄松山攻め	上田又次郎政広（暗礫斎）『上杉年譜』
永禄６年（1563）	松山城後北条氏攻略	上田案独斎朝直
永禄12年（1569）	北条氏松山は上田の本領と主張	
天正３年（1575）	長則印判状に朱印使用	上田長則法名蓮調
天正10年（1582）		上田朝直法名宗調没
天正11年		上田長則法名蓮調没
寛永10年（1633）		上田善次郎法名日忠没
慶安２年（1649）	267年の上田氏の記録終わる	上田源左衛門母妙調没

官途は蔵人、入道して希道を名乗っている。

次に『鎌倉大草紙』中に「上田上野介松山城主」と記され、管領上杉憲基側の武将として応永二十三年十二月二日に起こった上杉禅秀の乱に管領上杉家の重臣の一人として参戦していた。この人物は『浄蓮寺慶長八年過去帳』で法名貴道と記される人物と同一人と推定される。この史料により松山城主上田氏の出現とされてきたが、筆者の先の著作で指摘したとおり、「城松主山」という記録は後補であった可能性が高い。そのほか、集成できた百十九の上田氏関係史料を年代別に整理し、そこで上田氏がどのように位置づけられているかを記したものが第二表である。これによって理解されるとおり、上田氏の比企郡在住が見られるのは『太田道灌状』（〔松平文庫所蔵文書〕『新編埼玉県史』資料編５―一〇〇三）に記される文明六年（一四七四）である。一方、上田中務丞が長享二年（一四八八）十一月の高見原合戦に討死（『本土寺過去帳』）し、上田氏の一族が扇谷上杉勢の一員として小河近郊での合戦に参加していたことが知られるが、この人物の在地性は伺うことができない。

また、傍証史料となるが、東秩父村安戸の上田氏家宰山田氏の「山田屋敷跡」と伝承される地点の裏山に所在する山田氏一族の五輪塔群の紀年銘は、須賀谷原で両上杉氏が激戦を繰り広げた長享二年には、山田伊賀守系が在地していた事を伺わせる。長享二年四月十八日に妙仁禅尼の没を記し、山田氏過去帳（『寛政諸家重修譜』）に安戸城主と記される伊賀守直義法名道存の五輪塔は、大永四年（一五二四）三月二十二日に没した事を記している。少なくとも十五世紀後半には比企に進出していたと考えて差し支えあるまい。また、先に示した蔵人・能登守系上田氏の蓮忠も武蔵国比企グループの上田氏の本拠と目される大河原谷に「主君蓮忠・君母霊位」等と刻された蓮忠に関係する板石塔婆が二基建立され、

小河近在に蓮忠家臣の存在が想定されるなど、その蓋然性は高いと言える。

その時、上野介系上田氏は『太田道灌状』の「上田入道并同名図書助(太田資常)勢衆相添、河越城差置候、」によって知られるとおり、河越城の城将として存在した。この年代までの史料からは、上田氏が松山城主であった事は知られない。

四　松山城主への過程

上田氏は文明年間の初め頃比企に進出し、小河に住していた。

『関東管領記』（『東松山市史』資料編2―七八三）

「一、同(天文六年)　七月十八日、氏綱大軍ヲ率シ、川越ヲ出テ松山ノ城へ押寄ス、松山城主難波田父子城ヲ出テ合戦ス、先懸軍、難波田聊雖得勝利、後途ノ合戦、北条方悉ク打勝、難波田敗北」

『広沢家系別録』（内閣文庫）『坂戸市史』中世資料編Ⅰ八五五頁）

「元家子ヲ尾張(広沢)守忠信ト云、法名ヲ道正ト名ク、道正古傍輩難波田弾正少弼其法名ヲ善吟ト云、武州松山之城主タリ」

によれば、天文六年の河越合戦では松山城は難波田善銀父子が城主として守っていた事を伝える。上田氏が松山城に現われるのは天文十五年四月の河越夜戦の上杉勢敗北時点であり、松山城に敗走した上田氏は落城と共に安戸の砦に引きこもったという。これらは『関八州古戦録』（『東松山市史』資料編2―八〇九）の戦記で語られる松山城攻防戦の幕開けを伝える逸話であるが、松山城西方の大河原谷一帯が上田氏の本拠として『北条氏康・同氏政連署条書』で主張されている事を考えると、この「逸話」は事実であったと考えて差し支えないと思う。

上田氏松山城築城は『北条記』（『新編埼玉県史』資料編八―三八七頁）に「上田左衛門尉トリ立シヨリ、難波田弾正父子久ク住シテ」

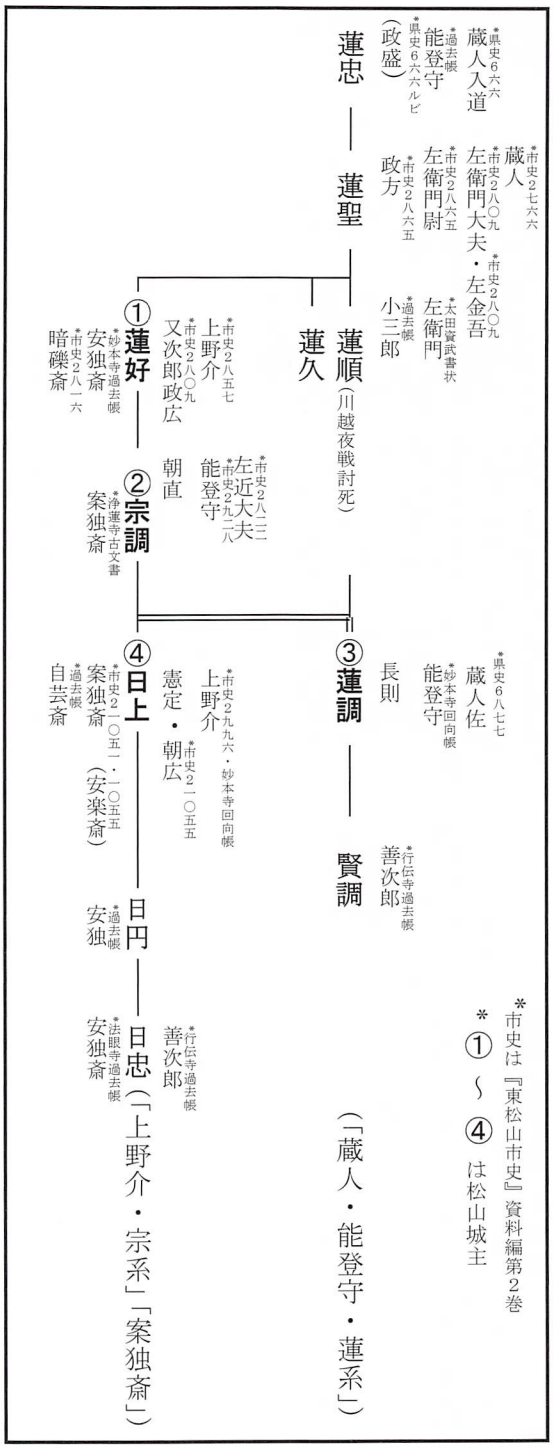
『上杉年譜八』（『東松山市史』資料編2―八六五）に「松山城ハ、上田入道カ祖父上田左衛門尉政方ト云者築立」と記録され、その根拠と推測される。上田入道（永禄五年の記録であり朝直）ガ祖父と『上杉年譜』に記される左衛門尉政方は系譜の検討によって河越城将であった上田蔵人法名蓮聖であったと推定されるので、おおよそ十六世紀初頭の時期であったのだろうか。上田氏が築城功者であったことは、『松陰私語第五』の「彼城者道真・道灌父子、上田・三戸・萩野谷、関東功者之面々、数年尽秘曲構」によって推測でき、このことは『歴史資料館研究紀要』第十一号で指摘した。しかし、松山城については、遺構の残り具合から上田氏築城の視点となる「小口前郭」が存在したであろうという指摘に止まらざるを得なかった。松山城の年代については吉見町の一連の発掘調査によって、十五世紀後半から十六世紀中頃の年代観が得られている。十五世紀後半は、比企地域でも長享の大乱を通じて築城が一般化する段階であり、上田氏比企進出期に該当する。左衛門尉政方とすれば、十六世紀前半となるだろう。いずれにしても、上田氏が比企郡に基盤を築き上げた段階である。仮に松山城が上田氏による築城としても天文十五年以前の資料に上田氏居城という記録が見られない事からして、『北条記』や『上杉年譜八』に記されるとおり、難波田父子が住していたと考えるべきなのだろう。ただ、難波田善銀が城主であったか、城代であったかについては判断する材料がない。

上田氏系譜を作成した中で理解された松山城主系は蔵人・能登守・蓮系上田氏が嫡流であったと見られ、その推移を一覧表に整理すると第三表のようになる。

第３表　上田上野介・蔵人・能登守系の「松山城主系」推移

	『太田道灌状』 上野介　某	上杉憲房書状 蔵人入道 上杉憲房書状解説 政盛	過去帳 能登守 蓮忠	上杉年譜 左衛門尉政方 鎌倉九代後記 蔵人	蓮聖	蓮久 長清院殿	蓮好 妙本寺過去帳 安独斎 感応院殿	関八州古戦録 又次郎政広 関八州古戦録 暗礫斎	比企氏系図 上野介政広 太田資武書状 闇礫斎	本門寺三門寄進状 左近大夫　朝直 浄蓮寺古文書 宗調 浄蓮寺古文書 案独斎　宗調 光賢院殿	清正公神社板碑 能登守 小田原衆所領役帳 案独斎	正法寺文書　妙本寺過去帳 蔵人佐　能登守　長則 蓮調 妙賢院殿	源栄院寄進状 上野介憲定 正法寺縁由・天正日記 安楽斎朝広　日上 小田原一手役之書立　過去帳 （案独斎）　自芸斎 隆珠院殿
文明　６年 1474年	小河在郷												
文明　９年 1477年	河越城在城 苦林合戦												
永正　７年 1510年		権現山城 （立て籠もり）											
永正１５年 1518年			12/26没				1520年上田上野守宗詮一族没						
享禄　３年 1530年				小沢原合戦 （河越城将）									
天文　２年												長則出生	
天文　６年 1537年				河越合戦・難波田弾正松山城へ敗退 松山城主難波田弾正正直（善銀）									
天文１０年 1541年				河越合戦									
天文１２年 1543年					12/8 没							長則10才	
天文１５年 1546年						4月20日　河越夜戦・後北条氏松山城攻略 8月28日上杉氏松山城奪回。闇礫斎城代　城代 10月5日　又二郎碓氷峠合戦に出陣							
天文１６年						12月13日闇礫斎・後北条氏に与力又次郎政広城主							
天文１７年 1548年										左近大夫朝直　城主 本門寺三門寄進			
天文１９年 1550年										案独斎宗調朝直 浄蓮寺へ山王免３貫文寄進			
永禄元年 1558年										「役帳」に案独斎			
永禄　３年 1560年						３月太田資正松山城攻略 10月北条氏康松山城在城							
永禄　４年 1561年						5/22没	９月太田資正松山城攻略 （申歳（永禄4年）一乱の砌者、父子共に小田原在城）						
永禄　６年 1563年							北条氏康、松山城を又次郎に元の如く守らせる。 安礫斎初め又次郎という。						
永禄１２年 1569年							４月（氏康書状に）「申歳一乱の砌者、父子共に小田原在城」						
元亀　２年 1571年							8/1　没			2/20 清正公神社に板碑造立 能登守朝直			
天正　元年 1572年												城主 （朱印使用カ）	
天正　３年 1575年										朱印使用		朱印使用	
天正　４年 1576年												蔵人佐	
天正　６年 1578年													
天正　９年 1581年												能登守	
天正１０年 1582年										10/3　没			
天正１１年 1583年												3/5没　50才	城主
天正１５年 1587年										亡父・慈父			上野介憲定
天正１８年 1590年													４月松山城落城

第四表　松山城主系上田氏の流れ　（比定された人物の位置や官途等については資料からの推定を含む。）



*市史は『東松山市史』資料編第2巻
*①～④は松山城主

天文十五年の川越夜戦以後、上田氏の松山城在城が記録されるが、この時点では、上田又次郎政広闇礫斎は二の郭防備の城将であった。

『太田資武書状』（〔斎田茂先所蔵文書〕『東松山市史』資料編2―八一六）

「一、（中略）然間、松山ノ城へも芳賀伊与守ニ随一之者共余多指添、被籠置候之処ニ、同年八月廿八日之夜、親ニ候者忍入、彼城を乗取、右楯籠者共を、或者討取、或者追落、終ニハ遂本望、在々所々掟等平均ニ申付、二度松山ニ令在城候処ニ、三楽斎兄ニ候信濃守、於岩付ニ病死、実子依無之、彼地江親ニ候者打入候砌、扇谷官領之舎弟七沢七郎、奥州辺ニ流牢候を尋出引取、彼七郎を取立、岩付ヨリよき者弐百騎付、松山之城主ニ仕候処、（中略）其節、松山ノ城ニ上田闇礫斎を為留守居頼置候処ニ、無其甲斐、松山之城を氏康へ相渡候、以其忠節、上田一跡ヲ過半闇礫斎ニ給由候」

この、記録等で知られるように、上田氏は川越夜戦で奪取された松山城を奪回した後、後北条氏に与力し、松山城主の地位を確保した事が伺える。その年代は『年代記配合抄』（〔内閣文庫〕『坂戸市史』中世資料編Ⅰ―二〇九四）によれば天文十六年の末であった。この時の上田闇礫斎（案独斎）は又次郎政広、或いは朝直と混用されているが、妙本寺回向帳（『太田区史』資料編社寺1）に安独斎蓮好と記される人物が闇礫斎政広であったと考えている。朝直の出現は天文十七年のことであり、官途は左近大夫、蓮好は『比企氏系図』に上野介を名乗り、武蔵国進出の嫡流系である法名「蓮」を継承している事からも推定できる。そして、『太田資武状』の記録との整合性が確認される。

『太田資武書状』（川越市一九七五『川越市史』史料編中世Ⅱ六七二頁）に「上田闇礫斎之筋者、檜皮山之上田トテ庶子にて候、惣領をハ上田左衛門ト申、武州松山之近所石山ト申候之城主にて候へとも、此の筋絶テ久罷成候故、不存者者、闇礫斎を惣領之様可申成候（後略）」

松山城主は蓮系の庶流であった政広を初代とし、二代朝直・三代長則・四代憲定と継続したことを示した。その流れは第四表となる。

『太田資武書状』に「松山之城を氏康へ相渡候、以其忠節、上田一跡ヲ過半闇礫斎ニ給由候」とも記される。復元した系譜にも実田城合戦・権現山城合戦を契機に一時断絶した相模東郡グループの上野介系・河内守系・備前守系を名乗る人物の法名が存在し、松山城主上田上野介系のもとでそれぞれが回復された事が伺える。

【参考・引用文献】

梅沢太久夫　一九八九「比企西部の三城について―特に小口に見られる共通性」『研究紀要』第十一号埼玉県立歴史資料館

二〇〇六『武蔵松山城主上田氏―戦国動乱二五〇年の軌跡』さきたま出版会

埼玉県　一九八〇a『新編埼玉県史』資料編六　中世二　古文書二

一九八〇b『新編埼玉県史』資料編八　中世四　記録二

一九八〇c「小田原衆所領役帳」『新編埼玉県史』資料編八付録

一九八二『新編埼玉県史』資料編五　中世一　古文書一

一九八八『新編埼玉県史』通史編二　中世

利根川宇平　一九七一「武州松山城主・上田氏について」『年報後北条氏研究』創刊号　後北条氏研究会

東松山市　一九八二『東松山市史』資料編第2巻

比企の城シンポジューム実行委員会二〇〇五『検証・比企の城』

藤木久志　一九八〇「松山城主案独斎のこと」『新編埼玉県史だより』（資料編6）

一九八五a「第五章第二節」『東松山市の歴史』上

一九八五b「第六章第二節扇谷の重臣上田一族」『東松山市の歴史』

湯山学　一九七六「扇谷上杉氏の被官上田氏―豹徳軒と案独斉―」『関東戦国史の研究』名著出版

太田賢一　二〇〇六『松山城跡発掘調査報告書』吉見町教育委員会

埼玉県立史跡の博物館紀要
創 刊 号

平成19年３月30日　発行

発行　埼玉県立さきたま史跡の博物館
〒361-0025　埼玉県行田市大字埼玉4834
TEL048-559-1111

埼玉県立嵐山史跡の博物館
〒355-0221　埼玉県比企郡嵐山町大字菅谷757
TEL0493-62-5652

印刷　朝日印刷工業株式会社
〒371-0846　群馬県前橋市元総社町67